
とある魔術の絶対重力 - ブラックホール-

プロジェクトE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の絶対重力 ブラックホール -

【Nコード】

N4837R

【作者名】

プロジェクトE

【あらすじ】

学園都市第3位だった御坂美琴を抜いて新第3位になった神無月有真。

襲い来る魔術師・超能力者。

科学と魔術が交差する時神無月有真の物語が始まる。

一話一話が長くなっています。

ゆっくり読みたい方はどうぞ。

感想は常時受け付けています。

感想を書いてくれるとモチベーションが上がるので、
書いていただければ嬉しいです。

第01話 ビリビリビリ言ってんじゃないわよー！

> i 1 9 5 2 2 — 2 6 2 2 <

「は……………」

「おい当麻、俺の真横で世界の終わりのような溜息をつくなよ」

そう、今日七月十六日は『^{7がつ16にち}能力測定^{システムスキャン}』の日だった。そのため午前中で測定の終了した俺こと神無月有真は、クラスメイトの上条当麻と第7学区にある学校から帰宅ならぬ帰寮している最中だった。

ここ、^{がくえんとし}学園都市は超能力開発を行う街だ。^{がくえんとし}学園都市はあらゆる教育機関・研究機関の集合体であり学校の授業として超能力の開発を行っている。^{がくえんとし}学園都市の人口の約8割は学生で日々自身の能力の向上に努めている。そして学生の能力レベルを測定する行事こそが^{システムスキャン}能力測定だ。^{システムスキャン}学生は定期的に能力測定を受けることが義務付けられており、その能力測定の日というのが今日だった。あと4日で夏休みという時期にあるこの検査は結果の優れない学生にとっては悪夢のような行事だ。そして、その悪夢の直撃を受けた人物こそ俺の隣で沈んでいる^{かみじょうとうま}上条当麻だった。

「溜息にでもしないと消化できないんです！ そりゃあ、毎度のことながら^{レベル0}無能力者だってことも^{システムスキャン}能力測定を受ける前から分かっていたことさ、ああ、分かっていたさ、でもそのせいで補習させられるのは納得がいかないんです！」

当麻の迫力に押されて若干たじろいでしまう。

「……あ、そうだ、今朝学校行くときになんか新しいクレープ屋が始まるって言うチラシもらったんだ。補習前の景気づけに奢^{おご}つてやるから元気出せって」

「マジですか！？ 今月の食費の入った財布を落として無くしてしまった私上条当麻にクレームを奢わたくしってくれと！？」

「俺の知らない内にまたそんな不幸に遭あつていたのか・・・というか奢おこるって言った瞬間に目をキラキラさせて土下座を敢行かんこうするな、なんだ一人大行列か！ ええい、止めるー！ 周りの視線が俺に突き刺さるー！！」

『常盤台中学』 ときわだいちゅうがく

二三〇万人もの学生を抱え東京都の三分の一の広さを誇る超能力開ちようのうりよく発機関『学園都市』かいはつきかん がくえんとしの中でも五本の指に入ると言われる名門の中学校だ。同時に世界有数のお嬢様学校もある。名門の名は伊達だてではなく入学は困難だ。その理由の一つは入学条件の一つに『強能力者レベル3以上』という区切りがあることだろう。どんなに財産があろうともこの基準をクリアできなければ入学することはかなわない。某国の王族の娘をあさり不合格にし、国際問題に発展しそうになったこともあるほどだ。逆に能力があれば入学することはできるのだ。また、常盤台中学は総生徒数二〇〇人以下という少人数制を採とっていることも入学を難しくしている。しかしこの基準のおかげもあり現在では『超能力者レベル5』を二人、『大能力者レベル4』を四七人も抱えるに至っている。才能あるものを集めその交流によってさらに才能を伸ばすこと、そして少人数制を使い一人一人を集中的に教育できるので高い能力を育てられること、それが名門の名を守っているのだろう。

常盤台中学には女子寮がある。校舎から走って20分ほどの距離にあり、常盤台の生徒はここからバスに乗り学校まで移動する。朝このバスに乗り遅れると全力で20分もの間走り続けなければ学校に間に合わない。走って20分の距離ともなるとかなりの距離だがそれでも学校の敷地内である。常盤台中学は隣接りんせつする4つのお嬢様学校と土地を共有し合うことで『学舎の園』まなびやのそのと呼ばれる普通高校の

約15倍もの面積の共用地帯を作り出している。

そんな常盤台中学女子寮の食堂の一角で学園都市に7人しかいない超能力者^{レベル5}の一人第三位の御坂美琴^{みさかみこ}は食後の紅茶を飲みながら午後の予定を考えていた。

（あゝ『能力測定^{システムスキャン}』も午前中で終わっちゃったし、午後はどうしよう。漫画は昨日立ち読みしてきたし）

今日は七月十六日の木曜日、美琴は毎週月曜日と水曜日が漫画の立ち読みの日と決まっていたけど昨日コンビニで漫画を読んでしまったばかりだった。いくらお嬢様学校の生徒といえども実態はこんなものである。典型的な絵に描いたお嬢様^{てんけいてき}というのは逆に珍しいくらいだった。美琴が午後の予定を静かに考えていると食堂の誰よりも大きな声が彼女の思考を分断^{ぶんだん}した。

「おーーーーーねーーーーーさーーーーーまーーーーー
ーーーー」

美琴が声の方を振り返ると予想通りツインテールの後輩が勢いよく走ってこちらに向かってくる。そう、このツインールの少女は白井黒子^{くろこ}、美琴を尊敬してやまない美琴のれっきとした後輩である。まあ、尊敬では済まないレベルで美琴を慕っているのだが。

「どうしたのよ、黒子。そんな必死な形相で走ってきて」

「どうしたのよ、黒子。ではありませんわ、お姉さま。そんなこと言っている場合ではありませんの。あー、悔しいったらありませんわ。どこの馬の骨とも知れない輩の分際でーーーー！」

「ちよつと、アンタは何をそんなに悔しがっているのよ」

「うー、お姉さまが、お姉さまの学園都市第三位の座がどこの馬の骨とも知れない輩^{やか}に奪われたんですの！これが悔しがらずにいられましようか」

黒子の大声が響き渡り食堂内は一瞬シンとなった。そして、次の瞬間には、

「ねえ、今の聞いた？ 御坂様が第三位の座を奪われたって話――

――」

と、食堂はその話題でもちきりになった。今の一瞬だけで学校全体の噂になるのが目に見えた美琴は頭を抱えた。そんな美琴の様子には気が付かない白井は自分の思いのたけをひたすらに語る。

「もう、黒子は悔しくて、悔しくて、それに聞いた話ではお姉さまの第三位を奪って輩は今まで超能力者^{レベル5}ですらなかったそうですよ。そんななどこの馬の骨とも分らない輩にお姉さまのポジションをとられたかと思うと、キー、いらいらしますの！　というわけでお姉さま今から真相を確かめに行きますのよ」
そういつて白井は美琴の腕をつかむ。

「ちよつと黒子、行くつてどこに行くつもりよ」

「わたくしの在籍する『風紀委員^{ジャッジメント}』の第177支部ですわ。あそこからなら『書庫^{バンク}』にアクセスできますから」

そう言つて白井は美琴の腕を取つてズンズン進んでいく。

腕を引つ張られズルズルと引きずられるようにして行く美琴だが内心では、

（私を超えて第三位になった能力者か、ちよつと戦つてみたいかも）
などと考えていた。そんな美琴の心情を読み取ったのか白井は、

「お姉さま、いま新しい第三位が誰かはつきりしたら戦つてみたいとか考えていたでしょう。　だめですよ、権限を持たない一般人が無闇に能力を使うと色々なところから睨まれますの。　それでなくともお姉さまは超能力者^{レベル5}、たださえ目立つというのにお姉さまと新しい第3位の超能力者^{レベル5}同士で戦つたりしたらどうなると思つていますの？」

「わ、分かつてるわよ、そのくらい。私だつてそのくらいの分別はあるわよ」

若干取り繕つたような美琴を白井がジト目で見るが、あきらめたようにつぶやいた。

「分かっているならいいんですの、でもお姉さま町の不良にからまれたときも能力で対処せず私たちを待つてくださいね」

そうなのだ、美琴は町でからまれることが多々ある。そんなときも

基本的に風紀委員を待たずに自分で何とかしてしまう。常盤台はお嬢様学校で有名なので金目当てで近づいてくる男も多い。しかし、常盤台のお嬢様たちがみな強能力者^{レベル3}以上であることも覚えておくべきだろう。何も知らずに近づけばあつという間にボコボコにされるのは目に見えている。確かにお嬢様ということもあり男に慣れていない者もいるが、美琴のようにあしらうのに慣れている者もいるのだ。

「うーん。 今度から少しは待つようにするわ」

白井はその今度が永遠に来ないような気がして溜息をつき、あきらめた。

周りの視線から逃げてきた神無月は再び歩く速度を落としていた。

そんな神無月に上条は問いかけた。

「それで、そのクレープ屋ってどこにあるんだ？」

「ん？ ああ、第7学区ふれあいひろばって書いてあるからすぐ近くだな」

「そうか、良かったー」

当麻は何か素晴らしく安心した顔をしている。

「何をそんな安心した顔で喜んでるんだ？」

と神無月が上条に問いかけると上条は『そんなことも知らないのか！？』といった顔になった。

「今日は木曜日だぞ！？ スーパーでお肉のタイムセールがあるから間に合うか気になったに決まってるだろ！」

「知らねえよそんなこと！ 確かに安売りしてたら嬉しいけど、そんな曜日ごとの安売り品まで把握してねえよ！」

「くー、ブルジョワめ。 貧乏学生^{ふとくせい}の懐具合^{ふとくしあひ}をなめんな！ ん、待てよ・・・今日は俺だけじゃなく神無月もいるんだからセール品が2倍買えるんじゃないか！？ お一人様一パックのお肉が2パック

買える！ ふ、ふふ、ふふふふ」

「・・・」

クレープを奢るだけじゃなく、食材漁りにも付き合わされるのかと神無月は一人溜息をついた。

「ここがわたくしの所属する第177支部ですわ」

食堂を出た二人はバスと徒歩を駆使して風紀委員《ジャツジメント》の第177支部まで来ていた。白井の能力は『空間移動^{テレポート}』で美琴と共にここまで移動することも可能だが、学園都市では緊急時と授業以外での能力の使用は基本的に禁止されているので結果としてバスと徒歩という移動手段になったのだった。

「へー、アンタの仕事場ってこんなところなんだ。今まで来たことなかったから少し新鮮」

美琴が支部内を見回す。室内は、企業のオフィスのような雰囲気、壁際には落し物を保管するラックやプリンターなどが置かれている。大きめの棚には過去の事件の記録などを保管しているのか広辞苑よりも分厚いファイルがいくつも並んでいる。また、荷物も多いように段ボール箱の壁ができています。ほかに、休憩用のソファと作業用デスクがいくつか置かれていた。美琴が室内を物珍しそうに見ていると知らない少女の声が美琴の隣にいた白井にかけられた。

「あれ、白井さん？ それにそちらの人は誰ですか？」

大きな棚に隠れて見えなかった奥の作業用デスクの前の椅子に腰かけていた少女が白井に話しかけた。黒髪のショートヘアのほんわかというか飴を転がすような甘ったるい声の少女で、髪飾りが特徴的な少女だった。彼女の髪飾りは造花で遠目に見ると花瓶を頭に乗っているのではないかと思うほどの数があった。その少女の隣には長い黒髪に白梅を模した髪留めを付けた少女がいた。どちらも同じ学校の制服を着ている。

「ああ、初春이었습니다の。 お姉さま、こちら柵川中学^{さくがわちゅうがく}1年の初春^{ついはる}飾利^{るかざり}さんですの」

「初春飾利です。 よろしくお願いします」

初春は美琴が白井と同じ常盤台中学の制服を着ていることに気が付いたあたりから緊張しているようだった。

「えっと、初春そちらは？」

白井は初春と一緒にいたもう一人の少女の方を見る。

「あたしですか？ あたしは初春のクラスメイトの佐天^{さてん}涙子^{なみこ}です。

初春の親友やってます」

二人の名前を聞くと今度は自分がと美琴が名乗る。

「初春さんに佐天さんか、私は常盤台中学2年の御坂美琴よろしくね」

美琴は名乗ると同時にニコツと笑った。すると初春がすぐに食いついた。

「え！ もしかして超能力者^{レベル5}の第三位超電磁砲^{レベルガン}のあの御坂さんですか！」

ものすごい食いつきように美琴は少したじろいだ。そして初春の問いには白井がすぐさま答える。

「そうですの、常盤台中学のエース超電磁砲^{レベルガン}の御坂美琴といえばお姉さまのことですわ」

うわー本物だーと初春と佐天はテンションを上げている。そこで初春ははたと気が付いた。

「そういえば、白井さんも御坂さんもうして今日はここに？ 白井さん今日はお仕事の日じゃないですよね。 緊急な事件も起こっていないですし」

白井は初春の言葉にはっとした顔になると叫んだ。

「何をいつていますの、緊急に決まっていますわ！ お姉さまが第三位ではなくなったとの噂がありましたのよ。 だからわたくしたちはその真偽を確かめに来たんですのよ！」

「え、ホントですか白井さん！？ そういうことなら私も手伝いま

すよ」

「お願いしますわ、初春。その手のことはあなたの方がわたくしよりずっと速いですから」

ハイというが早い初春はコンピュータのキーボードをすごい勢いで叩き始めた。書庫バンクにアクセスしているのだろう。少しの間4人がコンピュータのディスプレイに注目しても静かになった。そして初春のキーボードを叩くカタカタという音だけが響く。

「ありました美坂さんのデータ。あ、ホントみたいです、確かに第四位になっています」

確かに画面に移された美琴のデータには第四位と書かれていた。

「初春、お姉さまの上に現れた現在の第三位も調べてもらえますか？」

「大丈夫です、そっちも調べてあります」

初春がエンターキーを押すともう一人のデータが画面に出力された。

（名前：神無月有真 かなづきゆうま レベル：超能力者 レベル5 順位：第三位 能力：絶対重力 ブラックホール）へえ、こいつが新しい第三位ってわけね。おもしろいじゃない、どこかで出会ったら戦ってみたいわね）

美琴がそう考えていると佐天は能力に疑問を抱いた。

「絶対重力？ ブラックホール どんな能力なんでしょうねこれ。御坂さん分かりますか？」

「うーん、私も聞いたことない能力名ね。黒子分かる？」

「わたくしも聞いたことがありますわね。初春は分かりますか？」

「ちよつと待ってください、それも今調べます」

初春がカタカタとキーボードを叩くとそれらしい記述が見つかった。

「未知素粒子制御系の能力の一つで重力を制御する能力、だそうです。でも、これ以上は何も書かれていません」

「重力か、今までに見たことのない能力ね。ねえ、こいつの写真ってないの？ 私のデータには写真が載ってたのに。」

「このデータ更新されたのが今日の午前中みたいで写真までは載ってないみたいです。でも普通なら昔の写真くらい載せると思うんですけど」

美琴は少し残念そうな顔をしたがすぐに笑って初春を労^{ねぎ}つ。

「そっか、載ってないか。わざわざごめんねこんなこと調べさせちゃって」

「いえいえ、こんなことぐらいお安いご用ですよ」

二人の会話の最中、白井は美琴が写真を見れなかったことに逆にホッとしていた。

（お姉さまのことですし、写真があれば相手を見つけて戦うに決まっていますの。今回ばかりは書庫^{バンク}のデータに写真が載っていないくて助かりましたわ）

とりあえず、相手の名前と能力は分かったがそれ以上の成果は無かった。そして、午後にやることもまた無くなってしまったのだった。「それにしてもまた、やることが無くなっちゃったわね、これからどうする黒子」

「そうですね、どうしましょうか」

と悩む二人に佐天が声をかけた。

「御坂さんと白井さんこれから暇なんですか？ あたしと初春はこれから何かキャンペーンやってるっていう新しいクレープ屋に行くつもりなんですけど一緒にどうですか？」

そう言つて佐天はそのクレープ屋のチラシを見せた。

「えーと、なになに、クレープ屋らぶるん第7学区ふれあい広場NEW OPEN先着100名様にゲコ太紳士Verマスコットプレゼント、こんなことをやっているんですの。せつかくですから行ってみませんかお姉さま？ ってお姉さま？ どうしたんですのぼんやりしたりして」

美琴の目はチラシにくぎ付けになっていた。

「えっ何、なんか言つた黒子？」

白井は視線をもう一度チラシに戻し、読みなおす。

「いえ、お姉さまがずいぶん熱心にチラシを読んでいるものですから、お姉さまはクレープ屋さんにご興味が？それとももれなくついてくるプレゼントの方ですか？」

すると美琴は顔を赤くして否定する。

「わ、私はそうクレープに興味があるのよ。　ゲコ太になんて興味ないんだから、だってカエルよ両生類よどこの世界にこんなものもらって喜ぶ女の子が・・・」

そう言った美琴のカバンからゲコ太（通常Ver）のストラップがはみ出しているのを初春と佐天は気が付き思わず口からあ・・・という声が出た。二人の視線に気が付いた美琴は顔を赤くして驚きの表情で固まる、白井はこらえきれずに口を手で押さえながらプププと笑った。

「うわ、すっごい人」

「何でこんなにちっちゃい子が？」

佐天と初春は尤もだった。クレープ屋のある第7学区ふれあい広場は、大勢の子供たちであふれていた。どうやら、学園都市内の学校に入学する子供たちとその保護者が下見のために大型バスで見て回っていたようだ。そして、ちょうどこのふれあい広場で休憩することになったようだ。この人数なのでクレープ屋にも既に列ができている。その最後尾に4人は並ぶのだった。

「休憩は一時間ですー。あまり、遠くに行かないでくださいねー」とバスのガイドが大きな声で呼びかけている。

それを聞いて初春は白井に話しかける。

「どうも、タイミングが悪かったようですね」

「そうですね、わたくしは先にベンチを確保してまいりますわ」これだけの人がいると座る場所の確保は難しくなる。折角クレープを買うのだからゆっくり食べたいのが人情だ。こんな炎天下の中立ちながらクレープを食べるのはあまりいいものではない。そういうわけでの白井の提案だった。

「あ、じゃあ私も、佐天さん私たちの分お願いしますね。」

「お金は後でお支払いしますわー」

二人は4人の中で一番先頭にいた佐天にクレープを頼んだ。

「え、ちよっ・・・」

後ろを佐天が振り向くとすでに初春と白井は座る場所確保に移動してしまっていた。そして、美琴は腕を組んで指でとんとんの腕を叩いている。ゲコ太（紳士Ver）は限定100個なためかなり焦っているようだ。そんな美琴を気遣って佐天は言う。

「・・・御坂さん、順番換わります？」

そんな佐天の言葉に美琴はパツと一瞬顔を輝かせたが、すぐに表情を戻して取りつくろふ。

「べ、別に順番なんて。私はクレープさえ買えたらそれでいい――」

一度興味ないと言ったのでプライドのためか断ってしまう。そんな美琴の横を子供たちが駆けていく。

「やった、ゲコ太ゲットー」

「わたしもわたしも」

そんな子供たちを美琴の視線は羨ましそうに追いかけていく。それを見た佐天は苦笑いで溜息をついた。そして佐天の順番が回ってきて注文していたクレープを手渡される。

「お待たせしましたー、はい、どうぞ、最後の一個ですよ」

おまけのゲコ太マスコットもついてきた。

「あ、どうも・・・って、え、最後？」

そう佐天が聞いた瞬間に後ろの美琴が膝について崩れ落ちた。

「あ~~~~~」

こんな日差しの強い晴れた日だが、美琴の周りだけ暗くなるような負のオーラがまき散らされている。そんな重い空気に耐えきれなくなった佐天は美琴に話しかける。

「・・・あの」

美琴がゆっくりと佐天の方を向く。その目はとても羨ましそうな色をしている。

「よかつたら、これ」

と佐天がゲコ太マスコット（紳士Ver）を差し出すと、美琴は今までに見せたことのない俊敏さでゲコ太マスコットを佐天の手ごと握り締める。まるで、カマキリが獲物をとらえるかの如きスピードだった。

「え、いいの、ホントにいいの!？」

すでに手は標的であるゲコ太を掴んでいる。

あまりの勢いに佐天は後ろに若干後ろに下がりつつ答える。

「ええ」

「ありがとーーーーー!」

「い、いえ・・・」

美琴は佐天の手を握りながら、力いっぱい頭を下げる。すでにプライドとやらはどこかに消えてしまったようだった。その後、初春たちのところに戻る美琴はスキップに口笛というとてもふわふわした足取りだった。

「ほら、お姉さま遠慮なさらず」

「いらないうって言ってるでしょ! 何よトッピングに納豆と生クリ

ームって!」

そのチョイスする白井も白井だが、売る側も売る側だと言わざるを負えない。

そんな他愛もない話をしていると楽しげな空間をぶち壊す大声が響き渡った。

「おら! 近づくんじゃねえ! それ以上近づいたらこのガキぶつ殺すぞ! ガキぶつ殺されなくなきゃ、金を用意しろ! 今すぐ3000万だ!」

その声と共に爆発音と拳銃の発砲音が聞こえた。4人の座っていたベンチの後ろに通っている道路の真ん中で3人の男が子供を人質に

取り拳銃を向けているのだった。

「な、何？ なんなの？」

佐天は驚いていたが、白井と初春の行動は迅速^{じんそく}だった。二人は即座に風紀委員^{ジャッジメント}の腕章を付ける。白井は残っていたクレープを全部口に押し込むとベンチを乗り越え道に出る。その際、初春への指示も忘れない。

「初春、警備員^{アンチスキル}への連絡と怪我人の有無の確認、急いでくださいな」
それだけ言うとともに犯人の指定したラインギリギリまで接近していった。初春はすぐに白井の指示通り警備員^{アンチスキル}への連絡を始めた。

「はい、そうです。第7学区ふれあい広場前の道路で子供を人質にとった身代金要求事件発生警備員^{アンチスキル}の出動を要請します。」

それらを見ていた美琴は自分もと白井の方に走って行ってしまった。美琴が犯人の指定したラインのところに付くと、子供たちの親とバスのガイドがいた。

「お願いです、息子を、息子をどうか返してください！」

「うちの娘もです、返して下さい！」

「子供たちを返して！」

ラインギリギリから犯人に向かって悲痛な叫びが投げかけられる。

「うるせえ！ 返してほしけりや金寄せって言うてんだろーが！」

「っ！」

（何、あいつら・・・子供を盾にしてまで！ 許せない！）

美琴は今のやりとりで頭に血がのぼってしまふ。そんな美琴の体の周りでバチバチと電気が渦巻く。聞き覚えのある電気の奏でる音で美琴に気が付いた白井はすぐに美琴を止めに入る。

「お姉さまなんでここに来ているんですの！ まあ今はそのことはいいですわ。とりあえず落ち着いてくださいませ。迂闊に攻撃したりはしてはいけませんわ。」

「子供たちが捕まってるのよ！ 眺めてるなんてできないに決まってるでしょ。」

「駄目です、お姉さま。お姉さまも見えてでしょう、犯人は子

供の頭に銃を向けているんですの、攻撃したりしたら子供たちの命が危険なんですのよ。仮に犯人を3人とも倒せてもお姉さまの電撃で銃が暴発しないとも限らないんですの。だから、今は堪えて下さいですの」

美琴は分かってしまった。今の自分にできることはない。自分の出る幕ではないのだと。

「っ、なんで、なんで見ていることしかできないの。私は超能力者《レベル5》なのに。なんでこんなに無力なの？ こんなときに使えない能力じゃ意味ないじゃない・・・」

「お姉さま・・・」

白井は美琴の言葉を否定することも美琴を励ますこともできずに、ただ言葉をかけたい相手の名前を呟くことしかできなかった。

犯人の様子と子供の親の様子・そして何もできないことに苦しんでいる少女たちの姿をひろばとは道を挟んで反対側にいた2人の少年が見ていた。一人は170cmくらいの身長に黒髪をツンツンと立たせた少年。もう一人は170cmくらいの身長にオレンジみがかった茶髪を少し長めにしたような少年だった。そのうちの茶髪の少年が黒髪の少年に問いかける。

「なあ、当麻。俺はあの子供たちを助けようと思うんだけどさ、お前は どうする？」

聞いて少年は聞く必要は無かったなと思った。なぜなら、黒髪の少年の目にはすでに火が点いていたからだ。

（やる気満々だな、といつても俺も人のことは言えないか）

「どうするも何も助けるに決まってるだろ」

「言うと思ったぜ、じゃあ銃口が次に子供の頭とは違う方向を向いたら俺が一番手前の男と左奥の男をブツ飛ばす。当麻は右奥の男を頼む」

「ああ、まかせろ」

そうして二人の段取りは決まりそのときを待つばかりになった。

「おい、さつさと金を用意しねーか！」

あれから10分ほどが経ち犯人たちはしびれを切らせていた。たった10分と思うかもしれないが、犯罪を現在行っている人間の10分は1時間に匹敵するほど長く感じられる。周りからの視線やここから攻撃されやしないかという不安、今自分たちの行っていることへの恐怖からとても長く感じられるのだ。そんなとき、犯人の一人は自分たちが決めたラインのすぐ近くに白井のすがたを見つけた。正確には、ジャッジメント風紀委員の腕章を付けた白井の姿を発見したのだった。

ジャッジメント風紀委員は、自ら志願して学園の治安を維持する学生だ。この学園都市での治安維持は風紀委員の学生と警備員アンチスキルの教師で成り立っている。そのうちの片方が現場にいたのだ。犯人にしたらこれ以上の恐怖は無い。しかも、警備員は武装はしていても普通の大人、しかし風紀委員で前線に出てくるものは基本的にかんりの高レベルの能力者、単独なら注意しなければいけないのは完全に後者だ。

「おい、そこのお前風紀委員だな！ 一番前に出てこい！」
ジャッジメント

白井は自分のことを呼ばれたのだと気が付くと犯人の方へ顔を向ける。そんな白井に美琴は声をかける。

「黒子！」

「大丈夫ですわ、お姉さま、黒子はちゃんと仕事を終わらせて帰ってきますの」

そういつて白井は犯人の定めたラインの一番前に立ち、宣言する。
ジャッジメント

「風紀委員ですの、おとなしく子供たちを解放してくださいですの。そうすれば罪も軽くて済みますわよ」

「馬鹿がそんなこと言われたからって引きさがれるかよ、先に言っとくぞ変な動きを少しでもしたらガキの命はねえからな。 おとな

しくしてるならガキには手を出さない、だが、お前は厄介そうだ、お前は先に片付ける」

そういつて男は銃口を白井にむける。銃口を向けられても白井はまだ余裕があった。

（大丈夫ですよ、銃弾をレポートでかわして、犯人の銃を金属矢^{ダーツ}によって近距離から正確に撃ち抜く銃さえなくなれば子供たちを助けられますの）

さつきまで、金属矢^{ダーツ}で銃を撃ち抜かなかったのは予想以上に犯人が銃を同じ位置に固定しないからだった。誤って子供に金属矢^{ダーツ}が刺さるのだけは避けたかったのでいままで攻撃しなかったが、近距離まで近づけば確実に当てられる。だが、そこでレポートしようとしていた白井は違和感を感じ、その違和感はずぐに確信へと変わる。

（わたくしがレポートしたら銃弾はわたくしの後ろの方々に当たる！？ まさか彼らはこれも見越して！？ これでは避けられないじゃありませんの！ まずいですわ、このままでは殺^やられるしかないじゃありませんの）

黒子の今の状態に気が付いた美琴は大声を上げる。

「黒子——！」

美琴の声が白井に届いた。そして、銃をもつ男の顔が泣き笑いのよな歪んだ顔になり銃弾が発射された。白井の目には銃弾が自分に向かって飛んでくるのが見える。

（ああこれが死ぬ間際のスローな世界ってやつですね。ああ、もつとお姉さまと一緒にいたかった。まあ、お姉さまたちも盾になって死ねたのなら本望ですわ）

白井があきらめかけたときその声は響いた。

「なーにあきらめたような顔してんだよ！ こんなことくらいで人生投げ出してんじゃないやねえ！」

白井の目の前にオレンジみがかった茶髪の少年が勢いよく横から飛んできた。

そんな銃弾^{こど}くらいどうにでもなると、だから安心して後ろにいろと

言うように、その少年はまさに英雄^{ヒーロー}のように現れた。

白井は気が付いた、銃弾が遅く見えていたのは死ぬ間際だったからじゃない。世界の動くスピードが極端に遅くなっていることに。犯人も美琴も白井自身もほとんど動くことができない。そんなスローの世界の中をただ一人の少年だけが普通の速度で動く。銃弾すら1秒に5mmも動かないような世界を。その遅くなった銃弾を少年は素手でつかみ取り地面に叩きつける。そして、犯人たちにだけ聞こえるように呟いた。

「なあ、知ってるか？ 時間ってというのは必ず一定じゃないんだぜ。強力な重力の前では時間すら歪んで遅くなる。そんなにのろろしてたら100年たっても俺には追いつけねえ。少しはまともに動いてみるよ」

そう言った次の瞬間世界の時間の進み具合が元に戻り、遅い時間の流れの中で思いつきり前に出ようとしていた白井は盛大に前につんのめる。白井の方を既に見ていなかった茶髪の少年はそのことに全く気が付かず次の行動に移っていた。少年は時速200kmぐらいの速度で一番手前の犯人の右上方まで移動すると側頭部にとび蹴りを喰らわせていた。ドゴツという鈍い音が響き蹴りを喰らった犯人は10m近く蹴り飛ばされ動かなくなる。

「まずは、一人め」

そして、続けざまに左奥の犯人の腹に手を触れる、するとその男の体はフツと浮き上がり近くのビルの壁まで吹き飛びめり込む。その衝撃で壁にクモの巣状の亀裂が走った。

「二人目」

その間わずか0.3秒。だが、右奥の男はまだ残っている。

「何なんだデメエは！ 俺たちの邪魔をすんなー！」

その男は発火能力者^{パイロキネシスト}だったらしく右手から炎を上げて茶髪の少年を燃やそうとする。しかし、その男の思惑はすぐに打ち破られる。茶髪の少年と犯人の間に割って入った黒髪のツンツン頭の少年がいて、彼の右手が犯人の炎に触れると、まるで蠟燭の火を消すがごとく簡

単に炎は消し飛ばされてしまった。犯人は驚きのうちに黒髪の少年の拳に顎を撃ち抜かれその場で崩れ落ちた。

「サンキューとうま、ナイスなタイミングだった」

「神無月もさすが新第三位だな」

そういつて二人はハイタッチした。

その様子を車の中から眺めていた男がいた。車は青のスポーツカーで改造によって時速500kmまで出せるようになっていた。この車の中に乗っていた男も犯人グループの一人だった。金が届いたら仲間を拾って急いで車で逃亡する予定だったのだ。それなのに、たった2人の学生に仲間3人があつという間にのされてしまい、金も手に入らなかったのだ。

「クソ、こんなはずじゃなかったのに。 今回の計画にどれだけ時間をかけたと思っているんだ！」

彼らはこの計画を実行するに当たり、銃器の入手から、車の改造、逃走経路の確認、潜伏先の確保、とかなりの時間を使っていた。大体1年以上の時間をかけて計画していたのだった。それがものの数秒の間で見事なまでに粉碎されたのだ。

「こうなったら全員まとめて・・・」

そうつぶやくと男は車のエンジンをかけた。

神無月と上条は捕まっていた子供たちの手を引いて親のいるところまで連れていった。子供たちは今になって恐怖がよみがえったのか親のところに泣きながら走って行く。

「ママ——、パパ——」

「おと——さ——ん、おかあさ——ん」

子供とその子の両親が固く抱き合う。なんとも感動的なシーンだ。少しすると子供と親がこちらに歩いてきた。

「息子がありがとうございました。本当になんと御礼を言っているのか。ほら、雄哉もお兄ちゃんたちにありがとうって」

「おにいちゃんたちたすけてくれてありがとう、ぼくもおおきくなったらおにいちゃんたちみたいにつよいひとになってこんどはぼくがおにいちゃんたちをたすけるからね」

神無月は頬を緩めるとその子の頭に手を乗せてなでながら言う。

「おう、楽しみにしてる。」

子供たちの親とバスのガイドさんから御礼を言われた神無月と上条は一息ついた。そこに美琴と白井がやってくる。そして白井が先に切り出した。

「さっきは助けてくださりありがとうございますの」

「ん？ いや、気にすんなって、こっちも好きでやったことだし」

「ところでお名前をうかがっても？」

先に応えたのは上条だった。

「俺は上条当麻よろしく」

「上条さんですの、わたくしは白井黒子こちらこそよろしく願いますわ」

白井と当麻は握手した。

「次はあなたの名前をうかがっても？」

「ああいいぜ、俺は神——」

と神無月が名前を名乗る前にバカでかいエンジン音が響き渡った。そちら側を見ると青いスポーツカーがこちらめがけて一直線に突っ込んでくるのが見える。運転席にはさっきの身代金要求事件の犯人と似たような服装の男が乗っていた。

「まだ、他にも仲間がいたのか。はー、懲りないなー。　　まったくしょうがない奴らだ」

「待って、私もやる」

最後のおかたづけに向かう神無月に美琴は言う。

「ん、別に俺一人でも大丈夫だぞ？」

「私は、あいつらのことを許せない。子供を人質にしてお金を要求したこともそうだけど、私の後輩を傷つけようとした。だから、これは私の喧嘩けんかでもある」

そういうと美琴はこっちに向かって走ってくる車の方を向きゲームセンターでよく見かけるコインを上に弾きあげる。同時に神無月の手に黒い粒子が収束し、長さ4m近い黒い剣を形作る。神無月はその作りだした剣を後ろに振りかぶった。次の瞬間、美琴の指先に落ちてきたコインが閃光を噴き、神無月の振りかぶっていた黒い剣が投擲された。

黒い剣は回転しながら美琴の超電磁砲レールガンより早く車の正面と真ん中にぶつかる。いや、ぶつかるという表現は正確ではない。まるで、豆腐に包丁を入れるように、いやさらにそれより抵抗なく車体を通り抜け真つ二つにした。速すぎる切断の為かすぐには車体は離れずそのまま走る。そこに音速の3倍以上の速度でゲームセンターのコインが飛んできて既に切られていた車体がコインの引き起す爆風にも近い風で半分になり舞い上がる。車に乗っていた男は、風にもまれ車体の切り口から車外に放り出された。男は地面に激突する寸前に神無月のアイアンクローで顔面をキャッチされ大きな怪我はなかったが精神的なショックが大きすぎたのか白目をむいて気絶していた。切られて舞い上がった、割と値の張る青いスポーツカーは神無月や美琴を飛び越え、誰もいない地面に落下し爆発炎上した。高級車は一発で再起不能スクラップへと変貌した。なんというBefore・Afterあつという間に何という状態でしよう状態に。二人の一撃は超能力者レベル5が超能力者と呼ばれる所以ゆえんそのものだった。周りで見ていた子供たちとその親達も、また初春と佐天・そして犯人たちも驚きで啞然げんとしていた。そのなかで白井だけが『さすがはお姉さま』とキンキン喜んでいた。

「で、アンタさっきのは何なのよ」

美琴は神無月に詰め寄っていた。神無月の自己紹介の前に犯人グループの最後の一人が車で突っ込んできたため美琴は神無月という名前すら知らない。能力も彼女にしてみれば未知数。銃弾を受けとめたと思っただけは訳の分からない黒い剣で車を両断したのだ、気にならない方がおかしい。

「さっきのつていうと黒い剣か？ それとも銃弾を掴んだ方か？」

「どっちもよ！」

「ん、重力つてあるだろ？ 重力つて強力なものになると光さえ逃がさないほど強力なものもある」

「ブラックホールのことでしょ？」

言っただけ美琴は何か引っかけりを感じたが確信が無かったため考えるのをやめた。

「そう。さっきの剣は小さいブラックホールが集まっていたものだ。俺の能力は重力を制御する能力だからブラックホールも作れる。んで、重力の効果範囲をさっきの黒い剣の形にすると黒い剣に触れたものが吸い込まれる。さっきの車なら剣に触れた部分の原子を強制的に剣が吸い込んだから真つ二つになったというわけ。切れない物はないと自負してる。あと、強力な重力は時間の流れを遅くする。だから、能力を発生させている俺以外の物が遅くなつて銃弾すらも掴みとれたつてわけ」

説明を受けて美琴は感じた。

（どう考えてもこの力超能力者クラスもしかするとこいつが・・・）

確信の欲しい美琴は尋ねる。

「アンタは名前は？」

「名前？ 俺は神無月有真、10月を示す神無月に真実が有るつて書いて有真だ。能力は重力制御、通称絶対重力、超能力者だ、よろしく」

「やっぱり、アンタが神無月有真」

「俺のこと知ってるのか？ あれ、俺たちどこかで会ったことあったっけ？」

神無月は記憶を辿ってみるが一向に脳内検索に引っ掛からない。思い出そうと必死になっている神無月を美琴は止める。

「あったことはないわ、今日が初対面なもの」

「じゃあ、なんで俺のこと知ってたんだ？」

「アンタのせいで私が第4位に格下げになって調べたからに決まってるでしょ！」

いや、そんなことは決まってるじゃない。

「第3位っていうと・・・え、まさか、君が超電磁砲^{レールガン}？」

「そうよ、アンタのせいでこっちは4位に転落したの、って訳で私と勝負しなさい、勝負」

「おいおい、いきなり勝負って何なんだよ・・・それよりそっちの名前は？」

とそこに上条が現れた。

「あれ、どうも見たことがある奴がいるなと思ってたら、お前かビリビリ」

「え、当麻お前の話によく出てきたビリビリってこいつのことだったのか」

「ああ、そうなんだ。 ことあるごとにビリビリビリ電撃飛ばしてくるんだ、勘弁してもらいたい」

「お前超能力者^{レベル5}にビリビリ電撃飛ばされてよく無事だな、不幸っていうわりに死んでないあたり実はそこまで不幸でもないんじゃないか？」

「いやいや、ビリビリ攻撃されてる時点でかなりの不幸だぞ」

二人にビリビリビリ言われて美琴の周りでバチバチ電撃の火花が舞い散っていた。

「アンタら人のことビリビリビリ言ってるんじゃないわよ！」

美琴がそう言い切るのと同時に青白い閃光が上条と神無月の方向に飛んだ。その瞬間二人の方向からズドンという雷の落ちたときと同

じ音がした。普通なら美琴の『雷撃の槍』をともに喰らえば無事では済まない。だが、2人の少年は無傷で立っていた。上条は右手を上げた状態で。

「こえー、いきなりなんだ？」

雷が間近で落ちる経験などほとんどの人は持ち合わせていない。神無月も同様にいきなりすることに驚いていた。一方、上条はすぐにくるりと向きを変えると美琴とは逆方向を向いて走り出した。美琴は上条を追おうとしたが神無月がまだその場で立っていたので狙いを変えた。

「さーて、さつき言った通り勝負よ」

美琴の目が据わっている。本気とかいてマジと読む人の目だ。

「まあ、待て落ち着けよ、ええとビリビリ？」

ブチッという音と共に再び雷撃の槍が神無月を襲う。

神無月とはつさに右手を突き出して防いだ。右手は黒くなっているが焼け焦げて黒くなったわけではなかった。先ほどの黒い剣を構成していた粒子が右手を覆っていてそれによって雷撃の槍を吸いこんで防いだのだった。

「ア・ン・タはよっぽど死にたいみたいね」

顔が笑っているのに目が笑っていない。怖すぎる。

即座に上条の方にダッシュ。

「ちよっ、神無月こっちに逃げてくるなよ！」

「しょうがないだろ！ 向こうにはなんだか分からないがキレてる
超電磁砲レールガンがあるんだぞ。 どうかやって逃げろっていうんだよ」

後ろから『待てやコラー』と美琴が追いかけてくる。

「なんだか分からないがごめんビリビリー」

「俺もごめんビリビリー」

美琴の怒りの理由を分かっている二人はさらに美琴に怒りに火に油を注ぐ、いや火にガソリンを投げ込むことを言う。美琴の怒りが今の一言で5倍くらいに加速する。

「だ・か・ら、ビリビリ言ってんじゃないわよー！」

雷撃の槍が2人に向かって連発する。美琴の攻撃を避けまくって逃げていると神無月はあることに気が付いた。

「なあ、当麻、タイムサービスって何時から何時までなんだ？」

「え、そりゃあ・・・」

時計を見る上条の時間が止まる。美琴の電撃を避けている間にとっくにタイムサービスの時間は過ぎていた。上条の顔が一気にやつれた。それでも美琴は攻撃の手を緩めない。

「アンタたち今日は逃がさないわよ！」

そんな声が聞こえ神無月と上条は再び走り出す。

「これはアレだな」

「当麻の得意なアレだな」

そして二人は同時に叫ぶ。

「不幸だ——！！！！」

その声は赤くなり始めた夏の空に消えていくのだった。

第01話 ビリビリビリビリ言ってんじゃないわよー！（後書き）

3月16日

地震で本棚がめちゃくちゃ

震源地だったので震度6強、さすがに勘弁してほしい

とりあえず浜岡原発に異常がなくて一安心

東海地震対策で地震対策ができていたようで被害が少なくてよかった

第02話 そりゃもちろん……私が勝つたらよ

「はあ、はあ、はあ、やつと撒いた……か？」

「不幸だ……なんで特売の今日に限ってビリビリに追いかけられるんだ……」

もうすっかり日の暮れた川の土手の上で神無月有真と上条当麻は荒かんなつきゆうまくなくなっていた息を整えていた。昼間の身代金要求事件直後から御坂みさか美琴に追いかけ続けられたせいなのだが、美琴に追いかけられたのは神無月と上条が二人して美琴のことをビリビリと呼び続けたせいだった。しかし、二人とも美琴の怒った理由に気が付いていない。二人から言わせれば美琴がなぜ電撃を放ちながら追いかけてきたのかさっぱり分らないということだった。二人とも鈍さにおいては超鈍感者レベル5である。

「なあ当麻、なんであの……ビリビリだっけ？ あの子は俺たちを殺す勢いで電撃をぶっ放しながら追いかけてきたんだ？」

当麻は疲れたように答える。

「俺だつて知るわけないだろ。いつもああやって追いかけてくるんだよ」

「じゃあ、今回も当麻が自分で気が付かないうちに何かしたんじゃないのか？ 俺はそれに巻き込まれたとか？」

上条は首を振る。

「いや、今までもこういうことはあったけど、近くにいただけで追いかけまわされた奴はいなかったはずだ」

「じゃあ、俺たちがあの子の気に触るようなことをしたってことか？」

「何をしたかまでは分からないが多分……」

どこまでも鈍感な二人だった。

「そういえば、当麻ならあの子の電撃打ち消せるだろ。逃げる必要なかったんじゃないか？」

イマジンプレイカー

そう上条当麻の右手には、幻想殺しという『異能の力』ならそれが何であれ問答無用で打ち消せる能力がある。例えばそれが2億ボルトの電撃だとしてもはたまた3000度の炎球でも、それが『異能の力』なら例外なく打ち消してしまう。しかし、その力のおかげで上条の能力は万年無能力者だ。レベル0測る対象である能力を打ち消す能力のため上条の幻想殺しは測れないのだった。

イマジンプレイカー

「おまつ、人ごとだと思つて！一回打ち消すのにどんだけ寿命が縮む思いをしてると思つてるんだよ。あんなの何度も打ち消してたら寿命が無くなっちゃう」

イマジンプレイカー

上条の幻想殺しは能力に対して絶対的な力を誇るがその恩恵を受けているのは右手首より先だけ。つまりそれ以外の場所に能力をぶつけられようものなら防ぐことなど出来ない。また、上条の能力は『異能の力』そのものにしか作用しない。例えば3000度の炎の球を防げても炎の球に砕かれたコンクリート片は防げない。なので、上条は『異能の力』を一回防ぐたびに神経をすり減らしているのだ。

「それより、神無月こそビリビリの電撃を防ぐくらいできるんじゃないのか？」

ブラックホール

レベル5

神無月有真は絶対重力と呼ばれる超能力者の重力制御能力者だ。自分の指定した物体・現象にかかる重力を操ることや、何も無い空間に重力を発生させることができる。神無月の重力は時空間を歪めるほどの大きなものからただの空気が入った風船を浮かせる程度のささやかなものまであり、用途に応じて力の制御を行うことができる。そのうちの大きな力に類するものが黒い剣であり、銃弾の動きすらもほとんど止めてしまうような時間への干渉である。黒い剣は巨大な重力である絶対重力を剣の形に生成したもので、剣の表面に触れたものだけに絶対重力の影響を与え、触れたものを吸い込む。この剣は触れたものにはしか影響を与えないため物体にこの黒い剣が接触した場合、接触した部分の原子を吸い込むことにより物体を切断す

ることになる。また原子単位での吸引のため斬られた物体の切り口はすさまじく鋭くなる。また、重力は強力になると時空間を歪めるため時間すら遅くすることが可能。その結果が銃弾すらほとんど止まった状態にするのである。

「そりゃ、確かに防げるか防げないかで問われれば防げるかもしれないって答えるけど、俺はあの子の能力の全部を知っているわけじゃないからそんな命を賭けた勝負なんてできるわけないだろ！その点、当麻はどんな能力でも防げるじゃん。それにあんな怒りのあふれた形相で追いかけられたら・・・逃げるしかないだろ」

「防げるかもしれないんだったら上条さん一人のせいにしようにするのはおかしくありません？ 神無月は超能力者^{レベル5}なんだから少しはやる気を見せてくれてもいいじゃん！」

「そもそも当麻は俺を置き去り（生贄とも言う）にして逃げたじゃんあれはひどくないか？」

二人はだんだん喧嘩腰になる。

「しょうがないだろ。 ビリビリは——危険なんだから」

現役女子中学生を危険と言うこともどうなのかと言ったところだが、彼女は元学園都市第三位にして現学園都市第四位、武装した軍隊の一個小隊（三十人〜四十人）どころか一個中隊（約二百人）を相手にしても勝ってしまうほどの実力の持ち主だ。テロどころか小規模な戦争が起こせるレベルの戦闘能力をもっているとやはり危険と言われてもしょうがないという気もする。そんな力を持っているあたり流石は超能力者^{レベル5}と言ったところか。

「危険だって分かっているところに友達を置き去りにするなよ」

「しょうがないじだろ！ 特売に行きたかったんだから！」

「当麻は俺の命より特売を選んだのか！？・・・まあ、いいや。」

これ以上言い争っても疲れるだけだ。せつかくビリビリを撒いたことだしまた見つかる前に帰るか・・・」

「そうだな・・・特売のお肉が買えなかったし、これ以上無駄なエネルギーは使うのは止めよう・・・」

急にばからしくなった二人は寮への道をとぼとぼ歩いて行くのだ
た。

「・・・ただいま」

「あら、お姉さま今日の追いかけてはすいぶんと速く終わりましたのね」

神無月と上条が家路いえじにつく頃、美琴は二人を完全に見失ったため常盤台中学女子寮に帰ってきていた。そこにはすでに風紀委員ジャッジメントの仕事が終わらせて先に帰ってきていた白井がいた。

「うっさいわねーしょうがないでしょ見失っちゃったんだから・・・あいつら今度会ったら真っ黒焦げにしてやるんだから」

そういつて美琴はベッドに倒れこむ。美琴にとつて能力を使いながらの追いかけては非常に体力の消耗が激しいらしく、疲れていた美琴はベッドに倒れこむなりすぐに深い眠りに落ちていった。疲れて帰ってきた割に美琴の顔は随分と嬉しそうな表情だった。白井は最後の方は独り言となった美琴の言葉を聞いていて思う。

（やっぱり、たのしそうですね。ご自身では気付いていらつしやらないのでしょうけど追いかけてこの後のお姉さまはなんだかいきいきしていますわ）

一方で白井は少し悔しくもある。美琴にこんな顔をさせることのできるのが自分ではないことに。

（今日のお姉さまの追いかけて相手は確か、今日で会った神無月有真と言う名前の超能力者レベル5と上条当麻という二人、このどちらかがお姉さまにあんな表情をさせられるのでしょうか・・・はっ！まさか恋！？お姉さまに限ってそんなこと・・・いえ、敵の過小評価はいけませんわ。あの二人について行動を調べなければ！お姉さまは絶対に渡しませんわ！！！）

神無月と上条は自分たちの知らないところで一人敵を作ってしまった

たようだった。

「OK 寮入口までの進路クリア、ビリビリはいない。当麻、後方は大丈夫か？」

「こっちもOK、大丈夫みたいだ。後ろからビリビリがくる様子はない」

神無月と上条はビリビリに姿を見つけれないようにこつそりと第七学区にある自分たちの寮まで来ていた。そう神無月と上条は同じ寮に住んでいる。同じ寮の同じ階だ。同じ学校に通う学生たちは同じ寮に住むことが少なくない。学校からの距離や交通の便を考えても同じもしくは近い寮になることが多いのだ。ちなみに上条と神無月のクラスメイト土御門元春（義妹を愛してやまない金髪グラサン男）も同じ階に住んでいる。というより上条の部屋の隣の部屋が土御門の部屋である。

「ふう、やっと着いた」

「ホントにな。俺はてつきり当麻の事だから不幸の一環とかでビリビリに見つかる、なんてことをやらかすかと思ってたんだがそうならずに済んで助かった」

「人をどれだけ不幸だと思ってんだ」

「ん、食費の入った財布を丸ごと無くすレベル」

「・・・・・・」

この件に関しては何も言い返せない上条だった。上条は不幸体質なのだ。どのくらいの不幸体質かと言えば、目覚まし時計が朝鳴らなくて遅刻しそうになるのは当たり前、道端で何の理由もなくケンカは売られるし、折角2時間も並んで買った特売品の卵を帰宅途中に落として割るし、クラスで大勢が宿題を忘れても怒られるのは上条だけだし、色々な事件に巻き込まれること多々ある。上条の日常には、すでに不幸は組み込まれているといっても過言ではないほどに

毎日何らかの不幸が上条を襲う。今日の不幸はビリビリに追いかけまわされて特売品を買えなかったことだった。

「いやホントに上条の不幸っぷりはギネスブックに乗せられるレベルだからな。登録内容は連続して不幸の起こった日数」

神無月の口調や表情が悪意のあるものだったら上条も怒れるのだが、神無月の表情にはただ事実からの感想を述べただけというものであったため言い返せない上条は うわーと泣きながら7階にある自分の部屋に飛び込んで行った。ときに真実は悪意ある言葉より人を傷つけられることを知った上条だった。

身代金要求事件みのしろきんようきゅうじけんから一夜明けた日の放課後、神無月は近くのコンビニに来ていた。

「今日発売の『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール』は売り切れてないだろうな」

神無月はかなりの甘党である。こうしてコンビニで新しいスイーツが発売される情報を聞きつけると即座に買い求めに来る。普段なら朝一で買いに来るのだが今日は寝坊したため、起きて、着替えて、即登校となったためこの時間である。神無月は学校への遅刻はあまり気にしないタイプなのだが今日の1時限目は小萌先生の化学ばけがくの授業だったため急いで登校する羽目はめになった。小萌先生とは神無月の通う高校の女化学教師であり、神無月の担任でもある。名字は月詠、名前は小萌で月詠小萌だ。つくよみこもえなぜ神無月がこの先生の授業に遅刻しないようにしているのかというと、それはこの先生は遅刻したらものすごく怒るとか、ものすごい量の課題を出してくるとかそういうことではない。小萌先生は身長135cmでどこからどう見ても小学生にしか見えない、教卓の前に立つと首から上しか見えなくなる、とんでも幼女先生だ。ようじょせんせいもちろん小学生ではなく年齢は少なくとも20を超えている。この先生は神無月が授業に遅刻すると涙目で『神

無月ちゃんは先生の授業きらいなんですか？」と聞いてくる。するとどうなるだろう。クラスメイト全員から『泣かした』『小萌先生を泣かした』と非難の視線が降り注ぐ。神無月は一度その失敗をってしまった。からは小萌先生の化学の授業だけは遅刻しなようになったのだ。そんなこんなでこの時間だったが、甘味コーナーには、まだ『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール』は残っていた。コンビニの商品の入荷を知り尽くしている人間は多くはなく、ここまで甘そうな名前の菓子を即座に買おうという者もあまりいなかったためである。

（さて、家に帰ってこいつをおいしくいただ——）
と考えているとコンビニの入り口から誰かが入ってきた。

「・・・あつ・・・」

「・・・あつ・・・」

コンビニの入り口から入ってきた誰かと目があつた。うつん、目が疲れているんだな。じゃなければこんなところで常盤台中学の制服を着た昨日あたりに電気をビリビリ飛ばしてきたお嬢様らしき人物がいるはずが無い。

「ってアンタ、私の存在はそんなに目をゴシゴシ擦ったって消えないわよ！『アレーおかしいな』って顔をするな、何気に失礼じゃない」

いくら目を擦っても目の前のビリビリは消えなかった。

「これじゃあ、当麻のことを不幸だとは言えないな・・・はあ」

「人を不幸の権化みたいに言って溜息ついてんじゃないわよ。それに昨日はよくも人のことビリビリビリ言って逃げてくれたわね。今から真っ黒焦げになるまで電撃浴びせさせてあげるから遺産分配考えとけやコラア」

これがお嬢様の実態なのかと思うと物悲しくなる神無月だった。

「だって・・・実際にビリビリしてんじゃない」

「そう、そんなに黒焦げになりたいのなら今すぐ黒焦げになりなさい！」

その瞬間美琴の髪が電極でんきよくのようにバチンと火花を散らし、そこから青白い光が槍のように発射された。美琴と神無月の距離は2mもない。こんな近距離で、いや近距離じゃなくともとんでくる雷を避けよるのは人間業じゃない。普通の人間にはそんなことできない、しかし神無月は無傷で立っていた。火傷どころかかすり傷一つない。美琴の『雷撃らいげきの槍』は神無月の突き出された右手によって防がれていた。神無月の能力は重力制御だ、ある特定のもののだけに重力を作用させられる。今は、電撃のみに作用する重力で絶対重力ブラックホールを形成しそれを右手に纏まとうことで美琴の『雷撃の槍』を吸い込んだのだった。絶対重力と言っても神無月はその形を自由に変えられるため必ずしも球体とは限らない。今発生させた絶対重力ブラックホールにしても手の表面を覆うように形成されており、見た目には黒いペンキに突っ込んでしまった右手という具合だった。少し見ただけの人なら黒い手袋を付けているだけのように見えるかもしれない。その黒い右手の重力に引かれ美琴の雷撃の槍は他に被害を出さずに済んだのだった。

「あ、あぶねえな、コンビ二の中で雷なんて発生させんな、他の人達に迷惑だろ。ほら見る、レジの店員さん警備員アンチスキルを呼ぼうかどうかどうしようか迷ってんじゃねえか」

「うつさいわね、アンタがム力つくから悪いのよ」

「い、意味の分からないキレ方してんじゃねえよ」

と二人が言い争っているときコンビ二に来ていた若い女の客が「あ、アンチスキルですか？ コンビ二内で茶髪の女学生とオレンジみがかった茶髪の男子学生が能力を使ってケンカしています。至急来てしきゅうください」と携帯電話に向かって話していた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

コンビ二の店員が微妙な視線を向けてくる。少しの間時間が止まったような沈黙ちんもくが続いてその後、

「うわー、ビリビリの馬鹿野郎——！！！！」

「アンタが私のことビリビリ言うのが悪いんでしょうが！」

と叫びながら神無月と美琴はコンビニから猛ダッシュで逃げだした。

その頃の上条は、スーパーの特売品をかごに入れてホクホクしていた。

「いやー、今日の上条さんはついてますなー。今日はまだ一度も不幸なことが起きてない」

7月17日になってから上条には不幸なことが起こっていなかった。朝はしっかり目覚まし時計が鳴ったし、不意にどこからかボールが飛んできたりもしなかったし、ペンキが上から降ってくることもなかったし、特売品が上条のちょうど前の人で無くなることもなかった。不幸が毎日起きていると、不幸の起きていないことが幸運と覚えてくる上条だった。普通の人と比較すると確実に幸運の基準が下がっている。不幸が起きていないおかげでハイテンションになっている上条は独り言を連発していて、周りから変な目で見られていたが今の上条はそんなことすら気が付かないようだ。

「さて、この卵で今日の買い物は終わりだ、ヒヤッホー」

今にもスキップでもしそうな上条を周りの人は遠巻き《とおまき》にしている。そして、買う物がかごに揃った上条はレジに向かって歩いて行くのだった。

コンビニから逃げ出した神無月は、昨日美琴に追いかけてたどり着いた川の土手まで来ていた。

「なんで、俺は昨日から逃げてばかりいるんだろ」

不意に虚しくな^{むな}って神無月は独り言を漏らす。その独り言に神無月と一緒に逃げてきた美琴が応える。

「アンタが悪いんでしょ。とりあえず、勝負しなさい、勝負」

「・・・はあ」

「そこっ！！、大きなため息をつかないっ！！」

コンビニから逃げ出さなきゃならないうえに勝負しろときたもんだ、
ためいき溜息だつて出る。

「なんで、俺が勝負とやらをしなきゃならないんだよ」

「アンタが私のことをビリビリ変な風に呼ぶからでしょ！」

そこでようやく昨日追いかけられた理由が分かった神無月だった。

「あーそれか、でもしょうがないだろ。 お前には名前教えてもら
つてないんだから」

「へ・・・」

美琴は神無月が自分のことを超電磁砲レールガンと呼んでいたから名前も知っ
ているものだと思っていたのだった。

「あれ、・・・昨日名前教えなかったっけ？」

「俺が名乗ったら、すぐに『勝負しなさい』だとか言つて結局名乗
らなかつたんじゃないか」

「・・・」

（あれ、これじゃあ怒つてた私が馬鹿みたいじゃない・・・どうし
よう謝るべき？ いやいや、あそこまで電撃でんげきを飛ばしていて今さら
あやま謝れない）

と美琴が考えていると、沈黙ちんもくに耐えかねた神無月が切り出す。

「で、名前は？」

「・・・へ・・・」

考え事に集中してた美琴は何を言われたのか聞いてなかった。

「だから、名前を教えてくれよ。 じゃなきゃビリビリか超電磁砲レールガン
の二択だぞ」

「あ、うん。 私は御坂美琴みさかみことよ。 ビリビリじゃないんだか

らね、しっかり覚えなさいよ」

「ああ、分かった美琴だな」

「ぶーっ！？」

「どうした？ あれ、俺名前言い間違えたか？」

（なんで、名前の方で呼ぶのよ。いきなり名前を呼び捨てって、あーもう）

美琴は俯いて赤くなった顔を冷やそうと頑張っていた。

「ま、間違ってないけど・・・そ、そうよ、勝負しなさい、勝負！」
美琴の口からとっさに出た言葉は勝負だった。

「はっ？　なんで？　名前間違ってないんだろ、なんで勝負するんだよ」

「え、・・・そ、そう、そうよ、アンタが学園都市第三位に本当に
相応しいか私が確かめてあげるのよ」

（そう、そうよ、名前の事が無くてもコイツとは一度は勝負しなきゃならないのよ）

「なんだよ、そのいかにも今思いつきましたみたいな言い訳は・・・」

「い、言い訳じゃないわよ、と、とにかく勝負するの！」

「はあ、分かったよ。それで気が済むのなら相手になってやるよ。
で、勝負の終了条件は？」

「そ... そりゃもちろん... 私に勝ったらよ」

「はあ（溜息）・・・そうじゃなくて、勝ち負けの決め方だよ。
どっちかが死ぬまで戦うなんて言わないだろ？」

「あたりまえでしょ、戦えなくなるか、どっちかが『まいりました』
っていうまでね」

「なあ、開始直後に『まいりました』っていったら——」

「全力で攻撃するわよ」

神無月が『どうなる』といい終わる前に美琴が逃げ道をふさいだ。
「ははは、はあ（溜息）、了解」
そして美琴と神無月の戦いが始まるのだった。

すっかり日も暮れて暗くなった外を白井黒子は眺めていた。美琴が

いつになつても帰つてこないからである。

「もう、門限もとづくに過ぎていますのに・・・お姉さまってば、どこで何をしていらつしやるのでしょうか」

美琴のいない二人部屋に寂しげな白井の声が響く。

（お姉さまに限って誰かに誘拐されると言うこともないでしょうけど・・・はっ、まさか昨日の神無月と上条とかいう高校生と一緒に夜の戯れを!? いけませんわお姉さま、そんなこと黒子は絶対に許しませんわ・・・いえいえ、まさか、まさか、お姉さまに限ってそんなことは、きつといつもの追いかけっこに決まっていますわ・・・ん、追いかけっこ?）

白井の頭の中で美琴と神無月が夕暮れのビーチで『待てよー』『つかまえてみなさいよー』とじゃれ合っている姿が浮かぶ。

「イヤー、お姉さま、それをやるのはそんな野郎とじゃなくてわたくしとですわー」

と白井が美琴の枕に顔を擦りつけながら叫んでいると

「静かにせんか白井!」

と常盤台中学女子寮名物超恐ろしい鬼寮監が扉を開いた。妄想の悲劇に悲しんでいる白井はそんなことには気が付かない。

「そんな男とじゃれ合わないでくださいお姉さまー! 夜のデートは私だけのもので、ズ——」

『ですの』と言おうとしたところで白井は怒った寮監に首をねじられ気を失った。

神無月と美琴は川の土手から河原に降りて、6〜7mの間隔を開けて立っていた。

「なあ、美琴ホントにやるのか?」

「や、やるにきまつてんでしょ」

美琴の声が裏返った。

（どうしてこいつは、私の調子を狂わせるのかな、やりにくいっただらないわね）

「分かった。いつでもいい、かかってこいよ」

「言われなくても、こつちだってこの時を待ってたんだから！」

美琴の声と同時に美琴の手から『雷撃の槍』が打ち出される。『雷撃の槍』は轟音を周囲に撒き散らしながら一瞬のうちに67mの間合いを詰め神無月に襲いかかる。しかし、神無月の前に突き出された黒い右手に阻まれ電撃は微塵も神無月にダメージを与えない。それを見て美琴は呟く。

「やっぱ、電撃は効かないか」

神無月が強大な重力で覆った黒い右手を使い始めたのは今年、つまり高校に入学してからだ。この黒い右手は、上条の右手の能力である幻想殺しを真似して使い始めたのだった。神無月は上条と出会うまで、能力者の攻撃を防御する際に自身を自身の絶対重力で覆う方法を取っていた。しかし、神無月の絶対重力は、重力制御能力の中でもかなり消耗の激しい技でもあるため、長時間は使用できないのだった。神無月が絶対重力で体を覆い続けることそれは御坂美琴ならば超電磁砲を常時打ち続けているようなものなのだ。そのため、どうすれば如何に消耗せずに能力を防ぐかを考えていた。そんなとき上条が町の不良（異能力者）の能力を右手で防ぐのを見て真似したのである。神無月も上条と同じく右利きだったこともあり、右手のみを絶対重力で覆うことで防御するようになったのだった。その結果全身を絶対重力で覆っていた時の10分の1以下の力で攻撃を防げるようになった。

（この防御方法は消耗が少ない分、防御面積が狭くて怖いんだよね）と神無月が考えていると、

「3発同時ならどうよ」

と言う美琴の声と共に今度は3方向から『雷撃の槍』が飛んできた。「ちよつ、少しは加減をしろー！」

神無月は直撃の瞬間だけ元の防御方法、つまり全身を絶対重力で覆

う。

ズドン！という音と共に砂ボコリが舞い上がる。たった一瞬の全身
防御でも飛んできた『雷撃の槍』はそのすべてが神無月の絶対重力
に飲み込まれる。一瞬だけの全身ガードだったことと舞い上がった
砂ボコリのために美琴には神無月がどのように『雷撃の槍』を防い
だかは確認できなかったがこれで飛ばすタイプの電撃は神無月に防
御されることの分かった美琴だった。

「同時に3発でも駄目か、なら」

そう言った美琴の手に今度は砂が集まり始める。いや、あれは砂で
はない。ただの砂なら美琴の電気では操れない。

「砂鉄か？」

「よく分かったじゃない、それが分かるって事はこのあとどう使う
かも分かるわよね？」

嫌な予感しかない。とりあえず、殺されはしないだろうから砂鉄
を操って口から肺に突っ込まれることはないと思う、いや、そう思
いたい神無月だった。砂鉄は美琴の手に集まるとそこから剣の形状
に形成される。

「砂鉄が振動してチェーンソーみたいになってるから当たるとちょ
っと血が出るかもね」

確実に当たったらちよっと血が出るでは済まないことは容易に分か
る。あんなのがまともに当たれば腕の一本や二本簡単に切れてしま
う。

「そっちがエモノを使うならこっちもいくぜ」

と言って神無月が手から出現させたのはブラックホールから形成さ
れた黒い剣だった。

美琴が走ってきて剣をふるう、その剣に合わせて神無月も剣をふる
う。互いに持っているエモノが真剣だったならば、ぶつかって火花
の一つも出るだろうが二人とも持っている剣は能力で作った剣だ。
ぶつかっても火花など散らない。散らないと言うより、美琴の剣は
神無月の黒剣と触れた部分が消滅、いや吸い込まれてしまったため剣

の形を維持しても砂鉄の密度が薄くなっていく。不意に神無月の剣が美琴の剣の日本刀で言えば鍔のあたりを斬り飛ばした。すると、砂鉄の量が剣を形作るのに最低限必要な量を下回ったため美琴の剣は形を保てなくなり崩れた。

「勝負ありだな、もういいだろ？」

「まだ、負けてないわよ！」

そういうと美琴はゲームセンターでよく見かけるコインをポケットから取り出した。そう、美琴の必殺技超電磁砲レールガンに使うためのコインだ。美琴の超電磁砲は、ゲームセンターのコインに電磁加速を加えて音速の3倍程度の速さで飛ばす技だ。普通、人間に向けての発射は向けられた人間の死を意味する。

「ちよつと待て、俺を殺す気か？」

「アンタなら死なないわよ！」

「キレながら訳分かんねえことを叫ぶな！　んなもん食らったら俺でも死ぬわ！」

「うつさい、私は自分より強い人間がいるのが許せないの！」

そう、叫ぶと美琴は神無月に向かって超電磁砲をぶつ放した。その瞬間、轟音と共に余波の風が辺りの草を薙ぎ払い、超電磁砲が通過した下の地面はコインの起こす空気摩擦の熱で焼けていた。そして着弾した瞬間にもすごい砂煙が上がった。砂煙がはれた後の着弾地点の神無月は跡形もなかった。煙がはれた瞬間に美琴は戸惑いは焦りに変わった。なぜなら、いつものように攻撃が防がれた感覚が無かったのだ。そのうえ、神無月が避けたという感覚もなかった。美琴は体から電磁波を出して人や物を察知できる。それなのに美琴の電磁波には神無月が避けて動いた感覚が無かったのだ。

「え、嘘……まさか、本当に？」

神無月の立っていた地点には、何も残っていない。超電磁砲の作ったクレーターが残されているだけだった。

「ねえ、冗談……でしょ」

美琴が神無月のいたところに声をかけるが、その場所から反応が返

つてくることは二度となかった。美琴の手が震える。あんなにも美琴の攻撃を簡単に消してしまっていたので、超電磁砲レールガンもふせげないはずはないと美琴は思っていたのだった。冗談のような現実を前に美琴は思い出す。超電磁砲レールガンを放つ前に神無月は確かに『そんなもの防げない』と言っていた。美琴が熱くなっている、聞く耳を持たなかっただけで確かにそう言っていたのだった。美琴は地面にへたり込んで自分の手を見る。美琴は自分の手が真っ赤に血で染まっているように見えた。人を殺してしまった、その思いが美琴に重くのしかかる。美琴は2度と立ち上がれないような気がした。たしかに、ビリビリ言われて苛立ちもした。でも、本当に死んでほしいなんて、ましてや殺したいなんて思ってもいなかった。それに、神無月は美琴の大事な後輩である白井を助けてくれた。それなのに……。美琴の目から涙がポロポロこぼれ落ちる。

そのとき美琴の超電磁砲レールガンの着弾地点ではないところから声が聞こえてきた。

「どうした？ 大丈夫か？」

泣いていた美琴の後ろから神無月の声がかかった。美琴が後ろを振り向くと神無月が無傷で立っていた。

「ア……は……？」

美琴は開いた口がふさがらない。そりやそうだ。今の今まで、自分が殺してしまったと思っていた人物がいきなり現れたのだ。少し落ち着いてくると美琴は今の自分の状況を思い出し、涙を急いで拭くと神無月を問い詰める。

「あ、アンター一体どこにいたの！」

泣いていたかと思ったら、いきなり怒り始めた美琴に若干たじろぐ神無月。

「あ、ああ、お前が超電磁砲レールガンを放つのと同時に俺の絶対重力の応用で空間を捻じ曲げて移動した。一般的に言われるワープって奴だな。でも本当は美琴のすぐ後ろに移動する予定だったんだが、今初めて使ったから勝手が良く分からなくて移動する座標を間違えた。

美琴のすぐ後ろの移動するつもりが美琴の後ろ側5kmの位置にワープしちゃって今ようやく走ってここに帰ってきたんだ」

確かにワープなら超電磁砲レールガンはそもそも当たっていないのだから防がれた感覚はするはずがないし、空間を捻じ曲げて移動したのであれば美琴の電磁波には超電磁砲レールガンの直後に避けて動いた感覚が無いのも当たり前だった。

（そもそもこいつは時間を遅くできる能力があつたじゃない、銃弾を余裕で掴んじゃう奴が超電磁砲レールガンを撃たれたからって防げないわけじゃないじゃない）

銃弾の標準的な速度はほぼ音速と同じ、ライフルだと秒速950mくらいで音速の3倍にはまだ届かないという速度である。神無月は銃弾が体感時間で1秒に5mも進まないほど時間を歪められるのだ。たとえ超電磁砲レールガンを撃たれたとしても神無月に時間を遅くされたら体感時間1秒に15mも進めないのだ。しかも神無月はその歪んだ時間の中を平気で行動できる。そんな神無月が消えた理由を説明し終わると美琴が肩をプルプル震わせていた。

「・・・ね・・・」

美琴が何かをつぶやいた。

「へっ？」

「死ねーーーー！！！」

美琴の体中から『雷撃の槍』が神無月に向かって連射される。

「あぶねえな、殺す気か！」

「アンタなんて死んじゃえ！ 私がどれだけ心配したと思っているのよ！」

「は、何のことだよ」

「アンタがいきなり消えるから超電磁砲レールガンで殺しちゃったかと思ったかと思つたじゃない」

「あ？ ああ、だからさつき泣いてたのか。でも、避けなきゃ本当に死んでたんだから、むしろ避けた俺に感謝してほしいところだぜ。まあ、でも泣いてた美琴も可愛かつたぜ」

特に深い意味はないのだが、基本的に思ったことをそのまま口に
てしまう神無月だった。

「・・・あ・・・あ・・・」

美琴は面と向かって可愛いと言われて再び思考がフリーズする。

（か、か、可愛いって、か、可愛っていわ、いわ、いわれた）

「おい、バチバチいつてどうした？」

「し、死ねーーーー！！！」

そう言つて美琴は電撃を放つ。照れ隠しに出てきた言葉が『勝負し
なさい』か『死ねーーーー！！！！』の美琴だった。

そのころ上条は買い物を終えて例の土手のを歩いていた。今日の特
売で肉も卵もジャガイモも玉ねぎも安く買うことができた上条はホ
クホク顔だった。そんな上条の耳に割と近くから『死ねーーーー！！
！』という女の子の声が聞こえてきた。日本語はほとんどひどくな
っていきなとしみじみ上条が考えていると声だけでなく電撃までも
が飛んできた。上条を狙ったものではなく、たまたま飛んできたも
のだった。しかし、そのたまたま飛んできて電撃は上条の左手に下
げたスーパ―の袋に吸い込まれるようにぶつかり、上条がやっとの
思いで手に入れた特売品の全てを一瞬で炭に変えたのだった。つい
に、今日一日分の不幸が上条を襲った瞬間だった。『終わりよけれ
ばすべてよし』というが、これはつまり終わりが良くなければ全て
良くないと同義である。そして上条は今日一日をこう締めくくった。
「不幸だーっ！」

それから約1時間後、神無月は常盤台中学女子寮に向かって歩みを
進めていた。なぜ、神無月が常盤台中学女子寮に向けて歩いている

のかと言えば、その答えは神無月の背中が物語っていた。いや、正確には神無月の背中に乗っている人物を見れば分かる。つまり御坂美琴を背負っているからだった。神無月に可愛いと言われた美琴は恥ずかしさのあまり絶え間なく『照れ隠し電撃』を放ち続けた。そのせいで、美琴は気が付いた時には電池切れ、動くこともままならなくなっていた。さすがに、神無月も攻撃されなくなったからといってこれ幸いと、動けない女子中学生を夜の河原に放置して帰るほど非情ではない。そこで、神無月は歩けなくなった美琴を背負って常盤台中学の女子寮を目指すことになったというわけである。

「……………」

「ん、どうしたんだよ美琴。さっきから借りてきた猫みたいに静かになっちゃって」

神無月の背中にいる美琴の動揺はかなり激しいものだった。

（『どうしただよ』じゃないわよ。私がどれだけ恥ずかしいと思ってるの）

神無月に背負われた美琴はすぐに色々なことが気になりだし頭がパンクしてしまいそうになっていた。背負われると急に自分の体重が気になり、誰かに見られていないか気になり、背負われている関係で掴まれている足のが気になる、赤くなっている顔を見られていないか気になってしまふのだった。人間は恥ずかしさで死ぬるんじゃないかと美琴は思う。

（うあ————、恥ずか死ぬ————）

美琴が心の中でまだ得苦しんでいると、反応の返ってこないことを不審に思った神無月が美琴を振り返ろうとする。

「本当にどうしちゃったんだ？ 寝ちゃっダ・・・力」

振り返ろうとした神無月の首を美琴が無理やり前に向かせる。

「振り返っちゃ駄目だから、絶対に振り向かないでいい？」

美琴の言葉は『いい』と問いかけているのに対しその言葉は念押しをしているかの響きがあった。美琴は自身の顔が真っ赤になっているのを見られたくないので神無月の首を無理前に向かせるようにね

じつたのだが、神無月は首の骨を変な感じに回されて顔が蒼くなっていた。それから少し歩くと常盤台中学女子寮が見えてきた。そこで、神無月は気になったことを尋ねる。

「美琴、寮って門限とかあるのか？」

「・・・あるわね。私がないことは黒子が隠してくれているとは思うけど、玄関から入るのはちよつと・・・」

美琴がそれだけは勘弁してほしいと言う顔をしているので神無月は先を促す。

「ちよつと・・・どうなるんだ」

「・・・死ぬかも」

「死ぬのか！？」

「うちの寮監は規則に厳しくてね、門限とか規則を破るとね・・・」
「ははと美琴が遠い目をしている。前に何かやらかしたんだなと察する神無月だった。」

「じゃあ、部屋まで送る、どの部屋なのか教えてくれ」

美琴は“えーと”と言って自分の部屋を端から数えていく。いつも自分が暮らしている部屋でも外から探すと意外にも分かりにくかったりするものである。

（あれ？ 明かりがまだついてる。 珍しいわね黒子がこんな遅くまで起きているなんて）

「208号室だから、あの明かりのついている部屋、だけどどうやっていくの」

「さっきの空間歪めるやつ」

「アンタそれでさっき失敗して5km先まで移動しちゃったじゃない」

「大丈夫さっきの一回でコツは掴んだから変なとこにワープしたりしないって。 あ、それとアンタじゃない俺の名前は有真だこんどからちゃんと呼べよ俺だつてビリビリから直したんだから」

「あ、うん。・・・ゆ・・・う・・・ま」

最後の美琴の小さなつぶやきは神無月には聞こえていなかった。移

動手段が若干心配な美琴だったが今の不意打ちと背負われている状況の2点から文句は言えなかった。

「さて、行くぞ」

神無月の声と共に二人の前の空間が絶対重力により黒く染まる。ワープと言うよりワームホールに近い技だった。黒い空間はすぐに安定し神無月はそこに入るのだった。

白井黒子は眠れぬ夜を過ごしていた。寮監に首をねじられ気絶されたことを白井は知らなかった。白井にしてみれば気が付いたら眠っていたという認識なのだ。少し前まで気を失っていたので目覚めたら眠気がすっかりなくなっていた。そのため、眠くなるまで美琴を待っていたようにしたことにした白井だった。白井は美琴のベッドでゴロゴロしながら美琴の事を心配していた。

（お姉さま、昨日は早く帰ってきましたのに今日は随分と遅いんですの。 お姉さま早く帰ってきてくださいまし）

と白井が思っていると見透かしたかのようなタイミングいきなり、

「失礼しまーす」

と昨日出会った超能力者神無月有真が現れた。

「な・・・なんなんですか・・・」

白井の能力は空間移動だ。そのため、3次元から11次元までの把握が必要になる。その白井の空間把握で把握できる次元の全てに干渉する力がいきなり部屋の中に出現したと思ったらそこから神無月が出てきたのだ。驚き以外の何物でもない。白井は寝るためにパジャマだったので、とっさに自分の机の上に置いておいた金属矢を取るために空間移動して机の前に移動してしまったほどの驚きだった。そんな白井の驚きをたいして気にせず神無月は要件を告げる。

「悪いな夜遅くに、はい、オンナノコのお届け物です」

とても女子中学生に向けて発する言葉ではない。白井の驚きは続く。

いきなり『オンナノコのお届け物です』と言いだした神無月の背中から美琴がひよこつと顔をだしたのだ。

「・・・ただいま、黒子」

「?????・・・お、お姉さま?」

白井は今日の前で起きている自体についていけない。そんな白井の様子に気が付いた神無月は美琴を運んできた理由を告げる。

「ああ、美琴が（バトルで力を使い過ぎて）動けなくなっちゃって一緒に（戦って）いた俺がここまで運んできたんだよ」

しかし、混乱している白井にはこう聞こえた。

『ああ、美琴が（エッチなことをし終わって疲れて）動けなくなっちゃって一緒に（ホテルに）いた俺がここまで運んできたんだよ』
と言う風に。

「こ、殺す、よくもお姉さまの操を——!」

と白井は神無月に殺しにかかるうとするが、

「美琴、じゃあ俺かえるわ。またな」

「うん、また・・・『ゆうま（小声）』」

神無月はすっかりおとなしくなっている美琴をベッドに下ろして別れのあいさつをしていた。その言葉で白井の動きが止まる。

（美琴に有真!? そ、そんな、もう名前で呼び合う仲だなんて）
白井は目の前の出来事に魂を持って行かれたかのように真っ白に燃え尽きていた。そんな白井に神無月はいう。

「ええと、白井黒子だったよな。夜遅くに悪かったなじゃ、おやすみ黒子」

そんな不意打ちだけ残して神無月は部屋から忽然と消えた。

（・・・^{とのがた}殿方から呼び捨てにされた・・・?）

「えっとお姉さま、どういう・・・ことですか?」

「私に聞かれたって分かるわけないでしょ」

この夜、常盤台中学女子寮の208号室の住人二人は悶々とした夜を過ごすことになったのだった。

神無月は常盤台中学女子寮から道路に移動した。一発で自分の寮まで帰るほどのワームホールを開く自信はなく、またこの能力も消耗が激しいため歩いて帰ることにしたのだった。

すこし歩いて美琴と戦った河原の土手の上を歩いていると神無月は道端にうずくまっている人を見つけた。遠くから見たら誰なのか分からなかったが近づくとそれは美琴の電撃で特売品の全てを失い意気消沈して体育座りしている上条だった。なんとなく話しかけづらい雰囲気になんぞ干渉される神無月。

「どうした当麻……」

「うう不幸だった……」

「新しい『不幸だーっ！』のバリエーションだな、どうしたんだよ」
上条は左手にぶら下げている特売品だったものを神無月に見せる。

「あ、ああ」

全て食べ物だったものから作られた炭をみて神無月は上条にいう。

「あー俺の『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール』いくつかやろうか」

神無月はコンビ二で『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール（一個280円）』を30個ほど買っていた。上条は『うん』と頷くが流石にショックが大きすぎたのか落ち込んだままだった。そんな上条を支えながら神無月は寮を目指して帰るのだった。

第02話 そ…そりゃもちろん…私が勝つたらよ（後書き）

不定期更新ですが今後ともよろしく願います。
地震がこれ以上こないことを切に願います。

第03話（何か視線を感じる気がする・・・）

普段となにも変わらない午後の昼下がり、学園都市のとあるコンビニでは平穏な日常から突然外れた。

「風紀委員です。この場から早急に避難してください！！」

GREEN MARTという名の緑と白をイメージカラーにしたコンビニに突然大声が響きわたった。大声の持ち主は航空素材の盾を

持った女の風紀委員で急いだようにコンビニの中に入ってきてそう

叫んだ。彼女の後ろには、男の風紀委員が続いてコンビニに入って

きた。二人とも右腕に腕章をしている。それが風紀委員を表す記号

にもなっていた。風紀委員といえば、何らかの事件や事故などに駆

けつけることが仕事の学生だ。そんな彼らがとても焦ったように店

内に飛びこんできて避難命令を出したのだ、店内の客も職員も驚く

突然の避難命令に店内にいた客たち驚いたのちに戸惑う。そんな中

コンビニの店員が風紀委員に駆け寄った。

「あ・・・あのウチの店で何か・・・？」

「この付近で重力子の爆発的な加速が観測されました」

店員の質問に対応したのは、女の風紀委員だった。一方の男の風紀

委員は店員の対応を彼女に任せて店の中で何かを探し始めた。

「グー・・・なんですか？」

店員は風紀委員の言っていることが分からずに聞き返す。

「簡単に言くと爆弾が爆発する前兆があったという事です。この

店に爆弾が仕掛けられたと思われます」

そう言われるとようやく分かったのか店内の客たちも避難を開始す

る。店長と女の風紀委員が話している間も男の風紀委員は、店内の

どこに爆弾が仕掛けられたのかを探し続ける。

「クソ 一体どこに・・・」

探しても、探してもそれらしいものが見つからないで焦りだけが募った男の風紀委員ジャッジメントの口から苛立ちが零れる。

「きやつ」

そんなとき男の風紀委員ジャッジメントの後ろから女の声が聞こえた。振り返ると女学生が床に座り込んでいた。男の風紀委員ジャッジメントはすぐに女学生に駆け寄る。

「どうした？」

「すみません足を・・・」

どうやらその女学生は避難の際に滑ったようで足を捻ってしまっていたのだった。

「肩を貸すから早く非難を・・・」

そういつて男の風紀委員ジャッジメントが足を捻った女生徒に肩を貸した時だった。

ブンという古い機械の電源を入れたような鈍い音、自然に発生するとは思えない音が足元から男の風紀委員ジャッジメントの耳に響いた。その瞬間、

彼は嫌な悪寒を感じすぐに音源の方を向く。男の風紀委員ジャッジメントの足元、

正確には彼のすぐ近くにある商品の陳列棚の下、そこに置かれたデフォルメされたファンシーなウサギの人形、そこが音源だった。ウサギの人形は音を放った数秒後にメキメキと音がするのではないかというほどに歪み、人形の胴体の中央部分に発生した誰が見ても明らかに何かの能力だと思ふ球状のエネルギーに吸い込まれるように縮んでいく。男の風紀委員ジャッジメントの顔が焦りに歪む。

「何！？これが爆弾！！」

次の瞬間、人形を歪め縮ませたエネルギーが、今度は内側に向かうのではなく外側に向かうかのように放たれた。それは無理やり縮めていたバネを抑えていた手が無くなったような放出だった。抑えるものの無くなったバネは元に戻ろうとする力ではねる。今回はそれが爆発という形で表れるかのようなだった。ドッゴオンという音と共に爆風と熱風がコンビ二の窓ガラスを叩きガラスが砕け散る。爆弾の置いてあった場所は床の塗装が吹き飛び、コンクリートがむき出しになり、砕けている。爆発は一瞬で起こり、一瞬のうちに収ま

る。ただ、ゴオオオオオという空気の動く音が店内に響く。風の流れが店内の爆風による煙を少しずつ店の外に追いやり中の様子が徐々に見えるようになってくる。コンビニの店員は、床にうずくまって身を縮めていた。それは、女の風紀委員が彼を守り易いようにとつさに屈^{かが}ませたからでもあった。そして、彼と話していた女性^{ジャッジメント}の風紀委員は彼の前に片膝立ちのような体勢で航空素材の盾を爆発源の方へ向け、自分の体と店員の体を守っていた。そのため、二人には怪我はなかった。そして、爆発による飛来物が収まると女の風^{ジャッジメント}紀委員は逃げ遅れた女生徒と男の風紀委員の方へ駆け寄った。

「大丈夫！？ 怪我は？」

「わ・・・私はこの人が庇ってくれたから・・・で、でも・・・」女生徒はほとんど怪我もしていなかった。しかし、彼女をかばったことで男の風紀委員^{ジャッジメント}は、かなりのひどい怪我を負って地面に倒れていた。女生徒を抱きかかえるようにかばったのだろう。彼のワイシヤツは背中部分が吹き飛び、背中に大きく火傷を負っていた。背中の皮膚や腕の皮膚は爆発で焼かれ黒く炭化しているところもある。火傷は危険だ。皮膚の20%が火傷になれば死ぬとまで言われているほど命にかかわる。なにより、皮膚を失った部分からの感染症が最も危険だ。皮膚のない部分は恐ろしく菌類に対する抵抗力を失ってしまう。彼はそんな危険な状態になっていた。

「ぐ・・・ツ・・・」

^{ジャッジメント}男の風紀委員は唸るだけで精一杯なほどの怪我だった。

「——とまあ以上が昨日の夕方に起こった事件ですの^{しだいぐんい}」児童公園の一角にあるジュースの自動販売機の前で、白井黒子は尊敬すべき先輩であり、よく行動を共にしていて、全幅の信頼を寄せている、お姉さま、御坂美琴^{みよのかみ}に昨日起こった事件のあらましを説明していた。対して、美琴は自販機に蹴りを入れてジュースを叩き（

蹴り)出すという蛮行の真つ最中だった。そして、ガシャンという音と共に自販機からジュースが落ちてくる。ここの自販機は、ジュースを止める器具が緩くなっているため衝撃を加えるとジュースが落ちてくるのだ。ジュースは選べないが金を入れることなくジュースが出てくる。明らかに窃盗のような現場だが一概にそうとも言えない。なぜなら、この自販機は金を飲み込むのだ。お金を入れてもおつりは出ない。返却ボタンを押しても金は返ってこないと言うそれはもう鬼のような自販機だった。もちろんそのことを知らない人達は知らずにお金を入れて泣きを見る羽目になる。そして、この御坂美琴もそんな人間の一人だった。一年ほど前、入学して間もなかった美琴はこの自販機の事を知らずお金を入れてしまったのだ。――万札を。もちろんその万札が帰ってきたかと言えば、答えるまでもない結果だった。それ以来美琴はこの自販機からジュースを蹴り出すようになったのだ。最初に蹴ってジュースが出てきたのは万札をこの自販機に飲まれた腹いせに本気で蹴りを入れた時だった。今の行いはそのことに起因している。しかし、この二人は常盤台中学と呼ばれる名門女子中学校の生徒である。こんな光景を他の学校の学生が見たら驚くこと間違いなしだった。

「聞いてます？ お姉さま」

自販機に蹴りを入れながら自分の話を聞いているのか怪しく思った白井は、美琴に問いかける。

「聞いてるわよ。連続爆破事件とかいうやつでしょ」

美琴は自販機から蹴り出したジュースの缶を見て、う・・・ハズレだ、と言いつつ白井の問いに答える。

「ええ、正確には連続虚空爆破事件ですの」

白井は美琴の手にあるジュースのアルミ缶をコンと人差し指でつつきながら話を続ける。

「アルミを起点として重力子の数ではなく速度を急激に増加させてそれを一気に周囲に撒き散らす。ようは『アルミを爆弾に変える』能力ですの」

そう言われて美琴はアルミの缶をムムツと言った表情で見る。

「ぬいぐるみの中にスプーンを隠して破裂させたり、ゴミ箱のアルミ缶を爆破するといった手を使ってきましたの。爆発の前に前兆があるので死亡者こそ出ていませんがまだ犯人の特定ができていませんの」

美琴は白井の話を聞くと、さっき買ったばかりのジュースを開けなようにする。ジュースはパキユツといった音を立ててプルタブが開いた。

「能力者の犯行なんでしょ？（ゴクツ）だったら学園都市の『書庫』^{がくえんとし}にある全ての学生の能力データをあたって該当する能力を検索すれば（ゴクツ）容疑者を割り出せるんじゃないの？」

美琴はジュースを飲みながら白井に問いかける。『書庫』^{バンク}とは、学園都市における全学生の能力の種類からレベル、能力による事件、一部ではDNA情報までもが保管されているサーバーだ。そこには全学生の『能力測定』^{システムスキャン}の結果が載っているのだからそこを探せば能力者の割り出しは基本的に難しい作業ではないのだ。

「ええ、その結果学園都市には今回の事件を起こせるほどの能力者は二人しかいないことが分かりましたわ」

「じゃあ、その二人のアリバイを調べるなりすれば分かるんじゃないの？」

白井は難しい顔で一度黙った後に言葉を続ける。

「・・・今回の事件の容疑者候補の一人目は、能力『量子変速』^{シンクロトロン}を持つ大能力者、釧路帷子^{レベル4}^{くしろかたむら}という学生ですの。しかし、今回の一連の事件の始まりは一週間前なのですけれど、彼女は八日前から謎の昏睡状態に陥っていますの。病院からの外出はおるか一度も意識を取り戻しておりませんし、医療機器にも記録が残ってますので彼女に犯行は不可能ですの」

「容疑者候補って二人いるんだったわよね？ だったら、もう一人が犯人ってことじゃないの？」

白井は美琴の言葉にさらに難しい顔をして話を続けた。

「二人めの容疑者候補の名前は、・・・神無月有真、かなづきゆうま昨日お姉さまと一緒にいらした殿方ですの・・・」

「うーいはるーん、おっはよーん!!」

ういはるかざり

その言葉と同時に、バサッ、という音が発生し登校中の初春飾利のスカートは重力に逆行する動きを見せた。初春の通う柵川中学女子の制服は一般的にセーラー服と呼ばれるものである。ブレザーやワイシャツ、サマーセーターなどの制服が増えてきた近頃では徐々にその数を減らしているこの服をそのまま残している柵川中学は、なかなか伝統ある中学といえるのかもしれない。そして柵川中学では規則によりスカートの長さも決められており少なくとも膝が隠れるくらいの長さがなければいけない。そんな、一般的にみると長めに設定されている初春のスカートが空中に跳ね上がった。普段はスカートの中に隠れているへそが見える程度には。そして、へそが見えるということは、へそより下方向に存在しているものはすべて見えると言っことだ。

パンティー【panties】

女性用の下半身用の短い下着。ショーツ。

縞模様の付いたものを縞パン、サイドを紐で留めるものを紐パン、はいていないものをノーパンと言う。

——若者のための学園都市特殊国語辞典参照

「!?!?・・・ッ!!　ぎゃわ——ッ!!」

さてんい

初春は、スカートを同じ学校の同じ教室に通う佐天涙子の手によって後ろからまくられ、悲鳴を上げた。佐天と言えば、朝の挨拶とばかりに初春のスカートをめくることにためらいが無かった。

「おっ　今日は淡いピンクの水玉かー」

「だっ・・・男子もいる往来でこの暴挙ッ!? 何すんですか佐天さんっ!!」

実際、今の佐天によるスカートめくりで初春の今日の下着の色・柄は登校中の男子数名の知ることとなっていた。後方を歩いていた男子も、

「みた？」

「一瞬だけ・・・」

などと言う会話を小声でしているのだった。そんなことに初春も佐天も気が付かない。初春は自分のスカートの中身が公衆の面前で公開されたことでパニックに陥っており、佐天は佐天で、初春をいじることの方が優先されているからだ。

「クラスメートなのに敬語とは他人行儀だねえ。どれ、距離を縮めるためにも親睦を深めてみようかね」

「わ————~~~~ッ!!」

再び、佐天の手により初春のスカートが浮遊させる。今度は、前からだったため初春も対応することができ、スカートの前を押さえることに成功はした。しかし、現実には初春に厳しく、登校中の男子に優しくかった。実際、スカートの全面を押さえはしたものの初春の下着は衆目に晒されることになっていた。

「めくらないでくださいっ!! 連続でめくらないで?????っ!!」

登校中の男子には、わざわざ後ろを振り返って二人の様子（初春のスカートの中身）を見る者も多くいた。初春のスカートがまくりあがるたびに周りからおおーと言う声も聞こえた。

・
・
・

「ごめん、ごめん。ちょっと調子にのっちゃった」

再び学校に向かって歩きながら佐天は軽い調子で初春に謝った。初春は赤い顔をぷうと膨らませている。

「ヒドイですよ・・・」

「お詫びにあたしのパンツ見せよつか？」

「結構です」

佐天の『あたしのパンツ見せよつか』発現を初春は軽く流す。その一言で、あの後もこの二人なら何か良いものを見せてくれるのでは？と二人の行動を気にしながら登校中の男子生徒たちの希望が奪われたは言うまでもなかった。そんなことには気が付かず二人は歩いて行く。

「あ、そーだ。初春が聞きたがってた新曲ゲットしたからこれで機嫌直して」

そういつて佐天は音楽プレイヤーにつながっているイヤホンの片側を渡す。

「あ、これ今流行のプレイヤーですよはやりね。ダウンロード中心の」

「まーねー、今も新曲引つ張ってきてんだけどP.V.について一曲百円よ。CD買った頃なら信じられない値段よね——」

そう言つて歩く初春と佐天の横をメガネの男が逆方向へ歩いて行つた。

「初春つてこういうの疎いよね 遊びが足りないって言うか」

「うう・・・余計なお世話です」

メガネをかけた男の横を二人の女子中学生が楽しそうに歩いて行つた。そんな様子を気に留めもせず、メガネの男は歩いて行く。メガネの男は中学生、いや高校生ぐらいの年齢で、学校の制服を着てカバンを持って歩いているところから登校している最中なのだろう。音楽プレイヤーから延びるイヤホンを耳につけ暗い雰囲気で行く。そんな彼の前から二人のいかにも不良といった風情の男たちが歩いてきた。すれ違う時にメガネの男は不良の一人と偶然肩がぶつかってしまった。もちろん、メガネの男は偶然だからと気にも留

めなかったが、不良の方はそうはいかなかった。歩いていこうとするメガネの男の髪の毛を後ろから掴み引つ張る。気弱そうなメガネの男は『ひッ?』と声を上げて驚いた。肩がぶつかった方の不良はメガネの男の髪を引つ張りながらにらみを利かせる。

「人にブツかつとして謝罪もなしかよ?」

「え? だつてそつちがぶつかつて・・・」

メガネの男が反論しようとする顔面を殴られた。殴られた部分を抑えながらメガネの男は地面に四つん這いで這いつくばった。その様子を不良は立ったまま上から見下ろす。その顔は不愉快そうな表情を浮かべていて、こいつを蹴飛ばしてやろうかとも考えているかのような顔だった。それを見た風紀委員が急いで駆け付ける。駆けつけてきた風紀委員は大柄で体格の良い高校生くらいの男だった。

「こらそこっ何してる!」

さすがに不良たちも風紀委員と揉めるのは嫌だったらしく、

「っせーな。何でもねえよ」

といって歩いて行ってしまった。その不良たちの様子を風紀委員は仕方なさそうに見送る。

「まったく・・・君は大丈夫か?」

メガネの男は風紀委員に聞こえない程度の小声でつぶやく。

「もつと早く来いよ」

なにかを小声で言つたような雰囲気があつたため風紀委員の男は聞き返す。

「? 何か言つたかい?」

「別に・・・」

そう言つてメガネの男はその場を後にした。

「なん...だと!?!」

美琴と白井が神無月の容疑について深刻に話し合っていた頃より少

し後、当の張本人は寮にある自分の部屋でノートパソコンの画面を凝視して戦慄わななしていた。そう、神無月は自分で自分に一虚空爆破事件の容疑が掛かっていることに気がついた。なんて事はなかった。神無月が戦慄わなないた理由、それはネットサーフィンしていて偶然ある情報を見つけてしまったことであつた。

「・・・まさか、二日連続で新スイーツが発売するなんて！」

そう、神無月有真かなつぎゆうまは大の甘党だ。甘味の新しい情報があると自分の琴線に触れるかどうかを確かめに九割近い確率で販売開始する当日中に現れる。特に今はコンビニデザートにハマっていて新スイーツが店頭に並ぶという情報を聞きつけると朝から買い求めに来るほどだった。昨日も新しいコンビニスイーツの情報を聞きつけ買いに行つたのだつた。しかし、昨日販売されたということが、神無月の「今日は新しく出ないだろう」という油断を招いた。そのため、土曜日だったということもあり爆睡、そして朝飯をすつ飛ばして太陽が真上に上がるくらいの時間までこの情報に気が付かなかつたのだつた。

「God dam nガッデム《こんちくしょう》！ 何やってんの俺！？ クッソー油断していた——！！ いや、今からでもまだ間に合う！ まってるよ、ムーンノエル（コンビニスイーツの名前）——！！」

甘いものになると我を忘れる神無月しめづきだった。

「黒子、アイツが容疑者候補ってホント!?」

「ええ・・・、お姉さまも彼の力は一覧になりましたわよね。彼は重力を操る能力者で、その力の根源は重力子を操作する能力によるものです。つい先日システムスキャンの能力測定で超能力者認定をされ、その際に分かつたことらしいですけど。その力は、重力子の数グラビトンを増やすことも、速度を急激に増加させることも可能ですの・・・」

「・・・」

微妙な沈黙が二人の間に降りる。美琴も白井も神無月には少なからず恩があり、それなりに信用はしているのだった。そんな暗い雰囲気吹き飛ばすように白井は言う。

「しかしですの、彼が犯人だと決めつけるにはいくつかおかしな点がありますの」

「どういうこと？」

「彼が犯人なら被害が小さすぎると思いませんか？ それにアルミ製の物だけが爆弾として使われていることもおかしいですし、何より昨日の事件当時お姉さまと彼は一緒にいたはずですよ」

「ちよつと待つて、きちんと説明して」

「はいですの。 まず一つ目ですけど、彼が本気を出せば建物くらい簡単に無くなるレベルの爆発が起こせますの。 にもかかわらず今回の一連の事件、怪我人こそいますが死者は出ていませんの。

『加減したのでは？』と言われればそれまでですが、一連の事件の爆発力は徐々に大きくなっていますの。 威力が大きくなればそれだけのレベルが要求される、それでは犯人候補が少なくなってしまうからわざわざ自分の身を危険にさらすようなことはしないと思っんですの。」

能力者は無能力者^{レベル0}、超能力者^{レベル5}の6段階に分けられる。学園都市には230万人もの学生がいるが、その全員がこの6段階に振り分けられる。単純計算で1つのレベルに数十万人がいると言うことだ。もちろんレベルが高くなるほど人数は少なくなり超能力者^{レベル5}においては学園都市の中でも8人しかない。つまり、レベルを1段階上げるだけでもかなり難しいということだ。能力の向上は、一朝一夕の努力で出来るものではなく、長い時間をかけて少しずつ上げることができるかもしれないといった具合だ。もちろん努力だけでなく、先天的な資質によっても能力は異なる。つまり、使う力が大きければ大きいほど能力の特定が簡単になってしまうのだ。そのため、今回の事件が高レベル能力者の仕業^{しわざ}ならばわざわざ大きい力を使い自ら

捕まるような危険は冒さないと白井は考えた。能力の威力を小さくしても建物の構造上どうしても弱くなってしまう部分を狙えば、甚大な被害が出せるからだ。それを応用したのが、建物の爆破解体だ。爆破解体は、建造物を支えている柱の一部を破壊することによって建物全体を壊す。わざわざ、建物全体にダイナマイトを仕掛け爆破することで吹き飛ばす必要はないのだ。

「二つ目ですが、彼の能力ならアルミ以外でも爆弾に変えられますの。例えば、店を支える鉄骨、金属の棚、硬貨など、もつと被害を大きくできますし偽装することもできますの。しかし、毎回アルミ製品を人形に隠して爆発させる。これは本当の犯人はアルミしか爆発させることができず、大きなものになると爆弾として使うことができないからではないでしょうか？」

そう、二つ目の疑問。なぜ、毎回アルミ製品が爆弾として使われるか。アルミだけを爆破することは犯人にとってあまり大きなメリットにはならない。なぜならアルミも含めて色々な金属を爆発させられる能力者とアルミしか爆発させられない能力者、この二人が同時に犯人候補に挙がったとするならアルミだけが爆発している今回の事件においてはアルミしか爆発させられない能力者の方が怪しまれはするが、決定的な証拠が出ない限りは両方とも犯人候補として怪しまれるからだ。仮にアルミを含めて色々な金属を爆発させられる能力者がアルミしか爆発させられない能力者に罪をかぶせようとしても自分自身が犯人候補から外されるわけではないので大きなメリットにはならないのだ。ならば、今回の事件もアルミしか爆発させられない能力者の犯行とみるべきだろう。また、アルミ缶やアルミのスプーンなどが爆発していることから見ても大きな物体は爆発させられないようだ。被害を大きくするならアルミの合金であるジュラルミンを主な材料とする旅客機などを爆発させた方がよっぽど被害が大きい。にもかかわらず、小型の持ち運べる程度のアルミ製品に限られているためこの犯人は超能力者^{レベル5}には達していないと白井は考えた。

「そして、最後に昨日の事件です。昨夜、お姉さまに昨日のことを聞きましたよね。お姉さまの話が本当なら事件当時、お姉さまは彼と一緒にいたことになる。つまり、アリバイがあるんですの。」

「そう、昨夜名前を呼び捨てにされた二人は悶々とした夜を過ごしたが、白井が美琴と神無月の関係を訝しみ美琴に午後の出来事を聞いていたのだ。」

「穴だらけの推理で、絶対の保証はありませんがわたくしは彼が犯人だとは思っていませんわ」

ニコツと白井は美琴に笑いかけるが、美琴はうんという難しい顔をしている。

「お姉さま？ どうしたんですの？」

「・・・有真は昨日の午後ほとんど私と一緒にいたけど、実は一瞬だけ消えたのよ。まあ、それは私の超電磁砲レールガンを避けるためだったんだけど。それを考えると完全なアリバイにはならないなと思って」

「・・・そういう大事なことは早めに言っただけでよかったですわ」

「ごめんなさい・・・」

「では、彼のアリバイはないってことになりますわね。彼の嫌疑を晴らす一番の決め手になりそうでしたのに」

どうしたら彼の無実が晴らせるのかと二人は考え込む。彼女たちの中で神無月が犯人であると言っ考えはなかったのだった。少しの間、考え込むと美琴がハツとした顔をする。

「あ・・・」

「どうしたんですの？」

「そうよ、アリバイが無いんなら私たちがアリバイになればいいのよ」

「？」

美琴はニヤリと笑いその内容を白井に耳打ちする。

『キンコーンカーンコーン』と学校の授業を終了する鐘の音が校舎に響き終わった。

「ん——っ、終わったあ」

柵川中学では、半日授業の終了と共に多くの学生が校門から溢れてきた。その中には初春と佐天の姿もあった。佐天は授業で凝りきった体をほぐすように、うぐんと伸びをする。そして、二人は話しながら自分たちの寮への帰路に就いた。

「これで明日の終業式が終われば、ついに夏休みだねっ！」

「そうですねえ……え？」

佐天の喜びに初春が共感しようとしたが、視界に入った人達のせいきちんと答えられなかった。

「ん、どしたの初春？」

「佐天さん、あれって……」

初春の視線の先にいたのは、コンビニの入り口近くにある電柱の陰からそっとコンビニの中をこっそり覗いている美琴と白井だった。

コンビニを見張っているのか、コンビニの中にいる人を見張っているのかは知らないが、あからさまに目立っている。道を通り過ぎる人達も『この子たちは何をしているんだろう？』という奇異の目で二人を見ながら避けていく。しかも、二人とも電柱の陰に隠れているつもりなのかもしれないが全く隠れることができていないのだ。

きつと、コンビニの入り口の方から見ても二人の服や頭が見えてい
るであろうことが容易に分かる。そして、二人は常盤台中学^{ときわだいちゅうがく}の制服を着ていることも目立つ要因の一つだった。常盤台中学は学園都市^{がくえんとし}でも名門のお嬢様学校で、その行いは淑女として正しいものではなくてはならないとされている。そのため、土曜日などの休日でも基本的な服装は制服と言うことになっているのだ。名門と言うだけあって当然通っている生徒も頭がいい。にもかかわらず、漫画に出てくるいわゆるアホ探偵のごとき隠れ方を行っているのだ。常盤台中

学の名門という名が泣きそうな光景だった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

初春と佐天はと言うと、二人のアホっぽい行動にたつぷり60秒も固まってしまった。二人とも言葉が出ない。美琴と白井の珍妙な行動はそれほど驚きに値するものだった。

「・・・佐天さん、話しかけた方がいいですかね？」

初春が苦笑い気味に佐天に尋ねる。

「う、ん、まあ、初春の好きにしていいいと思うよ」

「じゃあ、いきましようか」

「うん・・・」

初春と佐天は、電柱の陰からコンビニを覗いている美琴と白井に近づき、肩に触れる。

「あの・・・」

その瞬間、美琴と白井はビクツと体を震わせ飛び上がり、二人はすかさず後ろを振り返る。二人の驚き方にびっくりした初春は「あの、何してるんですか？」と続けるタイミングをずらされた。

「なんだ、初春さんと佐天さんじゃない、驚かせないですよ」

美琴は振り返って後ろにいたのが、初春と佐天だったことにとても安堵しているようだった。そんな態度をされるといったい誰に見つかからないように行動しているのか少し気になってしまった佐天は二人に問いかける。

「えっと、御坂さんも白井さんもこんなところで、何してるんですか？」

一瞬、『うつ』と言葉を詰まらせたが、美琴は答える。

「んー、簡単に言えば尾行・・・かな」

答える際に美琴は目配らせのように白井の目を見た。尾行とは、相手の行動を探ったり監視したりするため、気付かれないように後について行くことである。と言うことは、やはり追いかける相手がいると言う事だ。美琴と白井が追いかける必要がある相手とは誰なの

か、二人で追いかけているのだから気になっている彼を追いかけているなどと言うおとめチックな展開ではないだろう、と佐天は考えをめぐらす。

「もしかして、事件ですか？」

「ん、まあ、そんなところですね」

白井が答えると初春が少し驚いたように携帯端末を確認する。

「そうなんですか？ 風紀委員^{ジャッジメント}のへ要請は来てないと思うんですけど」

「まあ、事件の予防と言いますか、アリバイ調査と言いますか、例^{グラフィック}の虚空爆破事件の容疑者候補を見張っているんですよ」

「というと神無月さんですか？」

「そういうことですわ」

とりあえず、大まかに説明はしたものの容疑を晴らすためにわざわざ尾行しているとは恥ずかしくて言えない美琴と白井だった。二人の恩人でもある神無月の容疑を晴らすこととは一般的に見れば変なことではないが、少し気になってしまつて何をしても変に勘ぐられそうな気がしてしょうがない多感なお年頃の二人だった。

「なぐんだ、御坂さんと白井さんが気になる男の人の私生活が気になってストーキングしてたらおもしろいなぐって思ったんですけど、やっぱり違いましたか」

「「ブツ、ゴホゴホ——」」

同時にむせる二人、そんなつもりはなくても、やっぱり気にしていることを突かれると激しく反応してしまう。

「だ、大丈夫ですか、御坂さん、白井さん」

「大丈夫、ありがと初春さん、さ、佐天さんもい、いきなり変なこと言わないでよ」

「あはは、ごめんなさい、で、今あのコンビニの中に神無月さんがいるんですか？」

「うん、さっき入ったばかりよ」

じつと、コンビニを見張る四人、神無月を追跡する人数はさらに倍

に増え、もうどうやっても電柱の陰に隠れることなどできない。美琴と白井を見つけた時に驚いて固まっていた初春と佐天も話しかけたときは『注目されていますよ』と注意を促すつもりだったのだが今では注目される側の人間になってしまっている。ミイラ取りがなんとやらのよい見本になってしまった。こういう場合、客観的に見ているときは見られていることに気がついていても、実際に自分も見られる側の人間になるとあまり見られているということに気がつかないものだ。そして、新しい尾行仲間をパーティーに加えた美琴たち一行は神無月の監視を続ける。そこで佐天が美琴に問いかける。

「ところで、なんでいきなり尾行を始めようと思ったんですか」

美琴が神無月の尾行を行おうと考えついたときに戻る。

「ねえ黒子、有真のアリバイが無いんなら、私たちがアリバイを作ればいいのよ」

「・・・えっと、それはつまり彼を尾行すると言う事ですか？」

「そのつもりだけど？」

あまりにも美琴が当たり前のように言うので白井はつつこむ。

「お姉さま、それはいわゆるストーキングというものでは？」

「ち、違いわよ、ただ私たちはアイツの後を付けて歩くだけよ」

「・・・お姉さま、それを一般的にストーキングと言うのだと思いますわよ」

「なっ、・・・そ、そうよ、私たちには虚空爆破事件の容疑者候補を調べるという目的があるからこれはストーキングじゃなくて、探偵とかが行っ監視よ」

「ところでお姉さま、彼の家を知っていますの？」

「あ・・・」

神無月の家も知らずに尾行を行おうとしていたことが発覚した瞬間だった。しかし、白井はこの問いにもう一つの意味を持たせての質

問だった。

（良かったですわ。 これでもしお姉さまが彼の家を知っていたら逆に問題でしたの。 出会って二日で家まで知っていたら、お姉さまが彼の家に連れ込まれて、あんなことやこんなことを行っただけはと疑わなければいけないところでしたの）

白井は大好きなお姉さまの事となると色々と考えが暴走するのが玉に傷だった。 そして、美琴が神無月の家を知らないことに安堵するのだった。

「それで、お姉さまどうやって彼を尾行するんですの？ 先に言っておきますが、彼はあくまで容疑者候補で容疑者というわけではないので風紀委員として動かせませんわよ。」

「じゃあ、私が——」「駄目ですの」

美琴が携帯端末を取り出すと、白井は即座にそれを止める。美琴は電撃使いの超能力者だ。その能力は攻撃だけに特化した物だけでなく、電気を操ることでネットワークを介したハッキングを行うことも可能なのだ。学園都市では情報にランク付けがなされていて、機密性の高い情報ほど高ランクとされる。低ランクに格付けされる情報は低ランク閲覧用の端末と高ランク閲覧用の端末の両方から見る事ができるが、高ランクのデータは高ランク閲覧用の端末からでしかアクセスできない。学生は学生用の情報しか見ることができないが、教師なら学生用の情報と教師用の情報の両方を見ることができるといふことだ。しかし、美琴がハッキングをすれば通常学生が閲覧することのできない高ランクの情報を低ランク端末からでも閲覧することすら可能になる。もちろん、違法な行いで風紀委員の取り締まり対象になる。風紀委員である白井が止めるのも当然だ。しかし、今度は美琴に手立てが無くなってしまふ。何かいい案はないかと美琴は頭を振り絞る。

（あれ、そう言えば昨日有真は、すっごい甘そうなお菓子を大量に買い込んでいたっけ。 ん、そう言えば学園都市の都市伝説に甘いものを発売当日に必ず買い占める男、通称甘男の都市伝説があった

気がするわね。あれって確か、昨日言ったコンビニが舞台だったような。まさか、あの都市伝説って有真？ 決めつけられないけど、ネットを探せば何か手掛かりがあるかも)

急いで、美琴は携帯端末を操作する。

「だから、お姉さまハッキングは違法行為ですってば」

「違うわよ、ちよつと都市伝説をネットで調べるのよ」

「？」

白井からすれば、神無月の尾行の話から都市伝説についての話への飛躍の意味が分からない。疑問符を頭の上に抱えるのは当然だった。そんな白井の疑問には気付かず美琴は高速で端末を操作する。

「あつた！」

「？ 何がありましたのお姉さま？」

「これを見て」

美琴が白井に見せたネットのページは、都市伝説の特集ページ、ちょうど甘男あまおこについての関連記事と写真が掲載されており、写真には『この人物が甘男なのか？』という文字がデカデカと斜めに書かれている。そして、その姿はまぎれもなく美琴が昨日戦った人物、そして一昨日白井を凶弾から救った人物のものだった。

「これは彼ですわね。でも、ここから何が分かるんですの？」

「そして、これがもう一つのページ」

今度は昨日美琴の行ったコンビニの新作スイーツ販売日予告なるページが開かれていた。そこには、7月17日(金)『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール』、7月18日(土)『ムーンノエル』、7月19日(日)『ボルドーの栗』と書かれている。

「つまり、甘男あまおこである有真は今日このコンビニに高い確率で来るってこと、もし今日すでに有真がコンビニに来た後だったら、明日張り込んでいれば見つけられる」

「そして、彼の後ろについて行けば住んでいる場所も分かりアリバイを作り易くなる、わたくしたちが見張っている間に虚空爆破事件クラヒトン

が発生すればその場でアリバイが作れるという事ですね」

「今日コンビニに有真が来たかどうかは今日発売のムーンノエルってお菓子を大量買いした男子学生がいたかを店員に聞けばわかると思うし、さっそく行くわよ黒子」

「ハイですの」

そして、二人はコンビニの店員にまだ神無月らしき人物が来ていないことを確認すると電柱の陰からコンビニを監視し始めたのである。そして、初春と佐天が美琴と白井を見つける前に神無月はコンビニ入って行ったのだった。

「じゃあ、甘男あまおこいの都市伝説ってホントだったんですね！」

これまでの経緯を美琴が初春と佐天に話すと佐天がものすごい食いつきを見せた。

「しかも、その正体は学園都市第三位の能力者絶対重力ブラックホールこと神無月さんだったなんて！」

佐天はかなり驚いているが、白井は少し冷静に言う。

「しかし、甘男あまおこいといっても発売日当日に一つのコンビニの新商品を買い占めるだけの男がよく都市伝説になりましたわね」

「違いますよ白井さん！ 甘男あまおこいの伝説はそんなものじゃないんです！」

すごく興奮した様子で佐天は白井の方にズイと顔を近づける。そのあまりの興奮具合に白井は少し後ろに下がった。初春はその様子をアハハハと生温かい視線で見守っている。そして、佐天は甘男の伝説について語る。

「白井さん、甘男あまおこいはただ甘いものを買って占めるだけじゃありません！ 伝説の一つにこんながあります。甘男は買ったデザートを持っていつものようにコンビニから帰っていたそうです。ですが、その道中数十台じゅうしゅうだいの改造バイクが甘男あまおこいの横を通り過ぎ、せっかく買っ

たデザートの全てを地面に落としたそうです。そのバイクの集団はスキルアウトで総勢一万人近くいたそうですが、その日そのスキルアウトは解散したそうです。なんでも、怒り狂った甘男あまおにいがスキルアウトの根城に突撃して全員を病院送りにしたそうです。それ以来、そのスキルアウトのメンバーはバイクに乗ることはなくなり、学校でまじめに勉強するようになったそうです」

「・・・彼は何をしているんですの・・・、それにそこまで人物を特定できそうなのが分かっていたら都市伝説じゃないじゃありませんの、まあ行動が伝説なのはわかりますけど」

「まだ、ありますよ！ 例えば会社ひとつを倒産に——」

「もう十分に凄さは分かったので、結構ですわ」

「そうですか？ じゃあ、甘男あまおにいと並び立つ都市伝説脱ぎ女ぬぎおんなについて

「黒子、佐天さん、有真が出て来たわよ！」

佐天あまおにいが甘男あまおにいだけでなく別の都市伝説について話を始めようとした時、美琴が白井と佐天に有真がコンビニから出てきたことを知らせた。

美琴と初春は都市伝説の話にはほとんど入らずにコンビニを見張っていたのだった。見張られていることなど気が付かずに神無月は同じスイーツで満たされたコンビニ袋を両手に提げて自分の寮への帰路に就くのだった。

（何か視線を感じる気がする・・・）

神無月はコンビニで買った『ムーンノエル（コンビニデザートの名前）』の大量に詰まったビニール袋を両手に提げながら寮に帰ろうとしているところだった。あたりは既に学生寮に囲まれた住宅地である。そのため、物陰も多く存在していて死角も多い。住宅地ゆえに別段危険度の高い場所ではないが、背後に気配を感じるとさすがに色々な場所が危なく見えてくる神無月だった。

（コンビ二帰りに後を付けられる覚えはないんだけどな。俺が超^{ベル}能力者になったことを嗅ぎつけた連中が学園都市第三位の座を狙って襲いに来たか？）

とりあえず、尾行されていることを気付いていないと思わせる方が危険度は少ない。もし、襲われたとしても尾行者にとっての不意打ちにもなるからだ。そういうわけで、歩く速度を不自然に変えず、カーブミラーなどを使って後ろをさりげなく確認するが誰もいない。（さすがに手慣れているな、こんな程度じゃ尻尾をつかませないかじゃあしょうがない、少し探りを入れるか）

神無月は重力を操る超能力者^{レベル5}だ。その力は、美琴同様に攻撃にのみに特化したものではない。この世のあらゆる物体は、それがどれほど小さい物体であっても、どれほど小さな質量であったとしても、質量を持つ限り重力を発生させる。そして、重力が発生しているなら神無月はそれを完全に感知できる。普段はほとんど感じないようにしているが、その気になれば半径5 km程度の円内に存在する物体の重力を感知することが可能なのだ。そして、重力を解析すると発生させている物体の質量や大きさまで分かるため、神無月は後ろを向くことなく尾行している人数、身長、体重、持ち物などを把握することができるのだ。なぜ神無月が常に重力感知を行わないかと言え、ありとあらゆる物体が重力を発生させているため、脳に入ってくる情報量が多すぎて能力を含めてあらゆる行動に制限が付くのだ。例えば、能力ならば重力感知中はすでに存在している重力を大きくすることが限界で絶対重力を作り出すことができず、日常生活では考え事を行うことに使う余裕がないほど頭が働かない。だから神無月は常に重力感知を使わない、使うときも範囲を極力絞り込んで使うようにしている。そして、普段使わない重力感知を使うと神無月の頭の中に重力値のデータが流れ込んでくる。

（ええと、俺の後ろについてきているのは四人か、背は四人とも俺より低いな、ん？ この身長、体重、体つきから察するに女か？ そうだ、四人とも女だ。しかも、一人は体の周りから電子による

重力が感知されるな、これは――」

「黒子どう？　ばれてなさそう？」

「そうですね、尾行に気が付いたような素振りそぶりはありませんし、見つかつてもないと思いますわ」

「流石風紀委員ですね、白井さん。ジャッジメント　初春にも見習ってほしいな」

「わ、私は後方支援が担当だからいいんです！」

四人は、常に神無月の死角になる位置を移動していた。時には、白井の空間移動テレポートを駆使し、時には美琴が壁の中の鉄骨に磁力を通して張り付き、残り全員を引つ張り上げるなどということもあった。そして移動を繰り返すうちに神無月が一つの寮に入った。

「神無月さんあの寮に入りましたよ」

「ええ、ですが今度はこちらの死角に入られてしまいましたわね。

これ以上近づくのはさすがに尾行がばれる恐れが出てきますがどうしますの？」

初春の言葉に続いて白井は三人に尋ねる。

「ここまで来たらアイツがどこの部屋に住んでいるかは確かめないと」

「そうですね、仮にばれても部屋さえ分かっちゃえばいいわけですし」

どうするか決まると四人は学生寮の一階に足を踏み入れた。しかし、すでに一階には人の姿はなかった。そして、美琴たちの前には誰もいない廊下とエレベーター、上に続いていく階段があった。

ここで考えられる神無月の行動パターンは三つ、一階に神無月の部屋がありすでにその部屋に入ってしまったパターン、一階より上に神無月の部屋がありエレベーターで昇ったパターン、最後に上の階に部屋があり階段で上に登ったパターンだ。そして、運のいいことにエレベーターは一階で止まっていた。つまり、階段で昇ったか一

階に住んでいるのかどちらかとなった。ど知らがそうか決めかねて少し話していると、

「・・・ん、ちょっと静かに」

美琴が全員に声をかける。するとコツコツとコンクリートでできた階段を上がっていく音が聞こえた。神無月は階段を使っていたのだ。幸いなことに土曜日の昼ごろということもあり、学生寮は静かだった。今日出かける予定だった者は大体が午前中に出払い、いまだに眠っている学生もいるので物音がほとんどせず、足音も聞こえてきたのだ。そして、四人は階段を上がっていった。

・
・
・
「今何階ですか？」

「・・・たぶん、六階ですわ」

「なんで神無月さんこんな上の階なのにエレベーター使わないんですか」

佐天の嘆きももつともだ。いかに元気な中学生であっても六階まで階段を上がり続けたら疲れる。しかも、尾行の最中ということでも段以上に精神的にも肉体的にも疲れやすくなっているのだ。しかも、神無月はまだ上がっているのだ。四人は神無月の死角にはいるものかなり近くまで接近していた。階段は蛇腹状に上に伸びている。そのため、上にいる人間は蛇腹の折り返し地点である踊り場を過ぎると下をのぞきこまない限りは踊り場より下にいる人間を確認することはできない。それを利用して四人は隠れているので実質的な距離は5mと離れていない。そして、階段を上る音が七階でやっと途切れた。続いて七階の部屋の扉を開閉する音が聞こえて四人は七階へ足を踏み入れた。

「この階のどれかが彼の部屋ですわね」

「私こんなにドキドキしたのは久しぶりですよ」

初春も少しテンションが高い。そして、これからどうするかが問題

だ。七階に住んでいるということは突き止めた。しかし、そこから先がつかまらない。七階の部屋の扉には部屋番こそついてはいるが、防犯のためか名字すら書かれていない。かなり行き当たりばったりの尾行だったため、色々なことに気が回っていなかったのだ。通常、探偵が捜査するのなら、かなりの長期間をかけて調べるため潜伏場所を近くに用意したりすることもできるがそんな用意はしていないし、時間もそこまで多いわけではないのだ。次の一手を四人は考える。

「で、お前ら何してんの？」

いきなり後ろから声をかけられ、美琴、白井、初春、佐天は飛び上がった。とつさに後ろを振り返るとジト目で四人を見る神無月の姿がそこにはあった。

「な、ア、アンタ、どこからいきなりあらわれたのよ!？」

「いや、美琴は俺の能力知ってるだろ。昨日部屋まで運んだばかりでもう忘れたのか？」

神無月は強力な重力によってワームホールを作り空間を移動できるその力で昨日力の使い過ぎで動けなくなった美琴を寮の部屋まで運んだのだった。

「じゃ、じゃあいつからわたしたちが尾行してるのに気付いてたの!？」

「コンビニ出て少ししたときくらい？」

「ほとんど一番はじめからじゃない!」

「って言っても、誰かが付いて来てるなっけくらいで、美琴達四人だっけ気が付いたのはこの近くになっけからだけだな」

「じゃあなんで——」

「まあ待とうぜ。立ち話もなんだし、俺の部屋で話さないか？」

第03話（何か視線を感じる気がする・・・）（後書き）

遅くなりました。

就職試験や学校の中間試験で忙しくあまり書く時間がありませんでした。

まあ、完全になかったかと聞かれればそうではないのですが・・・就職試験、一社目は残念ながら落ちてしまいました。

また、今月中に二社目を受ける予定です。

また、次話をあげるまで時間がかかってしまいかもしれませんが、まだ頑張っていくのでよろしく願います。

応援メッセージや質問も常時受け付けています。

これからの展開に関することは話せませんが、それ以外ならば基本的にあとがきなどでこたえていくつもりです。

今後ともよろしく願います。

第04話 あ——『幻想御手』があつたらな——

「・・・・・・・・」

「ふえ〜〜ここが神無月さんのお部屋ですか」

「意外と綺麗に片付いているんですね」

神無月は四人を自分の部屋に招き入れていた。神無月の部屋の中は、確かに一般的な男子高校生の一人部屋にしてはかなり片付いているほうだ。洗濯物が山積みになっていたり、脱いだ靴下が床に転がっていたり、ほこりが溜まっていたりもしない。しかし、確かに人を呼ぶことができる部屋だといつてもつい数日前に出会ったばかりに女子中学生を四人も自分の部屋に招き入れるのは男子高校生としてどうなのだろうか。

「超能力者^{レベル5}の人のお部屋つてもっとこう訳のわからないものでいっぱいって感じがしてたんですけど、あたしたちの部屋とそんなに変わらないんですね」

「まあ、それなりに人を呼べる程度には掃除してるしな、それに超能力者^{レベル5}つていつでも能力以外は普通の人間だからな、部屋だってたいてい変わらないさ、な、美琴？」

「・・・・・・・・」

「ん、どうした美琴？ そんな借りてきた猫みたいに静かになっちゃって」

神無月が話しかけると美琴はビクリと体を跳ねさせた。

「ベツ（声が裏返った）、別に男の人の部屋に入るのは初めてだなとか、すごく緊張するなとか思っ
てないんだから！！」

「・・・そうか、ま、まあ、とりあえず立ってんのも疲れるだろうし、その辺で好きに寛^{くわ}いでいてくれ」

神無月は部屋の中央にあるテーブルの周り、主にソファや座布団を

指さしながら四人を座るように促す。招かれた四人はお互い顔を見合わせると皆揃って座布団の上に座る。誰もソファの上には座らないあたり、なんだかんだ言っても皆それなりに緊張しているようだった。

「そういえば、今さらだが二人は何て名前なんだ？ 美琴と黒子は知っているんだけど。」

一昨日の身代金要求事件の時は美琴に追いかけて聞きそびれちゃったからな」

そういつて神無月が美琴の顔を見ると美琴は顔を赤くしている。

「それはアンタが私のことビリビリいうから悪いんでしょうが！」

「いや、名前教えられてないのに名前をきちんと呼べと言われても無理だろ。教えてくれたんならともかく教えられてないのに怒られるのは理不尽だろー」

「う、そ、そりやそうだけど・・・」

言葉に詰まってしまう美琴。 いじめすぎるのは趣味ではないので神無月は話題を戻す。

「まあ、いいや。二人の名前は？」

「あ、はい。 柵川中学一年の初春飾利です」
ういはるかざり

「あたしは初春と同じクラスの佐天涙子です」
さてんるいこ

「飾利と涙子な。 分かった、神無月有真だ。」
かなづきゆうま よろしく」

「「よ、よろしく願います」」

やはり、いきなり名前を呼ばれることに驚いた二人だったが、いきなり名前を呼び捨てにしてはならないなどと決まりがあるわけではないので何も言わなかった。しかし、心中ではかなり動揺していた。二人の神無月に対する評価は、人間関係における距離を詰めるのが凄まじく早い人だな」というものだった。とりあえず、全員の名前がわかったところで神無月はお茶を出すことに決め、台所の方へ赴く。そして、キッチンの方から神無月が顔を出して、

「みんな、麦茶でいいか？」

「お願いします」「お願いしますわ」「大丈夫です」「・・・お

願い」

四人とも少しずつ違った反応に神無月は微笑ましく感じる。

「あいよ」

コトツと言つ音を立てて氷と麦茶の入ったグラスを神無月は四人の前に置く。

「さてと、でだ、今日俺の後をこっそりついて来てたのは遊びつてわけじゃないんだろ？」

と本題にいきなり突入する。すると、それに答えたのは白井だった。「回りくどいことは好きではありませんので、率直に聞きますわ。」

有真さん、あなた^{グラスビトン}虚空爆破事件の犯人ですの？」

率直すぎる。例えば犯人でなかったとしても思わず聞き返してしまいそうになるほどの率直な問いかけ。これにはいと答える人間は存在するのだろうか、疑問である。問いかけに神無月は少しの間目をパチクリさせていたが、唐突に笑う。

「ぶつははは、いやまさか率直に聞くとは言っても、まさか本当にそこまで率直に聞かれるとは思わなかった。」

そこで神無月の表情が真剣なものになる。

「で、^{グラスビトン}虚空爆破事件と言うと重力子の加速による爆弾事件だろ？」

まあ、当然ながら俺は犯人じゃないぞ。まあ、犯人に聞いても

『自分は犯人じゃない』って言うだろうけどな。俺もこのごろち

よくちよく感じてたんだ、俺と近い能力が街中でやたらと振るわれているのをさ。それで、容疑者を絞っていくうえで俺に行きついたら、そんなところか？」

「ご推察の通りですわ。容疑者候補はあなたともうひとりの女生徒、しかしその女生徒は一週間ほど前から意識不明。現状で一番

疑われているのはあなたですわ」

「まあ、確かにその状況なら俺が疑われて当然か」

神無月はまいったなあと頭をかく。

「違う」

と不意に美琴がつぶやいた。

「確かに今ある証拠から推測したらアンタが一番犯人だと疑われる。でも、私たちはアンタを疑ってない、アンタが犯人じゃないって信じてる！」

「そうですよ、わたくしもあなたがそんなことをする人じゃないと思っと思っていますわ」

「あたしもです。　まだ、最初にあつたときから本の数日しか経ってないですけど、人質になってた子供たちを助けた神無月さんが犯人だとは思いません」

「わ、わたしもです。　わたしたち神無月さんが犯人じゃないって証明するために尾行してたんです」

出合つて数日でも自分のために行動してくれる人たちがいる。それは神無月の心を揺さぶる。

「俺なんかを信じてくれてありがとう。　つと、もう昼か、じゃあ昼食作んなくちゃな」

そう言つて神無月はキッチンに逃げ込む。照れて赤くなった顔を誤魔化すために。

（『信じてる』か、ホントに嬉しいこと言ってくれるな。　面と向かつて信じるなんて言つたの上条以来じゃないか？）

入学して間もないころ神無月はある事件に巻き込まれたのだが、そのときは上条が信じると言つてくれたことを思い出したのだった。思い返せば、上条と仲良くなつたきっかけもそこから始まつた気がする神無月だった。しかし、それはまた別のお話。

料理を始める前に手と一緒に赤くなつた顔を冷やす意味も兼ねて神無月は顔を洗う。

「四人とも昼飯まだだよな？　うちで食べてくか？」

時刻は正午を過ぎたあたり、昼食には丁度いいぐらいの時間だ。

「別に私たちはお腹すいてないからいいわよ」

美琴がそう答えると、

『くうくうきゅるるるくうくうくうくう』と盛大にお腹が鳴つた、本人以外の全員が音源の方を向く。音源は期待を裏切らず美

とが原因であるのに当の神無月はそのあたりを全く理解していない。
『類は友を呼ぶ』というが神無月も上条に負けず劣らず鈍感なのだった。その頃、首をコクコク振っていた美琴たち四人は、心の中で悶えていた。

（美坂さん、お腹が鳴ったの笑ってすみませんでした。あたしも人のこと言えませんでした。ううう、恥ずかしすぎる）

（恥ずかしいです。佐天さんと一緒に美坂さんのお腹の音を笑ってしまった罰が当たったんですね。うう、ごめんなさい美坂さん、そして忘れてください神無月さん）

（お姉さまを辱めるだけでなく、このわたくしも辱めるとは中々やりますわね。ああ、でも本当にお腹が鳴るのを殿方に聞かれるなんて黒子一生の不覚ですわー！）

（ああ、なんでこんな時ばかりおなかが鳴るのよ。今まで鳴ったことなんて殆どなかったのに。しかも二回って、私だけ二回って、恥ずか死ぬー）

それぞれ四人は思い思いに心の中で苦しんでいた。そんな四人の心の中の葛藤を露ほども知らず神無月はたらこスパゲッティ作りに勤しんでいた。

（生たらこ（125g）と牛乳（100g）とだししょうゆ（小さじ2杯半）を混ぜてつと）

たらこスパゲッティのソースを作る神無月の横では鍋で五人分のスパゲッティが茹でられている。神無月も『学園都市』に入ってから長くたつ。今の学生寮に入ったのは今年だが、親元を離れて『学園都市』に来たのは中学生になった時だ。つまり、一人暮らし歴も四年目に突入したのだ。学園都市に来たばかりのときは料理もまともに出来なかった為かなり外食やコンビニ弁当に頼っていた。しかし四年も一人暮らしを続けていると料理の腕も上がり、並列作業も今では楽々行えるようになっていた。

（っとそろそろ茹で上がり時間か）

鍋の火を消して麺の水切りを行う。そんな神無月の様子をリビング

にいた四人は見ていた。そんな時、初春はあることに気が付く。

（あれ、わたしたちいきなり神無月さんの家に押しかけてきて、昼食しよくを作ってもらって、しかも見てるだけで何もしてない！これってすごく失礼なことをしてるんじゃない？ 少なくとも昼食作りのお手伝いくらいはしないといけないのでは！？ しかも男の神無月さんに作らせて、女の私たちは見てるだけ、これは良くない、なんて言うか女の子としての立場的に！）

焦りを感じる初春は、美琴、佐天、白井に自分の考えたことを急いで伝える。

「あ、あの美坂さん、白井さん、佐天さんも、わたしたちいきなりここに押し掛けてきて、昼食まで作ってもらっちゃって、それを待ってるだけって女の子として不味くないですか！？」

「……！！！！」「……」

バツと四人はキッチンの神無月の方へ顔を向ける。なんだか、割と楽しそうに料理をしているが、それを待っているだけと言うのはやはりどうなのだろう。むしろ、『いきなり押し掛けてきたのだから私が作る（ります）』、くらいの事は言うべきだったんじゃないかという考えが四人の頭の中を駆け巡る。

「……料理を作って美味しければ、お腹の音の件少しは頭から薄れるかな」

美琴がポツリと呟いたその一言は初春の一言同様に三人に衝撃を与える。漫画だったらズガンという効果音と共に背景に雷が落ちるくらいの衝撃だった。そして、四人の腹が据わる。

「有真、料理手伝おうか？」

「神無月さん、わたしもお手伝いしますよ」

「あたしも手伝いますよ」

「わたくしも手伝わせていただきますわ」

と四人が神無月に申し出る。神無月は四人を上から下まで眺めると、

「……ああ、大丈夫。もうすぐ出来上がるから」

「ちょっと、今の沈黙は何！？ 私たちに料理ができないとでもい

いたいわけ」

神無月は少し目を背けて言う。

「いやー、なんかベッタベタな爆発落ちが見えた気がしたから」

「アンタ、ちよつと失礼じゃない!？」

美琴が食いつくと他の三人も不満気にブーブーいう。

「そうですよ、いくらなんでもひどいですよ」

「そうです。 あんまりです」

「いくらなんでも、失礼ですわ」

それを見て、神無月はプツと笑う。

「嘘、冗談だよ。 手伝わって言っても残ってる仕事なんて海苔を細く刻むくらいしかないからもう少しだけ待っててくれよ。 四人の料理はまた今度ご相伴に預からせてもらうから。 期待してるんですよ」

神無月はニヤツとちよつと意地悪げに微笑む。 『期待している』なんてプレッシャー以外の何でもない。 しかも、『失礼だ』と文句を言った手前四人は断れない、自らハードルをかなり高くしてしまったことに今更ながら後悔し始める美琴・白井・初春・佐天だった。

神無月は四人が神無月を手伝おうかと話しているときにはすでに、水を切ったパスタをフライパンでソースとオリーブオイルを絡めて火を通して皿に盛り付けまでし終わっていて、あとは本当に海苔を刻んで上に乗せるだけという状態まで作り上げていた。 神無月は味見に一本麺を引っ張り食べる。

（うん、大丈夫だな。 とりあえず、人に出せるレベルにはなっているはず・・・）

神無月は四人を困らせはしたものの、なんだかんだで不味いと言われないか心配だったのだった。

（海苔を刻んで、よし完成つと）

お盆に五人分のたらこスパゲッティを乗せるとテーブルまで運んで置く。

「うわ、お、おいしそうね」

「本当にそうですわね」

「お店に出ている可笑しくないレベルですよ」

「ホントにあたしたち手伝う必要ありませんでしたね」

四人は出てきたスパゲッティに驚く。しかし、そのスパゲッティの素晴らしさは同時に今度、神無月にご飯を作ると言う条件のハードルを上げる。

（これに勝つ料理を作るってかなりハードルが高くない？）

そんな美琴の心境など知らずに神無月は料理を勧める。

「冷めないうちに食べちゃってくれ」

「うん、じゃあ」「いただきます」「」

口に入れた瞬間に四人の口から言葉が漏れる。

「」「」「おいしい」「」

「気に入っていただけて何よりだよ」

その後は談笑を交えつつ昼食は進んだ。スパゲッティもおよそ半分以上くらいになったころ佐天が周りを見回す。

「今さらですけど、この部屋って学園都市に八人しかいない超能力者が二人もいるんですね。あゝあ、あたしも超能力者とはいかないまでも少しは能力が使えるたらよかったんだけどな」

「佐天さん・・・」

初春は何か言おうとしたが、言葉が続かず、この件に関しては超能力者である神無月も美琴もどうしようもないため、お互いあいまいな表情を作ることしかできない。

「あ、ごめんなさい。あたし空気悪くしちゃいましたよね。で

も、あ——『幻想御手』があったらなー」

「え？　なんですかそれ？」

幻想御手という聞きなれない単語に初春が反応する。

「いやー、あくまでも噂であたしも詳しいことは知らないんだけど、あたしたちの能力の強さを簡単に引き上げてくれる道具があるんだって。それが幻想御手・・・ま、ネット上の都市伝説みたいなものなんだけどさ」

学園都市には学園都市内だけの都市伝説が掃いて捨てるほどゴロゴロ転がっている。信憑性の全くないものから本当にあるんじゃないかと思ってしまうような物まであり、そのカテゴリも様々だ。お化けやら妖怪やらのオカルトチックな話から今回の幻想御手のような実際にあるんじゃないかと思われるようなアイテムの噂まである。「実際にあつたらすごいですけど、そんな便利なものがあるならわたしたちがこんなに苦労してるわけじゃないじゃないですか」

「うん、そうだね。でもさ本当にあるならあたしでも・・・」

「？ 佐天さん？」

「アハハ、なんでもないよ——」

二人の会話を聞いていた美琴と白井の頭の中では同じことが考えられていた。

（大能力者量子変速の釧路帷子でも超能力者）絶対重力の神無月有真うまでもなかったら書庫バンクに乗っていない能力者の犯行。そして今の噂、幻想御手レベルアップバー・・・関係がある？ そんなものが実際にある？ まさか・・・ね）

朝、初春たちとすれ違ったメガネの少年も下校時刻となり教室を出るためにカバンを持ち上げ肩にかけた時だった。

「よう」

後ろから聞きたくない声が投げかけられる。振り返るとそこにはクラスメイトの男三人がいた。そのうちの細身の男が見下したような不快な笑みを浮かべている。

「また、ちつと金貸してくんね？」

この『金を貸してくれないか？』と言う言葉を聞き始めてもうどのくらいになるだろう。『金を貸してくれないか？』何度、その言葉を聞いただろうか。そして貸した金が返ってきたことなど一度もなかった。最初の一回はただ金を貸してほしただけだと思い彼

らの言う額を貸し出した。しかし、そこから毎日金を貸してくれ
と言うようになった。

「え・・・でも、こ、こないだ貸した分も・・・返してもらってな
い、よね」

そういうと三人のクラスメイトは無表情になり互いに顔を見合わせ
る。

・
・
・

ゴツ、ガスつという音で体育館裏に響き渡る。

「やつ、やめ、うぐ」

メガネの男は体育館裏に連れてこられ暴力を受ける。殴られ、蹴ら
れ、足で顔を踏みつけられる。

「ちゃんと返すって言ってんだろ？ 出世払いでさ———だいたい
無期限無利息無制限がお前の売りだろ？」

そんなこと言った覚えもそうであるつもりもなかった。暴力で地面
に転がされその拳句財布も盗られ中身を奴らが数える。

「ちっ、これっぽっちか」

「小銭は残しといてやんよ」

そう言っただけから同然になった財布を投げ返される。

「よ———す」

そう言っでもう一人の奴が返ってきた。

「そっちはどうだった？」

「楽勝楽勝、廊下水浸しに^{ジャッジメント}ただけで風紀委員の奴ら総出で片づけ
だしてさ———」

「「アーハッハハ」」

暴力をふるうのが細身の男、体育館裏に誰も来ないか見張っている
のがデブの奴、そしてもう一人はこれだ。

「見回り後回しにしてお掃除か。あいつらホント頭力^{ジャッジメント}テーよなあ」
「頭力^{ジャッジメント}テーから風紀委員なんてやってんだろ」

「あ、そっか」

笑いながら三人は遠ざかっていく。こちらの事を振り返ったりなどしない。金さえ手に入ればこっちのことなんか全く興味がない。

（クソがつ！！ 風紀委員も何やってんだよ！！ 掃除するところが違っただろうが！！ 無能力者がこの僕に暴力を振ってるんだぞ！

何が風紀委員だ。ジャッジメント お前らが無能だから僕がこんな目に遭っただ。レベル0
気付けよッ・・・！！！！）

こうしてメガネの男の怒りの矛先はあらぬ方へと向いて行く。

「やっぱり俺が犯人じゃないって言ったところで証拠にはならないよな」

全員が昼食のたらしスパゲッティを食べ終わったところに神無月が再び話題を戻した。美琴、白井、初春、佐天は別に昼食を食べるために神無月を尾行していたわけではない。あくまで、神無月の虚空爆破事件における無実を証明するためにここまで来たのだ。しかし、四人が神無月の部屋を訪れてした事といえば神無月に『あなたは犯人じゃないよね』と聞いたということだけだった。つまり何の解決もできていない。

「そうですね。 本人の証言で無実の証明ができるなら犯罪者なんて現行犯以外は全員いなくなってしまうますものね」

「じゃあどうするのよ、黒子」

そう美琴が白井に尋ねたところで神無月はおもむろに立ち上がりキッチンの方へ向かうと冷蔵庫から人数分の食後のデザート（今日コンビニで買ったムーンノエルという洋菓子）とスプーンを持ってきて全員に配る。

「そのことなんだけどさ、休日にアリバイを保証するために一緒に行動してもらえるか？ ここのところ虚空爆破事件グラビトンの頻度も上がってきているから一・二週間の休みだけでアリバイは作れると思うん

だ。 あ、けど迷惑だったら断ってくれてもいい。 皆だつてやることくらいあるだろうし」

四人は顔を見合わせると溜息を吐く。

「何言ってるんですか、あたしたちが何のためにここまで来たのか忘れちゃったんですか？」

「神無月さんのアリバイを確かなものにする為に来たんですからいいに決まってるじゃないですか」

「そうですよ。 それに風紀委員としても早めに解決したい事件ですから気にしないでくださいです」

「と言うわけで全員一致で休日は有真の疑いを晴らすってことに決まったんだから、有真こそ、このことを忘れて一人で出かけたりしないでよ」

「じゃあ、あらためてよろしく」

こうして神無月の潔白を示すための行動が開始されたのだった。

そのころの風紀委員活動第177支部では、白井や初春の風紀委員としての先輩である固法美偉このりみいは虚空爆破事件の犯人に繋がるものがないか過去の事件を洗っていた。

「やっぱり時間も場所も関連性なしか——」

ずっと画面とにらめっこしていたため目が非常に疲れた。 眼鏡を外し、目頭を指で押す。 目頭には目の疲れに効果のあるツボがあるらしいため少しは効果があるのかもしれない。 椅子にもたれ掛り背中を反らして伸びをする。 普段、後輩たちの前ではほとんどやらないような格好だが疲れて行き詰った現状を打破するためには少しくらい力を抜いて見直したほうが逆に何かいい考えが浮かんだりするかもしれない。

「現状一番怪しいのはやっぱり神無月有真か。 でも、白井さんはきつと犯人じゃないと言っていたし。 そうすると完全に手詰ま

りね。 もう少し何か手がかりがあれば容疑者の絞り込みもできるのに」

もう一度事件のデータに目を通すが、特に犯人に繋がるであろう共通点はない。

「遺留品を^{サイコメトリー}読心能力で調べても何も出ていないし、同僚が九人も負傷しているのに何も――」

そこで固法は何か引っかけを感じた。

「・・・九人？　いくらなんでも多過ぎない!？」

「ホントにおいしかったですね。 コンビニのデザートと思って甘く見てましたよ」

「だろ、だから近頃のコンビニデザートも馬鹿に出来ないんだよ。

まあ、たまにハズレもあるんだけどな」

「今度、当たりのデザートを教えてくださいよ」

「いいぜ、結構あるから覚悟しなきゃならないけどいいんだな」

「もちろんですよ」

食後のデザートを食べ終わり、佐天と神無月がコンビニデザートの話で盛り上がりその話が丁度終わった。そこで神無月が、

「じゃあ、さつそく悪いけど買い物行かないか？」

「？　まあ、私は別にかまわないけど。 アンタさつきコンビニで買い物してたでしょ？」

「ん、ああ、あれは全部デザート」

「全部!？」

神無月がコンビニから出てきたときに持っていたビニール袋は、通常の学生が一周間は買い物に行かずに生活できる程度の食材が収まるほどの大きさだった。誰だってそれだけの量が全てデザートとは思わない。

「アンタ、昨日も大量に甘いもの買ってたでしょ？　昨日買ったや

「つは？」

「ああ、全部食った」

「！？」

「？ そんなに驚くことか？」

美琴は驚きで目が点になる。白井、初春、佐天は昨日の神無月の買い物を見ていない。どの程度買ったかを知らないため美琴の驚きが伝わらない。

「神無月さん、昨日どのくらい甘いものを買ったんですか？」

「昨日は『はちみつレモンヨーグルトのホイップカスタードシューロール』を30個くらい買ったんだけど、そんなに多いか？」

「多いですよ！ ケーキバイキングの店でだってそんなに食べる人いませんよ」

「そうだったのか・・・」

若干自分の中の常識が否定されて神無月は少ししょんぼりする。

「ところで、アンタは何を買いに行くの？」

「まあ、基本的には食料品かな。さつき冷蔵庫とか棚を見た時だいぶ食えるものが減ってたから。そういう美琴たちは何か^{なん}買うものがあるのか？」

今日もあんなに大量の甘味を買い込んで食べるのに、まだ食べるのかと美琴は思いつつ応える。

「そうね。まあ、少し服とか買いたいかも」

「じゃあ、出かけるって事でいいな、さっそくいくか」

「うん」

「どうしたんだ？ 迷子なのか？」

美琴達四人と買い物に来た神無月だったが、小学校低学年ぐらいの女の子が歩道の真ん中でおろおろしていたので声をかけた（もちろん、変な意味ではない）。こういう場合、^{ジャッジメント}風紀委員である白井や初

春が対応するのが一般的ではある。しかし、一緒に買い物に出かけたはずなのに神無月の周りには四人が四人とも居ない。なぜなら先ほど、

「うあ、これ夏の新作ですよ。可愛い」

といって洋服屋が見えた時、佐天がショーウィンドウめがけて突っ走って行ってしまったのだ。そのとき美琴や白井、初春は引きずられるように連れて行かれてしまい。神無月だけ置いてけぼりを食ったのだった。

（おいおい、俺のアリバイを保証するために一緒に行動するんじゃないのか？）

と神無月は思ってしまう。しかし、問題は目の前の女の子だ。とりあえず、迷子なのか聞いたのだが、首を『ウンウン』と横に振られてしまった。

「じゃあ、どうしたんだ？ 何か探してるものがあるとか？」

その小さな少女は今度は首を縦に振った。

「うん。 お洋服買いに来ただけどお店が分かんない」

「そうか、じゃあ一緒に行くか」

ちょうど美琴たちが佐天に連れていかれたほうに『セブン
セブンスミス
h mist』という洋服店がある。もしかしたら、美琴たちもその店の中かもしれないし、合流するためにもちょうどいい。そのため神無月は小さな女の子と一緒に『セブン
セブンスミス
h mist』
に向かう。

神無月が小学生くらいの女の子と出会う少し前だった。ウィーンという音とともにクレーンが動きぬいぐるみを捕まえた。ゲームセンターの一角であるUFOキャッチャーでメガネの男は慣れた手つきでぬいぐるみを捕まえる。そのUFOキャッチャーの景品はどれを見てもおかしいものだ。中に入っている景品は全て熊やうさぎなど

の動物の形のぬいぐるみなのだが全てのぬいぐるみが禪ふんとしをつけているのだ。たった今、メガネの男がクレーンで挟んだカエルのぬいぐるみにしても禪ふんとしをつけているし、両目は焦点が合っていないかのようであらぬ方向を向いている。これが本当に売れるのかと疑問に思わざるを得ないものだ。メガネの男は捕まえたカエルのぬいぐるみを持ち上げ、商品をきちんと穴に落とす。そして、わざわざ手袋を手にはめて商品を取り出す。

（新しい世界が来る。 僕が僕を救う。 僕を救わなかった風紀委員ジャッジメンはいらない）

そんなメガネの男の隣を女子中学生四人の集団が通り過ぎていく。メガネの男の目が細くなり、顔を醜く歪めて笑う。女子中学生の集団には風紀委員ジャッジメントの腕章をつけた女子が二人いた。一人はツインテール、ひとりは頭に大量の花飾りを乗せた少女だった。メガネの男はカエルのぬいぐるみを抱えつつ、彼女たちの行先を見届ける。『— Seventh セブンスミスト mist』という洋服屋に彼女たちが入っていたのを確認するとメガネの男は鞆の中に大量に入っているスプーンを一つ取り出したのだった。そして、そのスプーンはアルミで作られたものだった。

「初春、こんなヒモパンなんてどう？」

「はい！？ 無理無理絶対無理です。 そんなの穿けるわけないじゃないですか！」

『— Seventh セブンスミスト mist』の中では、初春が佐天に勧められたパンツを見て赤面していた。

「え〜、でもこれならあたしにスカートめくられても堂々と周りに見せつけられるんじゃない？」

「見せないしめくらないでくださいッ！！」

そんな二人の様子を美琴は「……………」という様子で見っていた。

（初春さんて、普段こういう風に佐天さんに弄られてるんだ・・・というか、今の話の流れだと初春さんて他の人のいる前でスカートめくられてるんだ・・・）

美琴は初春の様に公衆の面前でスカートをめくられることはなくとも、白井に下着を奪われたり、シャワー中に突撃されたりするため、初春に変な親近感が浮かんできてる。そんな時、

「お姉さまは何をお求めになりますの？」

と言いながら白井がかなりの防御能力の低そうな下着を持ってやってきた。それはRPGを始めたばかりの主人公張りの防御力の低さで下着を通して向こう側の風景が見えるレベルだった。

「私はパジャマとか見に来たけど・・・アンタのその下着もうちよつとどうにかならない？」

「わたくしとしてはお姉さまの下着の子供っぽさの方こそどうにかしてほしいですわ」

ムムムと二人の間で火花が散る。美琴と白井にしては珍しい意見の食い違い箇所だった。どうしても二人は下着においては分かりあえないようだ。ちなみに美琴は白井と逆で防御能力高めのパステル調下着を好む傾向にある。二人の下着の中間くらいを選べば年相応な下着になりそうなものだが、二人ともそれぞれこだわりがありどちらも妥協はできなかった。

「はあ、まあこのお話はまたにしましょう。お姉さまの探しているのはパジャマでしたわね。それでしたら確かこっちの方にありましたわ」

白井が「こつちですわ」と言って先導すると、下着を見終わったのか初春と佐天も美琴達と一緒に寝具を見るために近くにきた。

「うーん。今までも色々回って探したんだけど、あんまいのが置いてないのよねー」

きよろきよろと周りを見渡していると美琴の視線がある一カ所で固定される。そう、それはパステル調の色合いで所々にデフォルメされた花柄があしらわれていたパジャマだった。端的に言って美琴の

好みど直球のパジャマだったのだ。そのパジャマを見つけた瞬間美琴な顔がほわんと緩む。

「ね　ね　これカワ——」

美琴が自分の探し求めていたものを見つけた喜びから隣の佐天や初春に同意を求めようとし、振り返ると二人はパジャマを見て笑っていた。

「アハハ　見てよ初春このパジャマ！　すっごいセンス。　今どきこんな子供っぽい着る人いないっしょ」

「そうですね。　小学生の時までは、こういうの着てましたけどね——」

美琴はカワイイと言おうとした言葉が途中で途切れ、“これ”と言つて示そうとした指が下に下がってしまう。

「そ・・・そうよね！　中学生になってこれはないわよね」

自分の意見に恥ずかしくなった美琴は二人にパジャマを可愛いと言つていたことを気付かれなかったものの顔を赤くして慌てて二人の意見に便乗した。

「あ、御坂さんあたし水着も見えておこうと思うんですけどいいですか？」

「ええと・・・水着コーナーはあっちですね」

そういうと佐天と初春は水着コーナーの方へ向かった。白井は美琴の趣味を知っているため、美琴が二人の前で試着できないことに気が付き空気を読んで初春と佐天の方へ向かった。三人が十分に離れたことを見届けた美琴は、初春と佐天に子供っぽいと評価されたパジャマを手取る。

（いいんだモン。　どうせパジャマなんだから他人に見せる訳じゃないし！　黒子はいいいとして）

若干、理解してもらえないことにいじけてしまいそうになる美琴だったが、それでもやつと好みに合うパジャマを見つけた美琴はそのパジャマをあきらめきれない。手にしたパジャマを抱え、初春や佐天の様子をもう一度見る。

（初春さん達は向こうにいるし、一瞬姿見であわせるだけなら
ばれない）

そろりそろりと気付かれないように鏡の前まで移動してパジャマを
急いで体に合わせる。

（それっ）

急いで自分の体に合わせたパジャマの丈の具合とかを見ようとして
美琴は気付いた。鏡には自分以外にも人が映っていて自分の姿を見
ていることに。

「美琴、何でそんなに挙動不審なんだよ」
神無月だった。

「——ッ？——ッ」

「!?」

美琴は驚きで声も出ない。

まさか、見られた!?　なんで、嘘、ここに?　え、どうということ
?　?

「な、なんで、アンタがここにいるの!？」

そう言いながら、美琴はパジャマを急いで元の場所に戻す。

「何でって・・・完全に忘れてるよ——おいおい、俺の監視はど
うしたんだよ」

一番最初の理由、美琴達が買い物に来たのは神無月のアリバイの証
人になるために神無月の買い物についてきた・・・はずだったのだ
がいつの間にか四人ともすっかり忘れていたのだった。

「おに——ちゃ——ん。この洋服どうかな——」

美琴の知らない小さな女の子が神無月に向かってトテトテと走って
きた。

「えっ、お兄ちゃんってアンタ妹がいたの？」

「ちがう。美琴達に置き去りにされた後、その子は洋服屋がここ
にあるか分からないって困ってたからここに連れてきただけだ。

（まあ、実際の妹は・・・）

美琴は、神無月の言葉の最後の方がボソツとした小声だったため聞

き取れなかった。しかし、神無月は困ったような、あきらめたような顔をしていてあきらかに目が泳いでいるため繰り返し聞くことはできなかった。すると小さな女の子が美琴に話しかける。

「あのね。オシャレな人はここに来るってテレビで言ってたの。」

わたしもおしゃれするんだモン」

「そうなんだ。オシャレな服を買って可愛くしないとね」

「うんっ」

小さな女の子が嬉しそうに頷くと美琴も自然と笑みが浮かんでしまふ。

「なあ、流石にここ女性用の服しか置いてないから俺はなんか居心地悪いんだけどその子のこと任せちゃっていいか？俺は入口の所にいるから」

「え、行っちゃうのにおにーちゃん」

「ん？ここは女の子の服しか売ってないからな、俺は入口のところで待つてるよ。分からないことがあったらお姉ちゃんに聞いてみな教えてくれるから」

「じゃあ、またあとでね」

「おう、またあとでな」

そう言つて神無月は美琴と小さな女の子から離れて行つた。女の子の事も気になるが美琴はさらに気になることがあった。

（・・・見られたかな？有真からは私の背中しか見えていなかったはず・・・でも、あいつが鏡に映つた私を見てたらパジャマも見られた可能性も・・・）

一人心の中で悩む美琴の後ろから白井達三人が戻ってきた。

「あれ、御坂さんその子どうしたんですか？」

「あ、初春さん。この子は洋服を探してたんだけど、どこにあるか分からなくて探してたところを有真と合つてここまで連れてきてもらったんだって。で、有真はここ女性用の洋服店だから居心地悪くて入り口付近にいるって」

「そうだったんですか」

初春は小さな女の子の目線までしゃがむと優しく話しかける。

「探してたお洋服は見つかりましたか？」

「うん！ これ、でももつとオシャレなものもあるかもしれないからもうちょっと探すの」

小さな女の子に優しく話しかける初春を見ていたら、パジャマを神無月に見られたかもしれないことを気にしていた自分が情けなくなってしまう美琴だった。

「・・・私 ちょっとはずすわね」

美琴は少し気分を変えるために化粧室へ向かう。そして、洗面台の前で自分の姿を見ながら思う。

（はぁー、情けないな。パジャマを見られたかもしれないくらいで）

そんなことを考えながら美琴は化粧室を出て、廊下を歩いていると横から美琴の大好きなカエルのキャラクター『ゲコ太』の気配を感じ思わず振り返る。

（！！ ゲコ太！？）

そう思っで良く見ると階段の近くに禪を穿いたカエルのぬいぐるみを抱えた男子学生がいた。しかし、もちろんゲコ太は禪など穿いていない。ゲコ太は上半身にスーツを着こなす紳士的ジェントルなカエルだ。禪一丁の露出カエルなんかではない。

（なんだ、ゲコ太じゃないのか・・・っか全然似てないわ。でも、あの人あんなところで何やってるんだろ）

そうここは神無月が出て行ったように女性用の洋服（下着や水着等を含む）を売っている店だ。ほとんど男子学生は来ないし、来るとしても彼女へのプレゼントくらいだろう。しかも、プレゼントにしたって階段付近でぬいぐるみを抱えているのはおかしかった。しかし、美琴は『まあ個人趣味嗜好や考え方は違っし、まいつか』と考えるのを止めて、白井やさっきの小さな女の子が待っている場所に向かう。しかし、元の場所に戻ったはいいいが小さな女の子がい

ない。

「あれ？ あの子は？」

「あ、御坂さんあの子ならお手洗いに言って言っていましたけど、すれ違いませんでした？」

「ううん、ぜんぜん」

「あれおつかしいな、すれ違いにでもなったのかもしれないね」

『~~~~~』

そんな時、初春の携帯が鳴った。

「はい、もしもし」

『初春さんッ！！ 今どこにいるの！？』

「ふえ？ 固法先輩？」

いきなりの大声に初春は驚く。特にいつもは冷静な固法先輩が大声を上げたのだ驚きも当然だった。

『^{グラビトン}虚空爆破事件の続報よ！』

「えッ！？」

『^{グラビトン}衛星が重力子の爆発的な加速を観測したの』

「か、観測地点は？」

『今、現場に^{ジャッジメント}風紀委員達を急行させているから。あなたもできる

だけ速く現場に向かって！』

「で、ですから観測地点はどこですか？」

『第七学区の洋服店『セブンスミスト』よ』

「ラッキーです！ わたしと白井さんは今ちょうどそこにいますッ！！」

『ッ！？ ホントなの——』

急いでいた初春は固法の言葉に気が付かずに電話を切ってしまった。

「美坂さん！ 白井さん！ 固法先輩からの知らせがありました。」

今、この店の中で—^{グラビトン}虚空爆破《重力子の爆発的な加速が観測されたそうです！」

「！！？」

「今度はこの店が標的だと言う事ですよ？」

「どうも、そうらしいです。ですから避難誘導を始めましょう。」

御坂さんも手伝ってもらって良いですか？」

「もちろんいいわ」

しかし、ここで美琴は心の中で焦りを感じていた。

（また、虚空爆破事件。^{グラビトン} しかも今回、有真はこの店にいる。罪を晴らすどころか疑いが濃くなる一方。ここで、真犯人を捕まえないとたとえ無実でも有真は捕まるかも——）

だが、爆弾は待つてくれない。今は、民間人の非難が最優先だった。初春は佐天も外に避難するように言う。

「佐天さんも早く非難を」

「う、うん。初春も気をつけてよ」

その間に白井は店の従業員に爆弾のことを告げ、客を避難させるように指示を出させる。美琴も、急いで店内から逃げ出す客を誘導し安全に且つ速やかに被害の届かないところまで送り出す。そして、彼女たちの頑張りのおかげで五分と掛からずに店内に残る人影は一つもなくなった。店内をざっと見まわし美琴は何とかなったと息をつく。

「よしっ、とりあえず、これで全員——」

「おいっ！ 美琴！」

そんな時、神無月が血相を変えて走ってきた。

「アンタ何でまた戻って来てんの！ 民間人は外に退避しろって言われたでしょ！ それにアンタがこんなところにいたら今度こそ捕まるかもしれない！」

「分かってる。でも、それどころじゃない！ あの小さな女の子この店から出てきてないんだ！」

「！？ 見落としたとかじゃないの？」

「見落としてはたぶんない、入口のところで全員確認してたがそれらしい子は出てこなかった」

神無月と美琴が話しているときに初春の近くに白井がやってきた。

「初春、避難状況はどうですの」

「はい、たぶん全員の避難が終わったと思いますけど、今から確認

を——」

そんなとき初春の携帯電話が再び固法からの着信で鳴った。

『初春さん！ 初春さん！』

「はい。 今、全員避難したかを確認して——」

『白井さんと共に今すぐそこを離れて！ 過去の事件のすべてで風紀委員が負傷していることが分かったわ！ 犯人の真の狙いは観測地点周辺の風紀委員だったの！』

初春は時間が止まったかのように言葉をなくす。初春の脳が停止する、固法のいうことが分かってても理解が追いつかない、呆然としてしまう。そんな初春の状況を察したのか固法は的確に今の状況を叫ぶ。

『今回のターゲットはあなたと白井さんだということなの！！！！』
その時、初春の後ろからパタパタという子供独特の軽い足音が響いてきた。

「おねーちゃん」

まだ、あの女の子は店内に残っていたのだ。初春が女の子を振り返ると禪を付けたカエルのぬいぐるみを差し出すように持ってこちらに走ってきていた。

「メガネをかけたおにーちゃんが風紀委員のおねーちゃんに渡して
つて」

そのようすに神無月と美琴も女の子に気が付く。とりあえず怪我をしていない様子からとりあえず、ホッとした二人だった。しかし、二人はすぐに表情が変わる。美琴は怪訝な顔になった。なぜなら、そのぬいぐるみに見覚えがあったのだ。そう先ほど階段で見かけたメガネの男が持っていたぬいぐるみと全く同じものだというところに、そして神無月は驚愕した顔になる。神無月は重力を操る能力者だ、その根源は重力子を操ることにある。そして、重力子が爆発的な加速を始めたことにも自分で気が付いた。目視すればどこが中心に起こっているかもわかる。そして、小さな女の子の抱えたぬいぐるみがその中心にあることに気が付いたのだった。そして、神無月が叫

ぶ。

「そのぬいぐるみから離れる！！ そいつが爆弾だ！！」

神無月が叫んだ直後、ぬいぐるみの胴体の中心あたりからブンという鈍い音が響き、音源と同じところにエネルギー球体のようなものが現れた。それを見ると初春はとつさにぬいぐるみを突き飛ばし、女の子を守るように抱きかかえて蹲る。

地面を転がったぬいぐるみはメキメキと音を立てそうに潰れながら球体の中心に吸い込まれていく。そして、周りの空気すらも吸い寄せるようにしながら圧縮されていく。神無月はそれを見て即座にどのような原理なのかが見て取れた。虚空爆破事件^{クラビトン}の犯行に使われた爆弾はアルミを起点に重力子の速度を加速させ、それを周囲にまき散らすと聞いていたが、細かいことは今見て理解できた。重力子の加速によって強力な重力を生み、その力で周りの空間を歪ませ空気が起点となったアルミを含めた周りのものを吸い込む。そして使用した能力の強さのところまで重力子を加速させるが、それが終わると空間が元に戻ろうとする力で吸い込んだものを一気に吐き出しまき散らす。重力子の加速度が分かる神無月は心の中で舌打ちする。
（クソッ、この重力子の加速の仕方はまずい！ 今まで死人が出なかったのが奇跡のレベルだぞ）

神無月にとっては使えるレベルの力だが、どう見積もっても大能力者^{レベル}クラスの出力でようやくなせる技だった。すでに爆弾は急激な重力で空間をゆがませているためぬいぐるみがすでに原型をとどめていない。その収縮の度合いから限界が近いことが誰にも見てとれる。あと数秒もせずに大爆発を引き起こすだろう。白井の能力は空間移動^{テレポ}だ。もちろん、人間だって運ぶことができる。しかし、どんなに頑張っても一度に運べる人数は白井を含めて三人。人間をテレポトさせる時には万に一つも変な場所、例えば壁の中などの間違った場所へ空間移動させる訳にはいかないので必ず白井も一緒に飛ぶ。そして、今この場にいる人間は神無月、美琴、初春、女の子、白井の五人どう頑張っても人数オーバーだった。白井は空間移動^{テレポ}で自分

員さえもこの場の收拾が付けられずに困っていた。

「危険です！ 危ないから下がっていて！！」

そんな様子を見て、裏路地に入った男の口からは声が漏れた。

「ククク・・・」

思わず出てしまった声だったが、その声は暗い負の感情そのものから来る笑い声だった。

（いいぞ、今度こそ逝っただろう）

「スゴイツ！ スバラシイぞ僕の力！！ 徐々に強い力を使いこなせるようになってきたッ！！」

メガネの男は自分の能力に酔って、有頂天になり空を仰ぎ見上げる。そして浮かれてたがために後ろから近づいてきているに人影に全く気が付いていなかった。

「もう少しだ！ あと少し数をこなせば無能な風紀委員もアイツラもみんなまとめて吹き飛ばッ……！？」

メガネの男は最後まで言い切ることができなかった。なぜなら、後ろから近づいてきた美琴に背中の中心を、神無月の放った上段回し蹴りを後頭部に同時にくらい路地裏に溜められたゴミの山にバウンドしながら蹴りこまれたからだった。

「ゲフツ。 ?? な！？ いったい何が？」

メガネの男が顔を上げると二人の男女がにこやかにほほえみながら立っていた。

ほほえみ【微笑み】

？顔の表情が笑顔を形作っていること。

？怒りを通り越したときに浮かんできてしまう表情のこと。

？哀れな人間に向けられる蔑みと怒りが形作る表情のこと。

例、二人のほほえみからは「テメエの幻想をぶち殺す」50%「スクラップの時間だ」25%「ぶち殺し確定ね」25%を感じざるを負えなかった。

—— 若者のための学園都市特殊国語辞典参照

「はーい？ 要件は言わなくても分かってるわよね——爆弾魔さん」

メガネの男が凍りつく。地面に座りながらメガネの男は少しずつ後退していく。

「な、何のことだか僕にはさっぱり・・・」

「まあ、威力は大したもんだよ。大能力者^{レベル4}つてところか？ ま、実戦向きじゃないけどな」

「でも、残念。死傷者どころか誰一人カスリ傷ひとつ負ってないわよ」

「なっ！？ そんな馬鹿なっ！！ 僕の最大出力だぞー！！」

「ほう」

誰もかすり傷ひとつ追ってないと言われ、プライドに傷を付けられたメガネの男はついっかかり口にしてしまった。それを聞いた美琴の目が細くなる。

「はっ」

たったふた文字の言葉がメガネの男に極限のプレッシャーを与える。「い・・・いや、外から見てもすごい爆発だったんで中の人はとても助からないんじゃないかと・・・」

そう言いながらメガネの男は後ろのあるバグの中からアルミ製のスプーンを美琴や神無月の目から見えないように取り出した。そして、それを爆弾として使おうと前に出した。しかし、重力子^{グラビトン}が加速する気配がない。

「悪いな、お前の重力子^{グラビトン}の加速はさっきの爆弾で見させてもらったからな、俺の近くでその能力で重力子^{グラビトン}を加速させようとしても即座に加速を止められる」

「超能力者^{レベル5}絶対重力^{ブラックホール}！」

そして次の瞬間、メガネ男の頭の横を音速の三倍の速度で何かが通り抜けスプーンは持ち手を彼の手の手の中に残して消えさった。美琴の指先からパチパチと超電磁砲^{レールガン}の余韻の電気がはじける。

「と、常盤台の『超電磁砲^{レールガン}』」

言った瞬間メガネの男は、美琴に腕を取られ地面に組み伏せられた。
「暴れてもいいけど、今の私に手加減できる保証はないわよ」

メガネの男は怒りの表情で叫ぶ。

「ハッ！ 今度は常盤台のEス様か！ いつもこうだ、何をやっても僕は地面にねじ伏せられる。殺してやるッ！ お前みたいなのが悪いんだよ！ 風紀委員^{ジャッジメント}だってッ！ 力のあるヤツなんてのは皆そうなんだろうが！！」

そう叫んだ時、ガツとメガネ男の襟を神無月が掴み上げる。美琴が腕を抑えていたためメガネ男の肩の関節が限界まで後ろに逸らされ軋んだ。

「ふざけんなよ、風紀委員^{ジャッジメント}が一体お前に何したっていうんだよ！ 風紀委員^{ジャッジメント}だけじゃない巻き込まれる人間はお構いなしか？ あ？

お前、小さな女の子にぬいぐるみ渡せつつたんだろ、子供だぞ！ 爆発すりゃあの子だって死ぬかもしれないって分からなかったわけじゃねえだろうが！ そんなことをしておいて力のある奴が悪いだあ？ 甘えてんじゃねえ！ それだけの力を持っていて大勢の人を苦しめてきたお前がそんなこと言って通るわけがねえだろうが！ 関係ないやつを巻き込んだ時点でお前の行動はただの憂さ晴らし、八つ当たりなんだよ！」

神無月の心からの怒りにメガネの男は竦み上がる。そして、美琴は掴んでいた腕を放すとメガネ男の正面に立ち顔を見据えて話す。

「アンタやっていいことと悪いことがあるのよ。それに私は最初^{レベル5}から超能力者^{レベル5}じゃなかった。最初はただの低能力者^{レベル1}だった。頑張って、頑張って今ここにいるのよ。でもねっ、たとえ低能力者^{レベル1}のままだったとしても私はアンタの前に立ちふさがったわよ。アンタのやったことは許せないしそれ以上に力に依存するアンタの弱さに腹が立つ」

美琴は一度息を吸い込むとこぶしを固め、

「アンタにはアンタの事情があるんでしょうけど。

相談に乗る前

に一発殴らせてもらっわよっ！」

そして、裏路地にゴンという鈍い音が響き渡り、メガネの男の頭にはかなりの大きさのたんこぶができたのであった。

そのころの事件現場では、白井が事件現場の見直し、初春が事件に巻き込まれた女の子の世話をしていた。白井は事件現場を見て、爆発跡を真剣な顔で眺めていた。そのとき、事件対応の応援に駆け付けてくれていた風紀委員の一人が白井に声をかける。

「あの・・・容疑者の少年を確保した模様です」

「・・・了解ですの」

受け答えはするが、白井は事件の爆発痕を眺めるのをやめない。白井が見ている爆発痕それは普通の爆発痕ではなかった。通常爆弾が爆発せれば、その爆発は爆弾を中心に全ての方向にばらまかれる。つまり、爆発痕も中心からあらゆる方向に放射状に広がり円を描くはずだ。しかし、今回の爆発痕はそうではない。美琴や白井・初春たちがいた方向だけ床がそこに壁があつたかのように完全に無傷。もちろん、爆発時には床だけでなく人がいたところの空間も直接的には何も起こらなかった。まあ、爆発後の粉塵やら煙・爆発音は少し白井たちを咽せたりはしたものの、爆発による熱量や瓦礫・衝撃などは一切来なかった。

「これが、今のわたくしとあの方の力の差ですか・・・」

爆弾が爆発する直前に白井は何もできなかったことを後悔していた。もちろん、白井の避難誘導により大勢の人々が助かりはしたが、爆発時には何もできなかったことが悔しくてたまらなかった。爆発痕は自分の無力と見せつけられた力の差を浮き彫りにする。爆発前に何もできなかった自分と爆弾に向かって飛び出した神無月との差を。そんな風に少しの間悩んでいた白井だったが、急に頭を左右にぶんぶん振り回すと目に力を取り戻して前を向いた。

（反省タイムは終了ですわ！　今はまだ追いつけません、それでもこれから追いつけないと決まったわけではありませんの。　お姉さまやあの殿方の隣に立っていても恥ずかしいようになりますの。　いつまでも守ってもらってばかりの黒子ではありませんわ！）

新しい目標を定めた白井の目には力強くそれでいて鋭さすら持った炎が踊っていた。

店の入り口にあるエレベーターのところで美琴は神無月と白井や初春が戻ってくるのを待っていた。現在、神無月は警備員に事情聴取を受けていて、白井と初春は風紀委員の仕事をしているのだ。神無月が事情聴取に行く前までは美琴が事情聴取を受けていたのだが、入れ替わりで神無月の順番になったのだった。美琴はエレベーターの扉に寄りかかりながら白井と同様に爆発時の事を思い出していた。
（超電磁砲なんて呼ばれていても、肝心なときに撃てないんじゃないか、何のための超電磁砲なのか分かんないわね・・・）

自虐的な笑みが美琴の顔に浮かぶ。そして同様に真剣な表情も。

（あの時、超電磁砲のコインを落として撃てなかった私と違って、有真はきちんと爆弾の人的被害を最小限にした。私がコインを取り落としたことに驚いている最中にアイツは飛び出して行って私たちも目の前に壁を作って全員を守った。　あゝあ、同じ超能力者のはずなのにな——）

そう、あのとき神無月は爆弾が爆発する直前に全員の前に走っていき、黒い壁を出現させた。神無月の重力操作によって作り出された黒剣と原理は同じで、絶対重力による壁だ。黒剣と同じく事象の地平面つまりブラックホールの吸収可能領域で黒壁を形作っているため、壁に向かって飛んでくる爆風も爆発によって飛ばされる瓦礫も全て美琴達には届かなかったのである。　ありとあらゆるものを吸収

するその性質は絶対的な防御力を誇る。今のところ、この壁をぬけた攻撃はない。上条の右手ならば破壊できるだろうが、上条と神無月は協力して戦ったことはあってもぶつかりあったことはなかったため未だにこの壁を突破した攻撃を出した者はいなかった。そんな力を見せられた美琴は少なからずショックだった。

（能力がチート過ぎじゃない。なんで私の周りには、絶対重力とイマジネーションプレイカーか幻想殺しとか私の攻撃すら軽々防げるような奴ばかり集まってくるのよ。確かに今日はその絶対重力のおかげでみんな無事だったわけだけど・・・よし、決めた。借りは絶対返す）

いつか、神無月に自分の力を認めさせてやろうそう思いながら美琴は拳を握りしめた。

自分の力の至らなさを自覚し、それでも前を向いて行ける人間はそんなに多くはいない。高位能力者ならば自分の能力に自信を持ち、それを支えに生きている場合が多いためそれがくじかれた時はもう一度前を向くことすらできない場合が多い。しかし、美琴や白井は高位能力者であつてもくじけない。美琴は自分の努力でここまでたどり着き、白井は自分よりも強い美琴の背中を見てここまで来たのだ。力のなかったころの自分や自分の目標を見て成長しようとした人間はまた目標を立てられる。だからくじけない。しかし、目標を追い続けても報われない者は立ち止まってしまふ。佐天も自分の無力さを感じて努力をしても報われなかった人の一人だった。佐天は店の外から現場を眺める。風紀委員や警備員が事件現場を封鎖していて中には入れなかった。その境界の向こう側にいる神無月や美琴、白井・初春、境界よりこちら側にいる自分。この境界こそが彼らと自分との違いだと言われているような気さえしてくる。

（はあ、なんであたしにはなにも出来ないのかな・・・わたしはいつも守られるばかり。能力さえあればみんなに守られるばかりじ

やなくなるのかな・・・)

今回の事件で佐天以外は現場で戦っていたのに、佐天は避難するこ
としかできなかった。その重みはその立場の人間にしか分らない
例え、大多数の人達が避難したのだとしても身近な人間が戦ってい
るときに何も出来ない辛さは確かに佐天の心にずしりとのしかかる
のだった。

『—Seventh mist』の被害のなかった従業員休憩室で
事情聴取が終わり神無月が店内を歩く。

「あの警備員のおっさん何回『本当に君は事件に関与してなかった
んだね』って聞けば気が済むんだよ。20回以上も聞くか普通？

犯人逮捕に協力したのに何か釈然としないぞ」

神無月の独り言だが、独り言にしなければやっていられないことも
ある。実際、神無月は暑苦しい筋肉質の40代警備員アンチスキルの男に本当に
君は事件に関与してなかったんだね』と52回も聞かれている。2
0回どころの話ではない。美琴の事情聴取にかかった時間が20分
だが、神無月の事情聴取時間は2時間である。6倍の時間だ。ふざ
けている。

そのうえ、その警備員のおっさんは通常警備員アンチスキルが着ている制服を脱
いでおりタンクトップでの事情聴取だった。確かに夏休み前で、熱
い。それは分かる。しかし、そんな暑苦しいおっさんと部屋の中で
二人きり。筋肉質の腕に汗は浮いているし、蒸気すら立っているよ
うに見える。さっきの爆弾で電気系統がやられてしまいエアコンも
なし。それが6時間。神無月は新手の拷問かと思った。そんなわけ
で神無月はかなりげんがりしているのだった。

「はあ、不幸だ」

上条の口癖がうつりそうだった。そんなとき、

「どうしたんですの・・・」

店内にいた白井と初春が神無月を見て、言葉を無くす。事件の被害を無くした時の神無月は元気だったのにかなり憔悴しているのだ。誰だって驚く。

「ん、ああ黒子と飾利か・・・今ようやく事情聴取が終わったよ・・・ハハ・・・」

「まさか、いままでずっと事情聴取でしたの!？」

「そのまさかだよ」

「それはご苦労様でしたの」

白井と初春は心から神無月に同情する。誰が事情聴取をしていたかは知っていたし、どんな事情聴取風景なのか知っているためこの憔悴が意味するところを理解した。

「神無月さん、ホントに大丈夫ですか」

「大丈夫だ、ただ精神的に異常なほど辛かったただけだから」
「・・・」

言葉や表情からどれだけ辛かったかが容易に想像できてしまう。白井や初春でもあの空間は30分と居たくないのだ。そこで神無月が尋ねる。

「ところで、二人の仕事は終わったのか？」

「あ、はい今ちょうど私たちの仕事は終わったところです」

「そっか、でさ、これからどうする？ 爆弾魔はなんだかんだで捕まっただけで買い物とかしてくのか？」

「そうでしたわね、お付き合いいたしますわ。 助けていただきまして、なによりそんなに疲れ切ってしまったている人を放り出していくなんてこと出来ませんわ」

「こんなわたしでも荷物運びくらいはできるんで、手伝いますよ」
「ありがとう、助かる」

それは神無月の心からの声に聞こえた。そして、店の入り口のところで美琴が待っていた。

「おかえ・・・り、大丈夫アタ」

神無月を見たたん白井達と同じように言葉を詰まらせた。美琴は

神無月が帰ってきたら『借りができたからいつか返す』的なことを言おうとしていたのだが出鼻をくじかれた。美琴の時事情聴取時間は20分。その程度があアンチスキルの警備員の事情聴取を普通に受けられるギリギリの時間だ。そのあたりを超える和不快指数Yが時間Xの3乗のグラフのごとく跳ね上がる。何とか平常心で受けられるギリギリのラインだったため美琴はそれほど精神を削られなかったのだ。それほどまでに精神を削られると思っていたなかった美琴の問いに神無月は答える。

「なんとか・・・」

「・・・」

とても何とかなっているようには見えないが、とりあえず美琴は納得することにした。そこで、白井と初春が神無月の買い物に付き合う旨を美琴に伝えると美琴も同じように一緒に行くことに賛同した。そして、四人が店を出ると佐天が待っていた。

「四人とも無事で何よりで・・・す？」

やはり、佐天も神無月を見て言葉が止まる。体の方に怪我はなさそうだが、かなりやつれていたので無事なのか分からなくなってしまう。

「えつと無事・・・ですよね？」

そう聞かれ神無月は白井や美琴の時と同じように答える。そして、佐天にも買い物の続きの件を話すと佐天も二つ返事でOKだった。

そして五人が店を離れようとすると、『Sevenセブンスth misミスt』の店長らしき人が走ってきた。

「ちよつと、ちよつと待ってください」

「はい？　なんですか？」

神無月が聞き返すと、店長は走ってきて途切れがちになっている息を整えると頭を下げた。

「お客様達のおかげで当店では一人の怪我人も出さずにすみしました。それに当たってお客様達に当店の品物で気に入った物がありませんたら、どうぞ持って行ってください」

「いや、それは悪いですよ。誰も怪我もなかった、それでいいんじゃないですか」

「いえいえ、それではこちらの気が済みません。私の為だと思つてどうぞお持ち帰りください」

「そこまで言われてはもらて行かなければ失礼だと思い、

「じゃあ、お言葉に甘えていただきます」

そう言つて、再び店内へ五人は入る。そこで佐天は神無月と問いかける。

「あたし、今回何もしないんですけどわたしまでもらつちやつていいんですかね」

「いいんじゃないか。というか女性用の洋服店じゃ、俺が使える物はないし。俺の分つてことで、なんだったら俺からのプレゼントでもいいわけだし。好きな選んできてくれ」

「ありがとうございます」

そう言つて佐天は水着コーナーの方へと走つていった。

「わたくしも見せてもらいにいってきますわ」

「じゃあ、わたしも」

そう言つて、白井と初春も自分の気になっている服を見に行くのだつた。そして、その場に残つたのは神無月と美琴だつた。

「美琴は見に行かないのか？」

「わ、私!? 私はいいわよ、特に気に入つたのなんてなかったし！」

完全に強がりだつた。美琴は気になつて気になつてしょうがないパジャマがあるが、恥ずかしくて買えないのだつた。今まで色々な店を回つても自分の好みに合うパジャマが無く半ば諦めていたのだが、この店でついに発見したのだ。しかし、佐天たちにそのパジャマは子供っぽいと言われていたため買えないのだつた。美琴の心中では、そのパジャマが売り切れないか心配ですぐにでも買いたいのだが、行動には移せないのだつた。

「本当にいいのか？」

「い、良いに決まってるじゃない！」

しかし、美琴を見ているとはつきりとわかってしまう。さつきから美琴の目はパジャマの方をむいては戻り、向いては戻りを繰り返している。さきほど、神無月は美琴が皆から隠れてパジャマを体に当てていたのを目撃している。パジャマは良く言って可愛らしい、悪く言うと子供っぽいようなものだった。そこから考えられる結論は一つしかなかった。美琴の視線があらさま過ぎて、つつこむ気も起きない。美琴は自分では買えないようなので神無月は苦笑いでパジャマの方に歩く。そして、美琴の買おうとしていたパジャマを手にとると店員に向かって、

「これ下さい。あと、包んでもらえますか？」

「はい、承りました」

そう言つて、美琴が躊躇いに躊躇いまくっていたパジャマを何事もなく買った。しかも、買ったことを美琴以外の三人に気付かれていないという驚異のさりげなさだった。呆気に取られている美琴のところに神無月は戻ってくると、ほいと美琴にパジャマの入った包みを差し出す。

「え、ええっ！？ く、くれるの？」

「そのつもりだけど、いらないんなら返してくるが？」

「いる！」

美琴はとっさに叫んでしまつてことに赤面し、取り繕う。

「しょ、しょうがないわね。どうしてももらつて欲しいっていうならもらつてあげるけど」

「そうか、なら返してくるか」

「すみません。とっても欲しいです」

そう言つて、美琴は神無月からパジャマの包みを受け取ると大事そうに抱えるのだった。

そして結局、美琴は念願のパジャマ、白井はスケスケ下着、初春はふわふわした感じの水着、佐天は白いビキニのセットとパレオを買ったのだった。皆、それぞれ自分の欲しい物を手に入れ満足そうだ

った。また、満足そうな皆を見ているので神無月も満足だった。少し残念だったのは今回の事件に巻き込まれた小さな女の子は、^{アンチス}警備員に連れられて自分の家まで送ってもらった後だった為、今回の『もらいもの』をすることはできなかった。可愛いのを選んで送ろうかとも神無月は考えたが住所が分からなかったため諦めたのだった。まあ、無事で帰ったならよしとしようひとりごちた。

『—Seventh mist』での買い物を終えると今度こそ店

セブンスミスト

を離れ、五人は神無月の買い物に向かうのだった。今回の事件は五人の心の中にそれぞれの思いを残した。多少の差異こそあれど、その思いはもつと強くなりたいというものだった。そんな誰の心にもある、力・能力への渴望。それを根源とした今回の事件は大きな事件の序章に過ぎなかったのだった。

神無月との買い物を終え、寮に帰った美琴はもらった包みを開けてみた。美琴の目に狂いはなく、美琴の好みでないところが無いと言うほどだった。これから、これを着て寝ようと思っていると美琴は気が付いた。

（あれ、結局これをもたらったって事は、あの時私見られてたって事！？）

神無月からこのパジャマをもらっておいて、今頃気が付く美琴だった。子供っぽいと思われたらどうしようと今さらながらに思う美琴の眠れない夜はまだ始まったばかり。しかし、明日寝不足で眠い一日を過ごすことになるということだけは決定していたのだった。

第04話 あ——『幻想御手』があったらな——（後書き）

就職決まりました。

2社目で合格できたのは今時の就職率からいうといいのかな？
とりあえずよかったです。

補足1→1人称→

神無月：俺

美琴：私

白井：わたくし

初春：わたし

佐天：あたし

補足2→神無月→

性別：男

身長：175cm

年齢：16歳

国籍：日本

出身地：静岡県

家族構成：父・母・妹・祖父・祖母

サイド：科学サイド

所属：学園都市第7学区のとある高校 1年7組

職業：高校生

住居：第7学区 とある高校の男子学生寮

レベル：超能力者（レベル5）

能力：絶対重力
ブラックホール

性格：若干S

好きのもの：甘い物

嫌いなこと：友達や身内など自分にとって大切な人間を傷つけられ

ること

近頃：上条の口癖『不幸だ』が感染^{うつ}りそうになっている。

：7月16日の身体検査^{システムスキャン}で超能力者（レベル5）に認定される。

これからも続きます。

今後もしょしくです。

感想も常時受け付けています。

書いていただけるとやる気が上がります。

そのあたりも含めてよろしく願います。

文字の書き間違いも感想などで教えていただけると嬉しいです。

第05話 え

私そんなに子供じゃないよお？

『ピピピピ』

「37度3分か、ま、微熱だけど今日は大事を取って一日寝てた方がいっしょ」

「すみません、わざわざ」

七月十九日（日）、風邪で寝込んでしまった初春ついはるかぎり飾利の看病に佐天さてん涙子は初春の部屋を訪ねていた。どうやら、最近の虚空爆破事件グレイブトンの疲れが一気に出たようで初春は体調を崩したのだった。とりあえず、犯人の確保という形で虚空爆破事件は終息したため、気が抜けたのか初春は風邪をひいてしまったのだった。初春は二段ベッドの上の方で横になっていて、佐天がベッドについている梯子はしをつかんで初春を覗き込む形で顔を出す。

「いって、友達でしょ。こんな時くらい頼りなつて。昨日も

あたしは何もできなかったんだしさ」

「そんな、それを言うならわたしこそ変な事件に巻き込んだじゃって・

・・」

「あほ、初春だって巻き込まただけでしょ。初春が悪いわけじゃない」

そういうと佐天は二段ベッドの梯子から飛び降りて、いたずらっぽい笑みを浮かべて言う。

「よつと、そろそろあたしは行くけど、通知表初春の分も預かってきてあげよっか」

「後日自分で取りに行きますよ〜〜」

「まあ、明日から夏休みなんだし風邪は今日中に治しちやいなさいよ」

部屋の外ではこれぞ夏と言わんばかりに蝉が『ミンミン』鳴き、ア

スファルトの上では陽炎が揺らいでいる。そんな一日の始まりだった。

夏特有のカツと照らす太陽の日差しの下を大勢の学生たちが歩いている。今日は夏休みに入る一日前ということもあり、たいていの学校では授業という授業はない。学生たちは成績表を渡されその結果に一喜一憂し、終業式を熱の閉じこもったサウナのごとき体育館や講堂で行い、無駄に長い校長の話に辟易するのである。学校によっては教室の掃除を行ったりもするが、よほどの金がない学校でもない限りは掃除ロボットがいるため特にそうだったこともない。しかし、それを含めても学校で行うことは午前中で終了。そのため、学生たちは夏の昼間の太陽の下を下校することになるのである。下校途中での話はやはり自分の成績に関する話題が多い。自分の成績の悪さに悩みながら歩く学生もちらほらいる。そんな自分の成績について悩む学生たちと同じように、

「~~~~~む、~~~~~む・・・」

白井黒子も悩みながら下校していた。しかし、悩む内容は全く異なる。そして、その隣にはそんなずっと悩み続けている白井の姿を見ながら御坂美琴も下校していた。白井は悩みの考え事についての答えが纏まらず、夏の暑さも相まって白井の頭からは『プシュー』とオーバーヒートの煙が上がりそうだった。さすがに見ていられなくなった美琴は白井に悩んでいるわけを尋ねる。

「さっきからどうしたのよ、そんな難しい顔して。もしかして成績落ちた？」

「そんなことはありませんの・・・というか成績は下がっていませんわ」

いくら考えても全く答えが導けそうにないため、白井は美琴の方を向いて逆に尋ねる。

「お姉さま、昨日の虚空爆破事件の犯人、本当にお姉さまが捕まえた男で正しいんですの？」

「そうだけど？」

「『書庫』の登録データでは容疑者の能力は異能力判定となってますの」

「うそっ！？ 明らかに大能力クラス^{レベル4}の破壊力だったわよ」

この事実には美琴も驚きを隠せなかった。虚空爆破事件^{グラビトン}の犯人の攻撃は高性能爆薬に匹敵するほどの破壊力を有していた。異能力者^{レベル2}の力の大きさは、低能力者^{レベル1}と同程度、つまりスプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力なのだ。したがって高性能爆薬に匹敵する破壊力を有する時点でどう見積もっても異能力者^{レベル2}で収まるような能力ではなかった。

「ええ、ですから・・・これは、つまり・・・」

・

・

・

『ミーン、ミーン』

『ジーー、ジーー』

『みーん、みん、みん』

・

・

・

・ 炎天下^{えんてんか}の中、蝉^{せみ}の鳴き声だけが通り過ぎていく。

「どういことなのでしょう？」

「・・・」

美琴も何と言っているのか分からない。

「ま、まあ、煮詰^{にじ}まつてるんなら一度休んで頭を切り替えましょ」

そう言っ、美琴は移動かき氷屋を指さした。かき氷屋は、この炎天下の中では重宝されるため何人か学生たちが並んでいた。その後尾に美琴と白井は並んだ。美琴たちの列の最前部では今小学生く

らの男の子三人がかき氷のできるのを待っている。その後ろでは、女子高生二人が談笑しながら並んでいる。そしてその二人後ろ、つまり美琴と白井のすぐ前にはオレンジみがかった茶髪を少し伸ばした感じの男子高校生が・・・

（あれ、何か見覚えがあるような・・・）

美琴がじつと前を見ると視線を感じたのか、前にいた高校生が振り向く。

「あれ、美琴と黒子？ そっちもここのかき氷食べに来たのか？」

「うん、そうだけど。 アンタがここに来てるってことは、もしかしてここの店有名だったりするの？」

「ん？ 知ってて来たんじゃないのか？ ここは学園都市の移動かき氷屋の中でも五本の指に入るといわれている店だぞ。 しかも、この店移動経路とか決まってるから偶然会うことは結構珍しいんだ。 たいてい俺みたいにこの店が現れた情報を聞きつけて急いでやってくる奴がほとんどだと思うぞ」

「・・・そ、そうなんだ」

美琴は、神無月の執念にも似た甘いものへの執着に顔を引きつらせる。

「にしても、今日は暑いな。 明日から夏休みだから暑いのは当然つてのは分かるけど、それにしたって暑い」

「そうですね。 これも地球温暖化の影響でしょうか」

「ん、まあ違っただろうけど。 そうだったなら、勘弁してほしいなそんな風に神無月たちが談笑している間に、前に並んでいた人たちはいなくなり、順番が回ってきた。

「どうぞ、次のお客様。 ご注文は何になさりますか」

「二人は何にする？」

「そうね、私はイチゴで」

「わたくしはお姉さまと同じものを」

「じゃあ、イチゴ2つに、ミックスベリー1つでお願いします」

「はい、イチゴ2つに、ミックスベリー1つですね、承りました。

少々お待ちください」

そういうと店員はかき氷を削り始めた。

『チリン、チリーン』

店が作る影の中に入ると直射日光を浴びていた時よりはだいぶ涼しくなる。そして、移動型店舗の軒先のきさきについている風鈴ふうりんの音色がより涼しく感じさせる。

「不思議なものですわね。 気温は変わりませんが風に風鈴の音色を聴いていると少し涼しく感じますの」

「そうだよな、俺も丁度そんな風に感じたところだった。 なんて言っただけなこういう事。 ええと・・・」

「共感性でしょ？」

答えを告げたのは美琴だった。

「共感性・・・ですの？」

「一つの刺激しげきで複数の感覚を得ることよ。 例えば、普通なら色を見たら働くのは人間の視覚だけじゃない？ でも、赤い色を見たら暖かく感じたり、青色を見たら冷たく感じたり、視覚以外にも影響が出るでしょ」

『そのことよ』と美琴はいう。

「『暖色』だんしよく 『寒色』かんしよく というものですわね」

そんな話をしているとその間にかき氷は完成した。

「はい、どうぞ」

全員分のかき氷を受け取ると、会計を済ませてしまふ。そして、神無月は美琴と白井にかき氷を渡す。

「お、あっちに丁度木陰になってるベンチがあるなあっちで食おうぜ」

「あ、うん。 有真、いくらだった？」

「ん？ ああ、別にいいよ。 俺のおごりで」

神無月にいろいろと世話になっている美琴は、今回もまた奢ってもらうのはさすがに良心の呵責を感じた。

「でも、この間も昼食食べさせてもらったし悪いわよ」

「じゃあ、今日の分は美琴の料理で奮発してもらおうということで」
「ぐっ・・・あの話やっぱり、冗談で言ったわけじゃなかったんだ・
・・・」

「もちろん、本気だけど？」

美琴はさらに自分へのハードルを上げてしまった己の迂闊さを呪い、
心の中で一つの結論に至る。

（有真って良いやつだけど、絶対根はさだ、しかも素で）

そんな風に美琴が考えているとき、神無月はかき氷を見ていて気が
付く。

「そういえば、このかき氷も共感性に訴えかけているものひとつ
だよな。トッピングとして乗っている果物はさておき、シロップ
の色はイチゴだから赤くしか作れないわけじゃないし、ミックスベ
リーだからって紫っぽい色にしなくてもいいわけだしな」

「そうですね。シロップの味に色のイメージをプラスしてます
のね」

「うーん。そう考えると人間の脳って単純なのかもしれないわね」
美琴も料理のことからのダメージから復帰したため、神無月と白井
の会話に参加する。

「単純って・・・お姉さま、ユーモアが分かってほしいんで
すの・・・」

そんなとき、三人に向かって歩いてくる人がいた。

「あれ、佐天さんじゃない」

「美坂さん、白井さん、神無月さん、昨日はお世話になりました。

ん、それおいしそうですね」

そういうと佐天もかき氷を買う。

そして、四人は木陰のベンチに座った。

向かっていちばん右が白井、その左隣が美琴、その左隣が佐天で一
番左端が神無月だった。

「佐天さん、初春さんの容態はどう？」

「熱自体は大したことないです。あたしが買ってきたのも風邪薬

じゃなくて熱さましでして。むしろ一番欲しがってたのは暇つぶしの道具かも」

「ならよかった。体調を崩した責任の一端は俺が振り回しちゃったのもあると思うし」

「そんなことないですよ。初春が今まで頑張りすぎてて、気が抜けたからどつと体に来ちゃっただけなんで神無月さんのせいじゃありませんって」

「そうですね。初春はここのことろずっと虚空^{グラビトン}爆破事件に掛かりきりでろくに寝てもいなかったみたいですし」

「ま、なんにしても捕まえられてよかったよ。それはそうと――

――

そういうと神無月は思い出したように、目を光らせた。

「そっちのレモン味とイチゴ味のかき氷味見させてくんない？」

「ん、まあいいわよ」

美琴がそう言った瞬間、美琴がスプーンで掬^{すく}っていたかき氷が神無月に食^くわれていた。

「え……え、ええ――！？」

驚くのは無理もない。美琴が味見をしていいといったのは、あくまで神無月の持つスプーンで美琴のイチゴ味のかき氷を掬^{すく}って食べることが前提になっていたので、美琴が今まさに自分で食べようと掬^{すく}っていたかき氷が食べられるとは思っていなかったのだ。

（これって間接……駄目だ、考えるな！ 有真も気にしてなしのに……ないのに……っていくらなんでも気にしなさすぎじゃないの！？）

そんなことを考えている美琴に神無月からの追い討ちがかかる。

「どうした？ そんなに睨^{にら}んで、ああ、そっか美琴も違う種類の食べたいのか。なんだ、そう言ってくればいいのに」

そういうと神無月は美琴のほうに神無月のスプーンで掬^{すく}った神無月のミックスベリー味かき氷を『によっ』と差し出した。差し出した神無月は何も考えてはいないのだが、美琴のほうはそうはいかない。

（これを食べたらはんとに間接・・・でも食べないのは失礼・・・よね。でも、やっぱり・・・ああ、もうどうにでもなっちゃえ！）美琴は思い切って神無月の差し出していたかき氷をパクリと食べた。「イチゴも美味しいな。でも、ミックスベリーもなかなかいい味し
てると思わないか？」

「そ、そうね。おいしいと思うわ」

実際のところ、美琴はかき氷の味を気にしていられるほどの余裕がなかったため、味なんかまったくわかっていなかった。しかし、美琴の心の平穩は回ってこない。

「ん、美琴顔真つ赤だぞ。熱中症じゃないよな？」

そういつて、神無月の手が美琴の額に触れる。あまりの不意打ちで美琴は避けることもできなかったため神無月の手が美琴のおでこを完全にとらえている。

（これって、遠目からみたらキ、キスしようとしてる恋人同士に見えるんじゃない！？）

遠くから見ても、近くから見ても完全に熱を測っているようにしか見えないが、神無月からの不意打ちの連続で精神的に追い詰められた美琴にはどんな行いにも過剰に反応してしまう。そのため、美琴の心の暴走は加速する一方だった。

「ん？ だんだん熱くなって・・・って、熱っ！ 大丈夫かほんとに！？」

「だ、大丈夫だから。大丈夫だから、手をどけて——っ！」

・
・
・
美琴が落ち着きを取り戻してから、白井を悩ませる『能力者の登録レベルと実際のレベルの不一致』の話に戻ってきた。美琴が落ち着きを取り戻すまでにかなり時間がかかったのだが、神無月はちゃっかり佐天とも食べ比べを行うという神をも恐れぬ所業を行っていた。神無月はそういう部分で激しく鈍く、美琴が暴走していた理由もわ

かっついていなかった。

「ねえ、佐天さん。 昨日行つてた『^{レベルアップバー}幻想御手』つてのもう一度黒子に詳しく聞かせてやってくれないかしら」

「はい、いいですよ」

そういつて佐天は^{レベルアップバー}幻想御手の噂を話し始めた。

「^{レベルアップバー}幻想御手つていうのは・・・」

・
・
・
「能力の強さ^{レベル}を格段に上げる？ 使うだけで簡単に？」

佐天からの^{レベルアップバー}幻想御手についての話を聞くと、白井は『いかにも胡散臭い話ですわ』という顔をした。それもそのはず、学園都市において能力と言うのはそれだけで大きなパラメータとなる。だから、学生たちは自分の能力を出来る限り強くしようとするし、それができない者はやさぐれて不良になってしまったりするのだ。だから、使うだけで能力が格段に、しかも簡単に上がるものが存在するとは思えないのだ。

「いや、だから噂ですって！ あたしが言ってるわけじゃないですよ？ 実態も良く分からない物ですし」

慌てて否定する佐天を見ながら、神無月は考える。

（確かにレベルを簡単に引き上げられる道具があるとは考えにくい。だが、能力にしたって科学的に開発が行われている以上出来ないとも断言できない・・・）

神無月が考えている間も佐天は話を続けていた。

「どこかの学者が残した論文だとか料理のレシピだとか、噂の中身もバラバラで・・・」

「まあ、普通能力の開発つて学校で何年もかけてするもんだし、そんな都合がいいものがあるかって思うけど？」

「ああ、普通はそう考えるよな・・・でも、俺も学校の奴らが異^{レベル}能力者^{レベル2}とか強能力者^{レベル3}の武装無能力集団や不良の集団に絡まれたつて

「いう話を近頃よく聞くんだ。基本的にスキルアウトや不良^レつて無能力^{ベル}者が基本の集団だろ？ だから、レベルの高いスキルアウトなら特定できると思って、被害を受けたって奴の話を何件か聞きに行つたんだが、どうにも絡んできたらしい奴らの外見的特徴が一致しない。俺が聞いただけでも4種類くらいの集団があるっぽい。」

「今まではそんなこともほとんどなかったんだが近頃になつて急に増えてきた。もし、幻想御手^{レベルアップ}が実在して、スキルアウトの間で出回つているとするなら、今まで力のなかったスキルアウトや不良^{レベルアップ}たちが幻想御手で上がった力で調子づいてきたつていう風に話が繋がるんだ。」

神無月の話を聞いた白井は思案顔で言葉を紡ぐ。

「・・・実は風紀委員^{ジャッジメント}でも、拘留した犯人の登録された能力^{レベル}の強さ被害状況に食い違いがあるケース・・・今回が初めてではありません。神無月さんの調べと同様に数件ではありますが、すべてここ最近立て続けに起こっています。書庫^{バンク}のデータミスか確認を急いでたのですが・・・佐天さん！」

「はっはい!？」

「何か他に知つてることない？」

「えっ、え~~~~とぉ・・・」

いきなり、真剣な顔で美琴と白井に迫られて、佐天は驚き少し考え込むと思ひ出したように、

「あ、そういえば、自称ですけど幻想御手^{レベルアップ}を使つてた奴らがネットに書き込みしているみたいですけど。ただし、不良っぽいのはつかでどこまで信用できるか・・・」

「どう思う、黒子？」

「信じられませんが、そういったものが実在するなら一連の事柄に説明がつきます。一応当たってみる価値はあるかもしれませんがわね」

「ありがとね、佐天さん」

「じゃあ、またな」

そう言くと、白井、美琴、神無月の三人は幻想御手^{レベルアップ}について調べるためにあつという間にいなくなってしまった。ベンチに一人残された佐天はその速さにあっけにとられながらひとりごちる。

「……………え？ 幻想御手^{レベルアップ}ってマジもんなの？」

太陽は完全に落ち、既に空は真つ暗になっている。それでも、学園^{がくえん}都市^{ととし}は街の街灯や店から零れる明かりでまだ明るい。そんな学園都市^{ととし}の明かりに貢献している店の一つである『Bennys』というレストランで美琴は不良っぽい三人に話しかけていた。かなりガラの悪い部類に入る三人だったが美琴は話しかけるのに躊躇がなかった。

「あん？ 幻想御手^{レベルアップ}について知りたいなあ？」

不良っぽい三人は、特徴的で、一人はスキンヘッドのマツチヨ（細マツチヨではない）、一人は革ジャンにツンツンした金髪、最後の一人はバンダナを頭に付けた口髭の男だった。そして、美琴の問いに答えたのは、バンダナをつけた男だった。

「うん！」

美琴はとびっきりの媚び媚びの笑顔を振りまきながら答える。しかし、三人のうちスキンヘッドは酒がまわっていて気にしていないようだ、革ジャンの男とバンダナの男は明らかに警戒している目つきだった。まあ、確かにいきなり知らない人間に「幻想御手^{レベルアップ}について教えて！」と言われれば誰だって警戒もする。明らかな警戒の視線を感じたためか美琴は言葉をつなく。

「ネットで偶然お兄さんたちの書き込みを見てできたら教えて欲しいなーって」

という様子を神無月と白井は不良たち三人のテーブル席から少し離れた位置にある席から気づかれないように見ていた。ちなみに美琴には盗聴器を持たせていて、向こうの席での会話は白井の持つ受信

機からはつきりと聞こえるようになっていた。今のところ美琴の演技に問題はない。しかし、それでも白井は美琴のほうを心配そうに見ていた。何故、いきなり美琴（こんなこと）による囹捜査（ジャッジメント）になっているかという、佐天の話を聞き終わり、例によって風紀委員第177支部で調べ始めて数時間たった、今からそう2時間前（さかのぼ）に遡る。

「お——あつたあつた」

佐天からの話を聞いた俺たち三人は、風紀委員第177支部に来ていた。そして、ちょうど例の書き込みとやらを美琴が発見したのだった。

「予想以上に時間が掛かってしまいましたわね。普段でしたら、初春がぱつと見つけてくれるんですけど」

佐天と別れたのはちょうど昼ごろ。しかし、外を見るとかなり暗くなってきた。明日から夏休みという、日もだいぶ落ちにくくなってくるこの季節にも関わらずこの暗さ、どれだけネットの書き込みを探すのに時間を要したのかが分かってしまう。

「飾利つてすごかったんだな・・・」

「当然ですよ、何せわたくしとコンビを組んでいるんですのよ。

情報関係なら初春の右にでるものは居ないとすら思っていますもの」

「へえ、かなり信頼してるんだな」

チラツと白井の方を向きながら聞くと、

「あつあたりまえですよ」

白井は、自分の言っていることに少し恥ずかしくなったのか顔を赤くしながら答えた。そして全員画面に顔を戻した。

「いや、それにしても本当に実名で書き込んでいる奴がいるとはな」

「そうね、まさにネット初心者」

俺と美琴が画面を見ながら呟いていると、白井はもう一台のパソコンを操作して書き込みをした奴の実名を打ち込んでいく。

「一応、照会しました。確かに素行のよろしくないグループのメンバーばかりですね」

さて、どうやってここから調べていくか。他の風紀委員にも協力してもらって監視を付けるか、それとも、彼らのグループにスパイを入れるか、と作戦を考えていると美琴が、

「よし、直接いつて情報を聞き出そう。覆面調査つてヤツね」
「はっ!?!」「はい!?!」

俺と白井が同時に間の抜けた返答をした。確かに、覆面調査は悪くない、俺も確かに考えはした。しかし、美琴のあのやる気に満ちた顔。言葉にこそしていないが、『私が直接聞き出すわ』といったいる。すかさず、白井がやんわりと止めに入る。

「えっと、お姉さま。ちなみに、誰が情報を聞き出すんですの」
「そりゃ、もちろん。私よ」

『もちろん』じゃねえー。はつきりいつて美琴にそんな調査が出来るとは思えなかった。今までの経験から言っても美琴の気は長くないと思う。予想としては、『幻想御手^{レベルアップ}について教えて』(美琴)』

↓『何言つてんだ嬢ちゃん(不良)』↓『私が聞いてんだからとつとと教えるやコラー(美琴)』↓電撃炸裂^{ビリビリバリバリ}↓『ギヤー(不良)』↓あたりは大混乱↓作戦失敗 という流れが起こりそうでしょうがない。

「有真、あんたなんか、今失礼なことを考えてなかった」
「いえ、滅相ありません」

というか、この時点で既に先行きが不安だ。白井も俺と似たような不安を抱えているのだらう。頑張つて止めようと言葉を重ねる。

「民間人であるお姉さまにそんなことをさせる訳には・・・」

「アンタは風紀委員だから面が割れてるかもしれないでしょ。それに今回の相手グループは全員男だから、男の有真が行くより、女の私が言った方が口を滑らせてくれるかもしれないでしょ」

言っていることだけ見れば間違っていない、確かに間違っていないが。この言いしれぬ不安感はどうしても消えない。

「で・・・でも、途中で相手に腹を立てて能力を使ったり、なぎ倒してはいけませんのよ」

言ったー、黒子がついに確信を突いたー。それに対して美琴は、
「わかってるわよーそれじゃまるで、私が暴れん坊みたいじゃない」
このとき、たしかに俺と黒子の『違うのかっ!？』という心の声がお互いに分かったような気がした。

「まあ、私に任せておきなさいって」

そういつて、胸をドンと自信満々に叩く美琴の言葉で作戦は決行されることになり、現在に至る。以上、回想終わり。

隠れつつ、美琴の様子をちらちらと心配そうに白井は見ている。

(黒子はずっともともと不安ですの。二重の意味で)

そんな、心配など気が付かずに美琴は三人の不良に幻想御手レベルアップについて聞いていた。

「ねっ、いいでしょ」

お願いと言う風に手を合わせて頼み込んでいる。しかし、相手もすぐに良いとは言わない。

「こつちも情報を手に入れるのに苦労したんでね、帰んな」

「そこをなんとか」

美琴が言うもバンダナの男はokをださない。スキンヘッドの男だけだったならば酔いも回っていて何とかなったかもしれないが、バンダナの男と革ジャンの男は甘くはなさそうだった。

(ネットに実名で書き込んでいくくらいだから、ちよろいかもとしない思ったが実際はなかなか頭を使ってるっばいな。頭の使いどころが悪事ではあるだろうが)

美琴が願ひするもバンダナの男はだめの一点張りだった。

「ダメだ、ダメだ。子供ガキはもうねんねの時間だぜ」

その言葉に美琴がピクツと反応した。そして、美琴の拳が静かにギ

ユツと握られた。それを見た白井の顔がひきつる。

（まっ、まずいですの。早くも頓挫の予感が・・・）

白井の頭の中には、『人が頭下げてんのになんだその態度——ッ』と電撃をぶちまける美琴の姿が思い浮かんでいた。

しかし実際は、

「え~~~~~私そんなに子供じゃないよあ？」

キヤラ崩壊もいいところだった。両手は首の近くで笑顔を強調するかのように軽く握られ、声もかなり甘えたような声を出している。

『きゃはっ？』と言う擬音が聞こえてくるかのようだった。美琴の背景には、点描の泡がふわふわ浮いているようにすら見えるほどだ。ここまで猫をかぶれるとは、女ってホントに怖えと思わずにはいられない。白井もまさか美琴があんな甘えた声を出して、かわいらしさアピールをするとは思っていなかったのだろう。手慰みならぬ口慰みに飲んでいたコーヒーをブ——と盛大に嘔き出した。その結果として、白井の前に座っていた神無月がその被害を一身に受けることになるわけで。

「熱いつ！　　というか痛いつ！　　よくそんなに熱いの飲めるな！？」

　　というか、それが眼球に直撃した俺は大ダメージだぞっ！？」

これだけの暴拳を繰り出したにも関わらず、白井からは反応が返ってこない。もっていたハンカチで顔を拭い確認をすると白井が苗字同様に真っ白になってびくびくしている。それほどまでに美琴の演技に度肝を抜かれたということだろう。どうやらここからの監視は一人で行わなければならないようだ。その様子を見た神無月は天井を仰ぐと呟く。

「不幸だ」

本当に上条の口癖が本当に感染^{うつ}りそうだなと思いながら、使い物にならなくなった白井をよそに不良たちの監視に戻った。

そんなこんなのもやり取りの間にも、美琴と不良たちの会話は進んでいた。白井を機能停止に追い込んだ『え~~~~~私そんなに

子供じゃないよあ？」発言にスキンヘッドの酔っ払いがなかなか好感触の反応を返していた。

「だよなあ、オレはアンタ好みだぜ」

「ホントにー？」

きやはつというぶりっ子声を続ける美琴に言葉もないが、電撃を飛ばさないでいてくれて本当に良かったとも思う。予想以上の順調な聞き込み調査だった。このままいけば、案外今日中に幻想御手^{レベルアップ}の正体に迫れるかもしれない。美琴はスキンヘッドの男に目標を変え、聞き出しにかかる。

「じゃあ教えてくれる？」

「ん—— やっぱ、ただってわけにはいかねえなあ」

そういいながら、スキンヘッドの男は鼻の下を伸ばした、いやらしい目つきで美琴のスカートの方へ視線を向けている。

「・・・・・・・・」

明らかな視線に美琴も顔に笑顔を張り付けてはいるが、内心では電撃をぶつけてやりたくなくなっているように見える。

「えっとおお金なら少しは出せます」

美琴は男の意図に気が付かないふりをして、何とかごまかす。

「金もいけどこういう時はやっぱり……こっちの方がねえ」

しかし、煙に巻ききれなかった。男は、美琴の肩を抱くように手を伸ばす。だが、男の手は美琴に触れることはなかった。美琴は、ずりりと男の腕に捕まる前に抜け出し、男の手は空を切る。

「え——でもそういうのはやっぱり恐いつていうかぁ……お金じゃダメ？」

かわいらしく手を合わせて小首をかしげて見せるが、男の方もごまかされない。首を振ると、

「ダメダメ。それじゃあ教えられないなあ、子供じゃないんだろ？」

そういつて美琴の方をちらつと見る。

「う……」

美琴が涙を流して目を擦っていた。

いきなり泣かれるとは思っていなかったスキンヘッドの男は突然のことに驚く。

「私・・・実は無理言って学園都市に来させてもらったの」

「は？ 何を言って・・・」

いきなり泣きながら話し始めた美琴にスキンヘッドの男は狼狽えることしかできない。

「でも、やっぱり私才能なくて、能力も全然伸びなくて、お父さんはさりげなく電話で身体検査の結果を聞いてくるし、お母さんは、

『あなたはできる子なんだから』って」

流石のスキンヘッドの男でもこの空気の中、体で払えとは言えない。

「期待に応えなくちゃって思うけど、どうしようもなくて思わず嘸ついちやって、そんなときお兄さんたちのこと知って、もう『幻想御手』しか頼れるものがなくって・・・」

「い、いや、そんなことを言われても・・・」

スキンヘッドもオロオロするばかりで明確に拒絶もできないし、強引に迫ることもできない。そこに追い打ちで美琴が、

「ダメ・・・かな？」

と涙目の上目づかいで男に尋ねる。すると、男は雷に打たれたように硬直。誰からみてもスキンヘッドは純情ハートをぶち抜かれたなと分かるほどだった。白井は白井でさらに精神的ダメージを受け、さつきよりもさらに真っ白になりテールの上で潰れていた。神無月は演技がうまくいつていることに喜びつつも笑いをこらえるのに必死だった。なぜなら、美琴の前に立っているスキンヘッドの男からは見えないが、美琴の後ろ側にいる神無月と白井からは美琴が後ろ手に持っていた目薬が丸見えだった。それに加え、能力が伸びないときたもんだ。そりゃあ、超能力者からは上がらねえだろうよと思ひ、その演技に騙されているスキンヘッドを憐れに思いつつ笑いを堪えるしかなかったというわけだった。まあ、その演技にはめられたのはスキンヘッドの男だけで、残りの二人の革ジャンとバンダ

ナは『何やつてるんだアイツ』とスキンヘッドを見ていた。二人の位置から目薬は見えていないが、スキンヘッドのようにチヨロくはなかったようだ。だが、革ジャンのほうが美琴の制服に気が付きバシダナに小声でつぶやく。

「（オイ、よく見りやアレ常盤台の制服じゃねえか）」

「！」

「（意外とイイ金ズルになるかしんねーぜ）」

「ほう」

そういつて、バシダナの男は口元をゆがめて静かに笑う。常盤台中学は、おのずと知れた有名なお嬢様学校だ。それゆえに、その生徒ということとは金持ちの娘だといえる。実際は、金持ちでなくとも入学基準を満たす能力があれば入学は可能なのだが、イメージは先行しやすいため、そこに通っているならばお嬢様だと思ってしまうのも無理からぬことだった。しかし、常盤台中学の入学条件は強能力者だ。それに満たないものはいくら金があっても入学などできない。能力の低い人間が常盤台にいるはずがないのだ。少なくともこんなところで群れているしかない不良が三人でどうにかなるものではない。それを知らない男は、自ら死地に踏み込んでいく。

「こんなところで泣かれてもメンドクセー金額次第で教えてやるよ」

「オ、オウ」

めんどくさいと言いながらもバシダナの男の顔は、これからせしめる金でどうするかという妄想で顔がにやけている。スキンヘッドはハートを打ち抜かれ、とりあえず頷いたといったようだった。今までの演技が実を結び美琴も心の中で『やった！』と叫んだ。そういつて、財布から金を出そうとしたとき、

「これこれ童子ども・・・」

聞き覚えのある、いやほとんど毎日聞いている声が聞こえてきた。その声に美琴も内心で焦りを感じる。

「（この声は・・・！）」

いきなり割り込んできた男に不良三人が不快そうな顔を向ける。

「あ——？　なんだ、デメエは？」

聞き覚えのある声は言葉を続ける。

「寄よってたかつてって集って女の子の財布を狙うんじゃないやありません」
俺と美琴は心の中で叫ぶ。

（また、アンタかつ！！）（当麻かよっ！！）

計画が崩れていくような音が頭の中に聞こえてきた。

「イキナリ出てきて何言ってたデメー」

いきなり現れて説教チックなことを始めた上条に神無月は頭を抱える。

（確かに女の子が財布を狙われたなら止めるのは正しいと思うよ！
けど、何もこのタイミングで出てくるとはないだろう！　あと、
ちよレベルアップつとで幻想御手までたどり着けそうだっていうこのタイミング
で！）

神無月の心も知らずに上条は続ける。

「おまえらこそここがどういふ場所か分かってんのか？　レストランだぜ、食事する所だろーが」

美琴も上条の隣で固まっていた。

（ちよつと待て——ッ！！　あとちよつとだつてのになんでアン
タが出てくんのだよ！！　ヤバいこのままじゃ情報が・・・このチャ
ンスを逃がしてたまるか）

「えーこんな人、私知らない」

しかし、ヒートアップした上条とスキンヘッドは聞いちゃいない。

「サカるなら一人でビデオ相手に頑張つてろ」

「何だとおッ」

「スル——！？」

上条とスキンヘッドは美琴の事を完全にスルー状態になった。『ス
ル——！？』と言ったことすらスルーするぐらいにNO眼中だった。

しかも、最悪なことに計画を知らない上条は、

「だいたいな、アイツはあんなキアラじゃないぞ。 お前らの手に負える相手じゃねえ。 止めとけ」

と、計画を崩すような発言を繰り返す。しかし、それを伝える手段が無いため神無月は頭を抱えるしかなく、美琴も無関係を装うしかないのだった。そこで、スキンヘッドの男は何かに気が付いたと言う顔をする。

「はっはーん。 さてはテメーらグルだな？ そうやってタダで情報を手に入れようってハラか」

「はあ？」

もちろん、上条は幻想御手レベルアップの事など知らないし、スキンヘッドは間違えた結論に至ったわけだが、そんなことどっちでも同じだった。相手に不信感を持たれた。それが示すところは一つ。つまり、計画が破綻したと言う事だった。そして、間違った結論のまま自体は進んでいく。

「きたねえ手を使いやがってボコボコにしちまおうぜ」

「クソッ、人がせつかく助けてやろうとしてんのに。 ビリビリ中學生だぞ」

スキンヘッドの男の言葉に後ろで見ていた革ジャンとバンダナも立ちあがって上条を威嚇する。

「何かよくわからんがしょうがねえ。 まとめて相手してやる三人ぐらい」

そう上条が言った時、店の男子トイレのドアが開いた。すると、中からゾロゾロ三人の不良の仲間と思われる奴らがあふれ出てきた。

上条は、不良たちの座っていたテーブル席の上を見る。1、2、3、・・・、9。九人分の食事や食べた後の食器などが並んでいた。

「ええ——ッ！？ トイレに集団でゾロゾロ入るのは女の子の特権だと思いましたか——ッ！」

九人の不良が一堂に会し、その中でスキンヘッドが上条に向かって言う。

「この人数を一人で相手にしようっていう度胸はほめてやる。今なら有り金全部出して謝るなら許して・・・」

ダッ、不良が言い終わる前に上条がダッシュで逃げだした。不良たちは全員、驚いて動きを止める。

「逃げた！？ 自分から出てきたのに！？」

「ヤロウ、追え！ ふん掴まえてギタギタにしてやる！」

そう言うと、逃げ出した上条を追って不良たちも全員店を出て行ってしまった。あとに残されたのは、ひたすらにスルーされ続けた美琴一人だけだった。不良たちがいなくなると、ポツンと残された美琴に店員が声をかける。

「お客様、大丈夫でしたか？」

「あ、お気遣いなく」

あれだけの数の不良に囲まれた女子中学生を見たら、どう考えても囲まれて逃げ出せなくなっているナンパの被害者だと思うだろう。この店員もそう思ったに違いなかった。そして、不良たちがいなくなったのを見計らって美琴に声をかけたのだ。しかも、不良たちは食べた料金も払わずに出て行ってしまっていた。そのことも懸念事項ではあったようではある。

「あ、お会計は全部この子が」

ポンと白井の肩に手を置くと、美琴もすぐに不良たちを追いかけて店から走り出していった。さりげなく白井に全部の代金を押し付けていくあたりの手際が手馴れすぎていて神無月はいつもこんなことをやってるんだろうかと思わずにはいられなかった。当の白井はと言うと美琴がポンと手を置いた瞬間にガバツと目を覚ましていた。

「何か見てはいけないものを見てしまった気が・・・って、何のんきに特大パフェ（全長50cm）を新しく注文して既に食べ始めてますの！？」

「H A H A H A、ナニイッテルンダイクロコ？ コノパフェーハサイシヨカラココニアッタジャナイカ」

「アメリカのジョークっぽく言われると余計に腹が立ちますわね。」

「ってそんなので誤魔化されませんわ！」

「作戦が失敗してやる気が無くなったとか、コーヒーをぶちまけられたからその仕返しだとか、そう言えば昼間のかき氷から甘いもの何にも食べてないじゃないか！？とかそんなのじゃないんだからね！」

「ツンデレっぽく本音がダダ漏れですよ。それにしてもホントにいつ注文していつ届いたんですの？ お姉さまが『あ、お会計は全部この子が』って言うってから30秒も立っていませんのに。はっ、まさかアナタ能力でわたくしの時間だけ遅くしたんですの！？」「ナンノコトヤラー」

「目を不自然に逸らしてはいけませんの！ さあ、白状しなさいですの！」

と神無月と白井が遊んでいる間に美琴は逃げて行った不良を追いかけていた。不良達を追いかけている間も、

「アンニヤロ、もうちよつとだったのに！」

と上条に悪態をつく。確かに上条の介入が無ければ美琴の演技で不良達を騙せていた可能性は大いにありうる。それがもう少しで成就と言うところで失敗に追い込まれたのだ。文句の一つも言いたくないというものだ。そうして走っている

「いたっ！」

ついに美琴は上条を追う不良達を見つけた。そして最後尾を走っていたバンダナの男に並走して話しかける。

「ねえ、あんなのほつといて話の続きを・・・」

「ああ？ まだいたのかアンタ」

バンダナの男は美琴に気付いたがそれだけで、近くにいたスキンヘッドの男を怒った。

「元と言えばテーマがこんなのにつ掛かるからだぞ」

「んな事言ってもよー」

その間も美琴は『レベルアップ幻想御手の入手方法とか・・・』と話しかけているがバンダナ男もスキンヘッドも相手にせず、バンダナ男がスキン

ヘッドを怒り続けている。

「エロカッコいいセレブなねーちゃんとかならともかくこんな頭悪そうなクソガキに騙されやがって」

頭悪そうなクソガキ呼ばわりにも美琴は耐えて、頭に怒りマークを付けながらも懸命に『せめてどんな物かだけでも・・・』と聞く。

そこでいい加減に鬱陶しく感じたバンダナ男は、

「うるせえ！ ガキはクソして寝ろ！」

ついに美琴はキレた。

「人が優しく言ってるのに——！！！」

「ギャ——！」

美琴の怒りを買ったバンダナ男は美琴の体から発せられた電撃を浴びて黒焦げになって地面を転がった。バンダナ男の体はボロボロ、服も焦げ、目は白目を剥いて、バンダナも焼けているが、命に別条はなく気絶しているだけだった。いくらキレてはいてもきちんとして手加減している美琴だった。

「ジュンタ——！」

「な！ テメエ能力者だったのか」

驚いたのは周りの不良たちだ。いきなり仲間が電撃で丸焦げにされたのだ、驚かない方がおかしい。しかも丸焦げにした能力者は今まではレベルが上がらず、幻想御手が欲しいと言っていた少女なのだ。

驚きも大きい。そして、仲間一人が黒焦げにされたため上条を追いかけることよりも美琴をどうにかする方が優先順位は高いため不良達は全員足を止め美琴を囲むように陣取る。

「女だから見逃してやるつもりだったが能力者だってんなら容赦しねえぞ」

「！」

流石の美琴も警戒をする。

（そうか、こいつら幻想御手使ってるんだった。爆破魔レベルが8人もいるとちょっと面倒ね・・・）

しかし、美琴の予想を他所に不良達の口から出たのは、

「パワーアップして異能力者^{レベル2}になったオレタチの力、見せてやるぜ！」

次の瞬間、美琴を囲んでいた不良たちは全員丸焦げになって地面に転がっていた。いくら同じ幻想御手^{レベルアップ}を使っている人間といえども日々練習やら訓練で能力に磨きをかけていた爆破魔のレベルは確かにうまく上がっていたようだ。そういう意味では、爆破魔は勤勉だったともいえる。ただ、勤勉になるところを間違えただけで。

上条は不良達を撒くために街中を散々走り回った拳句、川にかかる鉄橋まで来ていた。そこでようやく上条は不良達が1人もついて来ていないことに気付いた。

「追手がいなくなつた？ やつと撒いたか」

『ようやく一息つける』と上条が思い息を吸った瞬間、

「ったく、何やってんのよアンタ。不良を守って善人気取りか、熱血教師ですかあ？」

電撃のヴェールを纏いながら、美琴がゆっくりと上条のほうへ歩いてくる。追つて来なくなつた不良、追いついてきた美琴、そこから導かれる答えは一つ。

「………つー事はアレだろ？ 後ろの連中が追つてこなくなつたのも」

「うん。めんどいからから私が焼^{ヤッ}いた」

さもなげに美琴は言う。

「お前なあ……」

「『お前なあ』はこっちの台詞よ。アンタのせいで情報取り逃がしちやつたじゃない」

「情報？」

「才能不足をズルして補う事件の情報。せつかく、あともう少しで情報が手に入るってとこで邪魔してくれちゃって、どう責任とっ

てくれるのよ！」

美琴の周りでバチバチと電撃がはじける。

「待て待て、話し合おう無能力者^{レベル0}の俺に向かって電撃を飛ばしても情報は入ってこないと上条さんは思っんですけど!？」

「そうね・・・」

そう言う美琴の顔は笑っていない。

「でも、今日の調査を台無しにしてくれた分とストレス解消のサンドバック位にはなれるわよ！」

そう言うが早いか、美琴の手から数万ボルトの雷撃の槍が放たれ上条を襲う。美琴と上条の距離は数メートル。こんな近距離で超能力^{レベル}者の電撃使用である美琴の攻撃は外れない。しかし、

「で、自称無能力者^{レベル0}のアンタは傷一ないのかしら？」
「・・・」

美琴の前には、上条が右手を突き出した状態で無傷で立っていた。

確かに、美琴の雷撃^{らいげきのやじ}の槍は上条に直撃した。しかし、直撃箇所は上

条の前に突き出した右手だったのだ。上条の能力である幻想殺しは、^{イマジンプレイカー}右手首から先にしか力はない。そのかわりどんな能力でも打ち消せ

るという代物だ。ただし、能力は打ち消せてもそれ以外の用途が無いため無能力者^{レベル0}という肩書なのだった。しかし、美琴は上条の能力を知らない。自分の能力を防げると言う事は知っていてもなぜ防げるのかは分かっているのだった。しかし、上条も気が気ではない。

相手の能力を打ち消せるのは右手首より先だけ。それ以外のところに電撃が当たれば即座に丸焦げだ。それゆえに上条はガツガツに固まっていた。そんな上条の心境には気付かず美琴は、

「私の電撃を無効化するような力を持っていないながら、不良相手に逃げたりして…強者の余裕ってやつかしら」

「だから、俺は無能力者^{レベル0}で・・・」

「何が無能力者よ！」

美琴の手や頭、体中から雷撃の槍が飛び出し上条を襲う。

「電撃の槍を、（ズドン）、水風船みたいに、（ドゴン）、簡単に、

（バリバリ）、消し飛ばしておいて、（バゴン）、そんな二三〇万
分の一の天災が何を言っているのよ！（バリバリズゴウーン）」
美琴の連続した雷撃らいげきのやうの槍の影響で当たりは派手に水蒸気やら砂ボコ
リが舞い上がった。流石の美琴でも連発で雷撃らいげきのやうの槍を打つと息が上
がっていた。

「はあ、はあ、はあ」

しかし、あれだけの数の雷撃らいげきのやうの槍を受けても上条には傷一つない。
すべて右手で防ぎきっていたためだ。そして、上条は顔をひきつら
せながらも笑みを浮かべて言う。

「・・・何て言うか不幸っ！か、ついてないよな。オマエ本当に
ついてねーよ」

「何ですって」

「いくらやつてもオマエの攻撃は俺には効かないんだ。これ以上
続けても不毛なだけじゃねーか。だから、こんな無意味なことは
やめてもつと若者らしく青春を謳歌しないか？」

「らしく・・・」

美琴が自分自身を確かめるようにつぶやく。

「・・・そうね。私が間違っていたのかもしれない
わね」

「わかってくれたか」

「ええ、ずっと心のどこかでブレーキをかけてたのかもね」

そう言くと、美琴の周りで先ほどまでの攻撃とは異なる音を電撃が
かなえ始め、それに伴い空がゴロゴロと音を鳴らし始めた。

「私の全てを出し切った全身全霊の攻撃・・・」

「・・・雷雲！？」

「人間相手に流石にこれは・・・とか躊躇するなんて本っ当、私ら
しくなかつたわ」

「・・・」

言葉もない上条。美琴の雰囲気になだだ足が後ろに下がる。と、
そこで上条は美琴の後ろに居る二人の姿に気がつく。

神無月と白井は店でパフェを食べ終わってから上条と美琴を探しに出ていた。

「どれだけパフェを食べれば気が済むんですの！ おかげですっかりお姉さまを見失ってしまったじゃありませんの」

「でも、一分で食べ終わっただろ？」

「それは最初の一個で、その後六個もパフェを注文していたなんて知りませんもの！」

「いや、一日かき氷一個とパフェ一個では燃費の悪い俺には足りなくてな」

「悪すぎですよ！ あれだけ食べればわたくし4日は持ちますわよ！」

「俺の半日分で4日も動けるのか、凄いな」

「あれで半日分なんですの！？」

「まあな。 んっ、あれって美琴の追ってた不良じゃないか？」

話しながら美琴を探していると、神無月が美琴の追っていた不良（レア：焼き加減）を発見した。

「ええ、確かに先ほどの方たちで間違いないようですけど。 お姉さまはどこに？」

「まあ、ここにいないって事は情報収集を台無しにした当麻のところに電撃を・・・」

と、神無月が言っている最中にドゴンという雷の落ちたような音が少し離れた鉄橋の方から聞こえてきた。

「いやー、分かり易くて助かるな」

「・・・そうですね。 お姉さまの相手をするなんて、あの方生きていらっしやれば良いのですけど」

「不幸だ不幸だと言いつつ、なんだかんだで当麻は死なないと言う事に関しては運が強いから大丈夫だと思うぞ。 まあ、そんな死ぬ

ようなところに巻き込まれるのは不幸かもしれないがな」

と言いつつ神無月は、

（今回に限ってはわざわざ自分から巻き込まれに来たのか・・・あれ、今回だけか？ 割と自分から首を突っ込んでいることも・・・）と考えていると、

「何をボケつとしてますの？ 行きますわよ」

「ん、ああ」

そう言つて、白井の空間移動テレポートで二人はその場を後にし（不良放置）、鉄橋近くで美琴の『電撃の槍を、（ズドン）、水風船みたいに、（ドゴン）、簡単に、（バリバリ）、消し飛ばしておいて、（バゴン）、そんな二三〇万分の一の天災が何を言っているのよ！（バリバリズゴワーン）』という場面に出くわした。そして、二人はわざわざ死地に飛び込んでいくほど自殺願望はないため美琴の少し後ろで見守ることにしたのだった。

上条の視界が神無月を捉え、すぐさまアイコンタクトでSOSを発信する。

「一タ・ス・ケ・テ・ク・レ《有真頼むから助けてくれ》」

「一ム・リ・ト・イ・ウ・カ・チ・ヨ・ウ・ハ・ツ・ス・ン・ナ《無理、美琴を無駄に挑発するから悪い》」

神無月の諦めてくれサインが上条に返ったところで美琴の体から電撃が雷雲に向かつてのび、その直後上条を含めたこの付近に雷が落ちることとなった。そして上条の、

「不幸だぁー」

と言つ声が辺りに響き渡った。

その頃の初春の部屋では、トントンという野菜を切る音で初春が目を覚ましたところだった。ベッドから起き上がり初春が台所をのぞくと、

「佐天さん！ また、来てくれたんですか」

「あ、ごめん。起こしちゃった？ 夕飯作りに来たよん。つつてもお粥だけど」

「わあ、わざわざありがとうございます」

「汗かいたなら先に着替えちゃいなよ。 ついでに体も拭いてあげる」

佐天のお粥は出来上がったが、流石にすぐに食べられるほどの温度ではないため、少しさめる時間を利用して佐天は初春の体を拭く。そして、拭きながら初春に話しかける。状況としては少し違うが風呂に入りながらだと腹を割って話せるといった状況に近いのだろうか。

「ねえ、初春はさ。 高レベル能力者になりたいって思わない？」

「へ？ そうですねー、そりゃ能力は高いに越したことないし進学とかもその方が断然有利ですけど」

「んー、そう言うんじゃないくて、ほら普通の学生生活送るなら外の世界でもできるし超能力にあこがれて学園都市（こく）に来た人って結構いるでしょ」

佐天は初春の体を拭いたタオルを水を張った洗面器で洗い水を絞りながら続ける。

「あたしもさ、自分の能力ってなんだろう、あたしにはどんな力が秘められているんだろうって、ここに来る前はドキドキして寝れなかったよ。それが最初の身体検査（システムスキャン）で『あなたには全く才能ありません』だもん。 正直へコンだぜ」

そんな佐天に初春は、

「・・・わたしも能力の強さは大したことありませんけど、白井さんと仕事したり、佐天さんと遊んだり毎日楽しいですよ。ここに来なければ皆さんと合う事もなかったわけですから。 それだけで

学園都市に來た意味はあると思うんです」

と楽しげな笑顔で言った。

「ついはる初春・・・」

「佐天さん？」

「あーっもう！！ 可愛いこと言ってくれちゃって！」

と言うと佐天は初春に抱きつく。ついでに濡らしたタオルで初春の体の特に旨の当たりを重点的に弄もよぐるように拭ふく。初春は驚き、

「ひゃわっ」

「おおー良い声で鳴くねー。 ご褒美に全身くまなく拭いてあげよう」

「キャ——ッ、キャ——ッ」

佐天に体中を弄られながらも初春は、

「佐天さん、手の届く場所は自分で吹けますからっ！」

「ダメー」

その時遠くで、ゴロゴロゴロドオーンと言う雷鳴が響き、部屋の明かりがふっと消えた。

「あら？ 停電？ 良いところだったのに」

「助かりました・・・」

美琴の起こした雷は間接的に初春を少し助けたのだった。

美琴の発生させた落雷は上条に向かって落ちた。しかし、近くにいた神無月や白井の方にも雷は落ちてきた。まあ、全員防ぐなり避けるなりして無傷だったのはよかったことだといえる。そして、雷を防いだ上条はダッシュで逃げる。その結果として、逃げた上条を美琴が、

「待てやコラー」

と追いかける。今度は遠くへの移動ではなく見えている相手を追うため、神無月と白井は美琴を走って追いかける。そのため、全員が

走り回ることとなった。そして走り回っている最中、ふと神無月が携帯の時計を見ると夏休みに突入していた。つまり、翌日の午前0時を回っていたのだった。その時点で神無月と白井は諦めて帰寮、上条と美琴は追いかけてここを続けることとなった。こうして、馬鹿みたいに走り続けることから4人の夏休みは始まるのだった。

第05話 え

私そんなに子供じゃないよぉ？（後書き）

更新にだいぶ時間かかりました。

自動車学校や夏休みの課題やらで夏の間にはほとんど更新できずありませんでした。

いえ、いいわけですね。Rewriteとか神採りアルケミーマイスターとか全クリしていたんですから・・・

現在、少し懸念事項が一つ。

原作の上条当麻、もしくはアクセラレータの本質にかかわる部分（まだ原作で明かされていない部分）が、

神無月有真のこれから明かされる本質とかぶっている可能性が・・・かぶっていたらどう修正したらいいか悩みどころですが、頑張っていこうと思っています。

これからもよろしく願います。

あと、文の間違いとか、言葉がおかしかったら教えてください。

第06話 超能力と魔術による序曲 〈overture〉

「クソ暑い・・・」

7月20日、今日から夏休みが始まり、ウツキウキな気分になる学生もかなり多いだろう。しかし、神無月有真かなづきゆうまの気分と言ったら鬱気うつき雨季きつきだった。昨日の夜中（いや既に今日に突入していた気もするが）に神無月と同じマンションの同じ階に住む上条当麻かみじょうとうまが学園都市第四位の超能力者レベル5の美坂美琴みさかみことを挑発したことにより大ゲンカ勃発ぼっぱつ、その際の雷の影響でこのマンションの住人の持つ家電の8割が死滅した。挑発した本人だけならまだわかる。だが、喧嘩自体には、無関係な神無月に見ればとぼつちりもいいところだった。そして、死滅した家電の中にはエアコンも含まれているわけで、結果として神無月の部屋は蒸し風呂、いやサウナといった様相を示していた。そのせいで部屋の隅に置いてあった観賞植物が茹でた野菜の如く萎びて死にそうになっていた。それだけなら神無月としてはよかった（良くはないが）。最も良くないことは冷蔵庫が死滅していることだった。神無月の冷蔵庫には基本的に好物である甘いものが詰まっている。普通の食事の材料も入ってはいるが、量でいえば九対一、もちろん甘いものが九だ。それが、朝起きたら壊滅していたのだ。神無月に見れば、これほど嫌なことはない。

「あいつら、この恨みはデカいぜ。フフフフ」

神無月はどう落とし前をつけさせようかと考えて黒い笑みを浮かべる。しかし少し考えて、『はあ』とため息をつく。

（そんなことより、当面の問題は冷蔵庫とエアコンだ。飯をこれから全部ファミレスで済ますわけにはいかないし。しょうがない、手痛い出費だが背に腹は代えられん。今日丸一日潰してもいいから良いのを選んで買おう）

と、神無月が今日の予定を決めた時に置き型電話がなった。こんな朝早くから誰だよと思いつつ、『もしもし、神無月ですが』と受話器をあげると、

「もしもし、先生ですよ」

と幼さを感じさせる担任教師である月詠小萌つぐよみこもえの声が神無月の鼓膜を振るわせた。

「小萌先生？　こんな朝早くから何か用ですか？」

「はい、神無月ちゃん、馬鹿だから補習ですよ」

「・・・はい？」

小萌先生の嬉しそうな声を聞き間違いかと思い、神無月は間抜けな声をあげる。

「だ〜から、神無月ちゃんは今日から学校で補習なんですよ」

「いやいや、今日はこれから昨日の落雷で死滅した家電の代わりを買いに行くつもりなんですけど」

「そうですか・・・それじゃ仕方ないですね。諦めて下さい」

「えーっ！　今は補習はいかなくてもいいっていう流れじゃないんですか!？」

「神無月ちゃん、そういう寝言はきちんと成績をとってから言ってみるといいのです」

「寝言呼ばわり・・・」

神無月の発言が寝言呼ばわりされるのもしかたのないことだった。今まで自分の能力を隠していた神無月は勉強のほうもかなり手を抜いていた。そのため、かなり成績は悪い。しかも、ついこの間の身体検査で超能力者認定を受けはしたが、記録術かいほうの単位はそんなに甘くない。テストも含まれるし、今までのレベルだって加味される。ちなみに今までは低能力者レベルだった。まあそれも含めて、端的に言えば単位的にかなり危ない位置にいるのだった。

「神無月ちゃん、学生の本分は勉強をすることなのですよ」

「で、でも俺の今日のご飯とかはどうすればいいんですか？」

「いざとなったら、先生の家で御馳走するから大丈夫なのです」

「・・・マジっすか。ちなみにですけど、補習って誰が来て、何時から始まるんです？」

「時間は普段学校が始まる時間同じで、参加者はクラス全員ですよ？」

「・・・大丈夫かうちのクラス。はあ、分かりました。行きま
すよ、行けば良いんすよね」

「はい、先生気合い入れて頑張るんで覚悟しててくださいよ。」

「じゃあ、また後で会いましょう」

「はい、また・・・」

そう言くと、小萌先生からの補習通知リブコールは切れた。朝からついてなさ過ぎると神無月は落ち込むが補習までの時間はそんなに余裕が無いしょうがない当麻を連れて学校行くかという思考に至るまでその時間はかからなかった。神無月は冷蔵庫に入っていないくて保存が効くもので主食足り得そうな物を見つくる。結果としてフルーツグ。ノーラになったのだが、それを適当に口に詰め込み、飲み込み、歯を磨いて、家を出る、そして上条家の扉を開くことになったのだ。た。

そのころの上条家では、朝っぱらから部屋のベランダに純白シスター（教会の方のシスターで上条の妹ではない）が干してあったことでごたごたが起きていた。純白シスター曰く、自分は教会の者で禁書目録という名前だと、そして彼女は一〇万三〇〇〇冊の魔導書をインデックス持っているため魔術結社所属の魔術師に追われている、とのことだった。しかし、学園都市で『非現実』はナンセンス。そのうえ彼女の持っているという一〇万三〇〇〇冊の魔導書とやらの一冊すら上条は見えていない。そのため魔術なんてものを上条は信じられずにいた。また、インデックスも上条の異能の力なら神様の奇跡でも打ち消せるという右手の力を信じていなかった。お互いに相反する意見

を持つため、ついには口げんかつぽくなつてきて、上条はインデックスを『インチキ魔法少女』呼ばわり。それに対しインデックスは、「い、インチキじゃないもん！　ちゃんと魔術はあるんだもん！」

「じゃあなんか見せてみるやハロウィン野郎！　ソイツを右手でぶち抜きや俺の幻想殺しも信じるしかねーんだろ、このフアンタジー頭！」

「いいもん、見せる！」

そういうとインデックスは両手で自分の着ている白い修道服を上条に見せつける。

「これっ！　この服！　これは『歩く教会』って言う極上の防御結界なんだからっ！」

「何だよ『歩く教会』って、もう意味分かんねーよ！　さつきから聞いてりや禁書目録だの防御結界だの訳の分からない専門用語ぶち込みやがって、この不親切野郎！　『説明』ってのはな何も分からない人に向かつて噛み砕いて教えるモノなんだ、そこントコ分かってんのか！」

「なっ・・・ちつとも理解しようとも思わない人が言う台詞！？　だったら、論より証拠！」

そういうとインデックスは台所に飛び込むと包丁を持ち出してきた。

「ほら、これでお腹を刺してみる！！」

「じゃあ刺してみる！　・・・なんて言うか！　未曾有の少年犯罪だぞ、それ」

「全く信じてないね。　これは『教会』として必要最低限な要素だけを詰め込んだ『服の形をした教会』なんだから。　布地の織り方、糸の縫い方、刺繍な飾り方まですべてが計算されてるの。　包丁どころか拳銃だつて効かないんだよ。・・・さつき、背中を撃たれてベランダに引つかかったつていつたけど、『歩く教会』がなかったら風穴があいていたところだったんだよ。そこんとこ分かってる？」

そんなこと分かるはずもなく、上条の心境は、

・・・・・・、
・・・・・・？

「えええええええ、え・・・・っ
て、あれ？」

なにも起きない。

「ほらほら何が幻想殺イマジンプレイカーしなんだよ。べつつに何も起きないんだけど？」

ふっふーん、と言う感じで両手を腰に当てて小さな胸を大きく張るインデックスだったが、次の瞬間、インデックスの衣服、『歩く教会』はストンと落ちた。厳密には歩く教会ではない。すでに上条の右手の力で布地を織っている糸という糸がほどこれて、『歩く教会』から『歩ただのぬのきれかない廃教会』へと強制変換されていた。そして、服と独立していた帽子のようなフードだけは被害を免れ元の形を残しているが、帽子だけをかぶっていても大事な部分は隠れてくれない。まあ、どのような状態かと言うとインデックスは上条に完全無欠の素っ裸にされたのだった。それを見て上条は驚きと焦りと照れを同じくらいの分量混ぜたような顔で、

（なんで下着を着けてないんだ——！？）
と心の叫びを放った。

『パシャッ』

上条がインデックスを素っ裸に引ん剥いて、二人とも時間が凍りついたかのように声もなく固まっている瞬間にそんな音が上条家に響いた。上条が急いで音のした方向、つまり玄関の方を振り返るとそこには、

「はっ！ 当麻が外国人の女の子を部屋に連れ込み丸裸にしている写真が撮れてしまった・・・」

神無月が携帯のカメラを起動させて、上条とその目に前で裸にされ

たインデックスをファインダーに収めていた。

（ふう、最近のカメラはピント調節や撮影までの時間がホント短くなっただけ）

「って、ギャー、一人やり遂げたみたいで顔で何撮ってたんだ有真！？」

「何ってそりや、上条当麻（加）が外国人の女の子（被）を無理やり素っ裸にしたという犯罪現場の証拠写真」

「違っうっ！ 上条当麻（加）でも外国人の女の子（被）でもねえよ？」

「え、だって当麻がその外人さんの服を『そんな幻想へ男子高校生を阻む壁』はぶっ壊す」って言って右手で壊したんだろ？」

「いや、上条さんはそこまで言っていないんですが？」

「でも事実として、その子を素っ裸にしたのは当麻だろ？」

「ぐっ、それは不可抗力というかなんというか・・・」

上条が弁明に困っていると、神無月は上条の肩にポンと手を載せて「大丈夫、分かっているって。ちょっと、抑えきれなくなった欲望があふれ出ちゃっただけなんだよな」

「いや、全然わかっていませんよね！？ なんて、犯罪を犯しちゃった少年に話しかける婦警さんみたいな感じを醸し出しちゃっているんですか！？」

そう、叫ぶ上条を横目に神無月はおもむろに携帯を取り出すと、

P i ・ P o ・ P a ・ トウルルルルル・トウルルルルル

「もしもし、警備員ですか？ 今、第7学区のマンションの一室で

男子学生がレイ——」

「やめろー！ 俺の人生が終了するー！」

上条は神無月の携帯を神速の勢いで奪い取ると、オンフックボタン（終話ボタン）を押し、通話を切る。いきなりの人生の大ピンチから脱した上条は、ふうと一息つくと呼んだ。

「何でほんとに警備員の詰所に電話掛けてんですかー！」

「いや、友人を犯罪者にしないためには公僕の手も借りなければな

らない時もあるかなって」

「いや、むしろやつてもいない罪で逮捕されるところだったじゃねえか！」

「だって、自分の家に連れ込んで服をばらばらにしたんだったら、これから犯^ゃることは一つかなと思って」

「そんな軽いノリで社会的に抹殺されるのは、わたくし上条当麻としては非常に納得がいかないんですが。　なんで、朝からそんなに機嫌が悪いのか上条さんに話してみなさい」

その瞬間確かに神無月の額には怒りを表す血管の浮き出た模様、怒^ど筋^{すじ}が現れていた。

「機嫌が悪い？　どこかの誰かさんが学園都市最強の電撃使い^{エレクトロマスター}がどんな性格をしているか分かったうえで挑発したせいで、この寮に落雷、寮生の家電の八割が壊滅、俺の家の冷蔵庫も例に漏れず即死、拳句のはてに俺の冷やしておいた甘味が全滅してたなんてことで怒ったりしてないよ？　それでなんだっけ、何で俺が怒っているかだっけ？」

「すいませんでした。　弁償でもなんでもするんで頼むから黙っててください」

自分のミスに気が付いた上条は、すぐに謝罪モードに移行。上条も神無月の甘味への執着力は理解しているため、甘いものに関することでは折れるようにしている。上条は、以前、神無月の甘男伝説を目撃していた（と言うか一緒にいた）。スキルアウトが神無月の買ったデザートをバイクで引っ掛けて台無しにしたことに端を発したその事件は大規模なスキルアウトの壊滅という結果を残した。

そのとき壊れたバイク1200台強、うちコンクリート壁に突き刺さっていたものが400台弱、倒壊した廃墟ビル20棟、病院送りにされたスキルアウト9000人強、e t c . e t c

その事件は結局犯人の特定はされなかったが、見ていた上条としては怪獣映画の中にも入ったのかという光景で、それ以来、甘味に関することだけでは神無月を怒らせないようにしようと上条は心に

誓ったのだった。しかし、神無月も鬼ではない甘味を破壊されたとしても、その場で謝れば許すくらいの心はある。あの事件では、ス
キルアウトがバイクでぶつかってきたにも拘らず、^{かがわ}そのうえ神無月
に因縁つけて喧嘩を売ったため神無月がキレたことによるものだった。よって、今回の上条の様に謝れば問答無用に病院送りにされる
わけではないのだった。

「はあ、分かったよ。アンチスキル ジャッジメント警備員や風紀委員には言わないって」

「ホントでせう？」

「ああ、もちろん。アンチスキル ジャッジメント警備員や風紀委員には言わない」

「・・・ん？」

P i ・ P o ・ P a ・ トウルルルルル・トウルルルルル

「もしもし、土御門か？ 俺だ。ここに度し難い変態が——」

「って、さっき約束したばかりなのに、舌の根も乾かない内からし
やべろーとしてんじゃねえよ！」

ただし、神無月の甘味を破壊すると性格のSっぷりがランクアップ
するのだけは避けられなかった。しかし、そんな風にじやれていた
二人に魔の手が伸びてきて二人は肩をがっちりつかまれた。二人が
振り向くとそこに悪魔がいた。

「人を素っ裸にしておいて、私のこと無視して——！！！！（がぶ
ッ）」

「ギヤー、頭皮が裂ける——！！」

「んぎゃー！ 俺は関係ない——！！」

「写真撮っておきながら関係ないはずがないんだよッ！」

「ンギヤ——ッ！！！！」

その頃美琴は、上条を見失ってすでに朝になってしまった街を一人
ふらふら歩いていた。

（はあ、アイツを追いかけている間に夏休みに入っちゃったよ。

結局、情報もスカつたし。 まあ、あの爆弾魔が『レベルアップ幻想御手』を使つてたなら、今頃取り調べで色々分かつて――）

能力の爆発的な使用と一晚中走り回った肉体的な疲れと一睡もせず
にいた徹夜明けの眠気でフラフラになりながら横断歩道を渡つてい
た美琴のすぐ隣に白井が空間移動してきた。

「！ 黒子」

「！！ お姉さま」

白井は分かっているが、美琴の隣に空間移動したわけではなく、連続空
間移動で移動している最中に偶々美琴の隣が移動場所になつてい
ただけだつた。白井の空間移動の限界値は八一・五メートルだ。一回
の空間移動で目的の場所に行くなら限界地内までが範囲だ。それよ
り、目的地が遠い場合は空間移動を連続して繰り返す必要があり、
その中継地点の隣に美琴がいたというわけだつた。そして、白井は
美琴の腕をつかむと、

「ちようど良かったですわ」
と引く張る。

「ちょ……ちよつと？ 私、寮に帰って寝たいんだけど……」
「問題が発生しましたの」

「へ？」

そして、美琴はその問題を聴く前に白井の空間移動でその場から消
え、気が付くと水穂機構病院と書かれた建物の前に移動していた。
そして、足早に中に入っていく白井の後を美琴は追つた。

「意識不明？ あの爆弾魔が？」

「そうですね。居合わせた警備員アンチスキルの証言では、取り調べ中に突然
眠つたように倒れ、こちらの病院に搬送されたと……」

説明しながら白井が歩き進んでいくと、担当医の男性が待つていた。
白井は風紀委員の腕章を見せると、

「風紀委員の白井です。説明をお願いします」

「どうも、ご苦勞様です。早速ですが、彼の容態はこちらとして
も最善を尽くしているのですが、以前意識を取り戻す様子はありま

せん」

そこへ美琴がおずおずと手を上げる。

「あの、私先日こいつを思いっきりぶん殴ったんですけど、私のせいでしょうか？」

「いえ・・・関係はないと思います。少なくとも、頭部への損傷は見受けられません。そもそも、体のどこにも異常は見受けられないのです。ただ、意識だけが失われていて、原因が分からないので、手の打ちようがないというのが現状です」

と医師の話を聞くと、白井は真剣な表情で解決の糸口を求める。

「分かりました。では、このようなケースは稀なのでしょうか？
今までに起こった事は・・・」

「そうですね。以前まででしたら、稀少だったと申し上げるべきでしょうか。つい先日までは、私もこのような症状は診た事がありませんでした。しかし、今週に入って同じ症状の患者が次々と運ばれているようになりました。他の学区の病院でも、事態は同様です。この症状の患者が今まで回復した例は今までにありません」

「じゃあ、伝染病とか・・・？」

「いえ、ウイルスは検出されていませんし、関係者の二次感染も起きていないので、その可能性は低いと考えています」

美琴が尋ねるも、医師の答えは芳しいものではなかった。

「ただ、何らかの共通の要因はあるはずですよ」

その言葉に美琴と白井は顔を見合わせ小声で話す。

「（まさか、これも『幻想御手』^{レベルアップ}が・・・？）」

「（今のところは情報不足で何とも言えませんが・・・ですが、仮にそうだとするなら事態は深刻ですわね）」

そんな二人の医師は疲れきった声で、

「情けない話ですが、当院の施設とスタッフの手に余る事案ですので、外部から大脳生理学の専門チームを招きました。間もなく到着される予定です」

ちょうどその時、美琴達の真後ろからヒールの足音と共に、声が響いた。

「お待ちせしました」

美琴達が振り返るとそこには、大勢の医師を引き連れた白衣の女性
が立っていた。

「水穂機構病院院長から招聘を受けました。 木山^{きやま}春生^{はるみ}です」

「ハアハア、食い殺されるかと思った。 ってか、当麻はどんな外国人少女を裸に引剥いてんだよ！ 食人種族にまで手を出すとは思わなかったぞ」

「上条さんにだって分かんないんです！ 朝起きたらベランダに干してあつたんだから！」

「い、意味がわかんねえよ。 とりあえず、あの子の今直そうとしているのが服だったものなんだろう？ ってことは見たところ教会のシスターさんってことなのか？」

「らしい、何でも追われているとか何とかって言ってた」
「追われてる？」

神無月と上条は二人して上条の寝具（毛布）を体に巻きつけただけの銀髪シスターを振り返る。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

沈黙。

不用意に話しかけられない二人は後ろを向いて小声で話し合う。

「・・・・・・・・・・（当麻、何か話しかけてくれ）」

「・・・・・・・・・・（え！？ 上条さんにまた噛みつき地獄に落ちると？）」

「・・・・・・・・・・（ほら、服を脱がした仲だろ？）」

「・・・・・・・・・・（不可抗力っ！ それに脱がした張本人が話しかけ

られるわけないだろ)」

「……（いや、当麻ならいけるっていつものフラグ乱立パワースで）」

「……（上条さんのは、駄フラグなんです。こんなところで発揮できる力はないの）」

「……（そもそも上条家を訪れた客だし、ここは家主である当麻が）」

「……（客は玄関から入ってくる者で、いきなりベランダに現れたりする人はまっとうな客とは言えない！）」

「……（さっきまで言い合いしてたくらいの仲なんだから話せるだろ）」

「……（それは服を砕く前の話だからであって、素っ裸にしちまった女の子と話す会話術なんて上条さんは持ち合わせてないんです）」

「……（俺だって、当麻の恥ずかしい秘密になるなーなんて思いながらノリで写真撮っちゃったけど確実にあの子の裸もアルバムに収まってるんだぞ。話しかけれねえよ）」

「……（じゃあ、二人で一緒に話しかけるか？）」

「……（しょうがない、ここで妥協しよう）」

「……（話題はどうするんだ？）」

「……（適当でいいんだろ　とりあえず、話を始めることが大切だからな）」

「……（そうか、じゃあ反応されたほうが話を続けるってことで）」

「……（ああ、分かった）」

二人の心境としては、話を進めなきゃならない状況ではあるが、できるだけ攻撃を受けない方法を取りたいと言うものだった。つまり、インデックスが反応するのは自分ではないほうの話題であるとありがたいということだ。これは、同時に話しかけつつも相手の話題に食いつかせることになる。

（つまり、いかにスルーしてもかまわない普通すぎる話題を振るかが勝利条件！ よって、ここで振るべき話題は——）

「今日はいい天気ですね！」

がばつとインデックスに振り返った二人は同時に同じ話題を振って固まった。神無月も上条もまさかお互いの話題が被るとは思っていなかったため、驚きで停止する。そんな二人にインデックスは、

「私を全裸にして、あまつさえ写真で撮っておいて最初にいうことがそれっ！？ それにいきなり丁寧口調になられても気持ち悪いんだよっ！」

と、布地に逆戻りした元『歩く教会』あるくきょうかいを安全ピンで修復しながら叫んだ。

「しかも、この暑いで天気的话题を振るってどういうこと！ 『お前は全裸だから過ごしやすい温度に感じるだる感謝しろよ』とでも言いたいのか！」

インデックスは犬歯をむき出しにがるるると唸っている。酷い言い掛かりではあるが、神無月も上条も褒められた思考で話しかけたわけではないので言い返せる状況ではない。

「えっと、姫？ こちらにワイシャツとズボンのセットがあるのですが」

そういつて、神無月は上条家の床に畳まれていたワイシャツとズボンをインデックスに差し出す。

「って、何で俺の服をさりげなく貸そうとしているのでせう！？」

「だって、今俺の着ている服を脱いで貸すわけにはいかないし、これ当麻の予備の制服だろ？ だから、良いかと思って」

「まあ、いいけど。でも、本来それは俺が貸すべきものであって、有真が勝手に貸し出すものじゃないですよ。せめて、俺に一言断つてからにしてくださいませんか」

「まあ、そうだな。次があつたら考えとくよ」

適当な神無月の答えに溜息をつく上条、それを見てインデックスが吠える。

「どうして普通に話しかけられて、しかも私はそっちのけで話をしてるんだよう!？」

「あ、悪い悪い、すっかり意識の外だった。で、なんだっけ、涼しくて過ごしやすいなヒヤッホウって話だっけ？」

「バカにして・・・ううううううう!!」

「ギャー、それ俺の借りてるビデオなんだからハンカチみたたく噛むな! 怒らせたのが有真なのに何で実被害は俺!？」

ハンカチのように噛まれるレンタルビデオを上条が救いだそうとインデックスに近づくと、今度はインデックスが怒りにまかせて、あたりの物を投げ始めた。

「バカにしてっ! バカにしてっ! バカにして!!」

そのたびに上条の枕やら目覚まし時計やらクッションやらが上条はもちろん神無月にも飛んでくる。

「痛って、痛って、痛いつて言っただろ、分かった、分かりました。さっきのは俺が一〇〇パーセント悪かったから物を投げるのをやめてくださいませ」

「誠意の籠ってない謝罪で罪が許されると思ったら大間違いなんだよ!」

そうやって、物を投げ続けるインデックスの攻撃をかわしつつ神無月は、

「なあ、どうでもいいけど、さっきから毛布がズレてるけどいいのか?」

「なっ!？」

インデックスは神無月に言われて、自分の投擲とうてきによる防御能力の低下開に気付कि、急いで後ろを向いて毛布をかぶり直すと安全ピンで修道服の修復に戻って完全沈黙してしまった。神無月も上条もさっきよりも話しかけ難い状況になってしまい自分たちの迂闊うかつさ加減を呪った。

「あ——見つからないなあ『レベルアップバー幻想御手』」

佐天はネットサーフィンで幻想御手を探すために自分の部屋でパソコンの前にかじりついていた。かなりの長時間、掲示板の書き込みや、個人のブログやらを調べて探してみるもレベルアップバー幻想御手に関する具体的な情報は掴めずじまいだった。はつきりいつて、収穫なしに等しい。探すのにも疲れ、椅子を後ろに傾けて伸びをすると、床に置きっぱなしになっていたミュージックプレイヤーが目に入ってきた。長時間の調べ物にも疲れて少し眠くなっていた佐天は、気分転換も兼ねてミュージックプレイヤーを拾うと、

「コイツにも何か新曲入れとくかね」

そして、音楽をダウンロードできるサイトのトップページに移動した。

「何か、オススメのヤツあるかなあ」

そして、オススメの曲などを一通りみるが、どうも佐天の好みに合わない曲ばかりだった。再び、ダウンロードサイトのトップページに戻ってみるも、やはり更新された様子はない。レベルアップバー幻想御手のことについて調べて疲れていた上に、さらに良い曲も見つからないとがっかり感から疲れがさらに増えたような気がする。これだけ探してもレベルアップバー幻想御手が見つからないとなると、やっぱり噂に過ぎないのではないかと言う気持ちが強まる。

「あゝあ、やっぱり噂は噂にすぎないのかな」

そう言いながら、佐天が椅子の背にもたれかかり足を空中でぶらぶらさせていると、少しバランスを崩した。

「ありや、とつと、あ、うわああ!」

精一杯体勢を立て直そうとするものの一度崩れたバランスはそう簡単に戻ってくれずに結果、佐天はドスンという音を立てつつ椅子から滑り落ちた。しかも、その拍子に机の上の教科書に足を引っ掛けて撒き散らすというオマケつきだった。

「イタタタタ、うっ、ついてないなあ」

そう言つて、立ちあがるとパソコンの画面に少し違和感があった。よく見ると、さっきの教科書の雪崩でマウスが移動したのか、今まで気がつかなかった隠しリンクの上にカーソルが移動して、矢印型のカーソルからリンクを押す際の手の指さし型のカーソルに変わっていた。“music Link News”と書かれたロゴの“News”の部分が巧妙に隠しリンクになっていたのだつた。

「なんだこりゃ、隠しページ？」

佐天はとりあえずリンクを押してみると、今までの背景が白いページから一転し、背景が真っ黒の“music Link Gossip”というロゴが貼られた怪しげなサイトに辿りついた。

「なんで、わざわざこんな・・・」

マウスホイールを回し、どんどん下へ送っていくと佐天はある文字を見て止まった。

TITLE: Level Upper

ARTIST: UNKNOWN

「これって・・・」

ちくちくとインデックスが修道服を直す中、上条と神無月はさつきよりもさらに話し辛くなったこの空気に参っていた。まあ、その間に神無月は上条から朝起きてからことを魔術や『歩く教会』についての話を大体聞いたのだが。しかし、二人とインデックスの間には五分、一〇分と無言の時間だけがただ過ぎていく。そんな沈黙を破ったのは意外にもインデックスだった。

「できた」

そう言つて、彼女が広げたのは何とか形を取り戻しはしたが、大量の安全ピンがぎらぎら光る真っ白い修道服だった。神無月は見た瞬

間に口には出さないが『うわぁ・・・』とってしまった。見た目云々より本当に服の内側に向かって針が飛び出していないのか怖くなる服装だ。とてもじゃないが神無月が彼女の立場でも着れない。座った拍子にどこかの針が外れて体に刺さる、なんていう痛い想像が頭に浮かんできて神無月は身震いした。神無月は、そういう意味もこめて尋ねる。

「えっと、それ本当に着るのか・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

インデックスが無言で神無月を泣きそうな目で睨む。

「いや、冗談はナシで。見るからに危なそうじゃん。針が周りにたくさん付いてる服なんて俺は怖くて着ねえよ。ほら、さっき当麻から許可が下りたワイシャツとズボンのセットがあるんだからこれ着ろよ」

インデックスは針が体に刺さりそうというくだりでビクツとし、あらためて自分の修復した服もどきとワイシャツとズボンのセットを見ると顔を『うー』と悩ませる。しかし、

「いい、やっぱり、これ着る。シスターだし」

遠慮してるのかと上条も、

「遠慮しなくていいぞホントに、不可抗力とはいえお前の服を壊しちゃったのは俺なんだし」

と気遣うような声でいう。それに対してインデックスは、

「私、何も付けてないから、服を返したらくんくんにおいを嗅がれたり、ぺろぺろ舐めてられそうだし・・・」

「俺をどんなマニアックな変態だと思っただテメエ！」

「冗談だよ。私はいつまでもここに居る訳にはいかないし、借りても返しに来られるか分からないからね。それに綺麗なまま返せるか分からないし」

「いや、別に少しくらいならここにいてもいいんだぞ」

すると、インデックスは悲しげな表情で首を横に振った。

「うん、ずっとここにいたら君に迷惑かけちゃうしね。君だっ

て、部屋ごと爆破されたりはしたくないよね？」

「なつ！？」

神無月も上条も絶句する。この子は部屋ごと爆破するようなヤバイやつらに追われているのかと。

「結構ここにいたし、奴らも私の『歩く教会』が壊れた事に気が付いただろうからそんなに長居もできないんだよ」

それに対して神無月は疑問をぶつける。

「は？ ちよつと待ってくれ、だって、その『歩く教会』って服が壊れたのを見たのは俺と当麻だけだぞ。 なんて、ここにいない連中にそれが壊れたことが分かるんだよ？」

「うん、この服は魔力で動いてるんだけど、その魔力をもとに連中はサーチかけてるみたいなんだよ。 だから、どこに『歩く教会』があるのか、どこで魔力の反応が無くなったののかも全部分かつちやうんだよ」

「・・・AIM^{えーあいえむかくさんりきは}拡散力場を元に追跡されているようなもんなのか」

「え、えーえむあい？ それって何？」

「あー、つとだな、俺たち超能力者の体から無意識に漏れる微弱な能力のフィールドのことだ。 個人個人の強さとか能力^{レベル}によって違うからそれを元にサーチ出来るような技術があるって聞いた事がある。 って言っても、あくまで無意識に発生するものだから、自分のAIM拡散力場だとしても感じられる奴は少ないらしいけどな」と神無月が説明すると、インデックスが悩んでいる顔をして、上条は初めて知った！みたいな顔をしていた。

「うーん、分かったような分からないようなかんじかも」

「まあ、俺も完全に理解してるかって言われれば、怪しいからな。

んな感じの物があるんだなーくらいの認識で良いと思うぞ・・・
って、AIM拡散力場はいいとして、どうするんだよこれから。

追われているうえに、その絶対防御を誇っていたらしい服も壊れたんだろ？ そんなで家ごと爆破するような奴から逃げるなんて水着で地雷原に突っ込むようなもんじゃねえか。 俺たちはこれだけ

話もしたんだし、少なくとも友人くらいのレベルにはなってる
俺は思ってる。友人が死地に向かうのを見過ごせると思うのかよ」
それを聞いたインデックスは嬉しそうな顔で、

「じゃあ、私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる？」

なんて言った。そんな彼女の顔は掛けられた言葉に嬉しそうな笑顔
のくせに、危ないからこつち側に踏み込むなと言っていた。そして、
神無月も上条もその問いに即OKを出せなかった。神無月にしろ上
条にしろ、それなりに場数は踏んでいた。大勢の不良達に囲まれた
こともあった、爆弾魔の攻撃を至近で防いだこともあった、美琴の
電撃を防いだ事だって何度もあった。しかし、それでも怖くないわ
けではない。現に今この部屋ごと爆破されたら、上条は右手で防ぎ
きれぬ自信はないし、神無月だって能力の展開が遅ければ、上条と
インデックスを守るどころか自分の命すら守れるか分からない。超
能力者と言ってもナイフで心臓を刺されれば死ぬし、頭を銃で撃ち
抜かれれば死ぬ。どんなにレベルが上がっても、人間という枠組み
にいる以上死なない保証なんてどこにもない。神無月も上条も人間
であるが故にその問いは即断するには重すぎた。そんな二人にイン
デックスは、

「大丈夫だよ、私も一人じゃないもの。とりあえず、教会まで逃
げ切れれば匿^{かくま}ってもらえるから」

「・・・、じゃあ、教会つてどこの教会だよ？」

「ロンドン」

「アホか！！ 逃げ切れる距離じゃねえよ！」

「あ、アホ！？ アホは酷いんじゃないかな！ 日本にも支部はい
くつかあるから大丈夫なんだよ！」

叫ぶインデックスの言葉を聞くと落ち着いた神無月は、

「支部ね、まあ、それならある・・・か？ あれ、そう考え
ると俺学園都市に来てから教会なんて見たことないかもしれない。

当麻はあるか？」

「・・・俺もないかもしれない」

「だよな。ほとんど行かない学区にあるのか、はたまた学園都市にはないのか。後者だったら、学園都市の外に出なきゃならなくなるな。まあ、外なら街にひとつはあると思うけど」

日本人は結婚式くらいにしか教会なんて使わないためほとんど馴染みがない。そもそも、キリスト教の人口がそもそも少ないのだから仕方がない事なのかもしれないが、キリスト教を信仰している国と比べると明らかに使用頻度が違う。少なくともキリスト教を信仰している人間は日曜日のミサなどで必ず訪れるのだから週一で使う事になる、日本人の教会を使わなさはキリスト教信者の方と比べると天と地ほどもかけ離れている。日本人の中には、生きているうちに一度も教会を訪れない人もいるだろう。そんな根っからの日本人の二人にインデックスはさらに違いを伝える。

「うん。確かにただ教会っていうだけなら街にひとつはあるかもだけど、私が探してるのは英国式だから」

「「???」」

頭に?を浮かべる神無月と上条を見て、インデックスが『あはは・・』と『まあ、日本人じゃ知らないのも当然かもしれないね』と言うかのように笑う。

「えつとね、キリスト教って言っても私の所属してるのは、イギリスの聖ジョージ大聖堂を中心とするイギリス清教って言うところなんだけど、ローマ正教とかロシア成教とか同じキリスト教でも別の宗派があつて違う宗派の教会じゃダメなんだよね。たぶん違う宗派の教会に行ったら門前払い」

「なおさら難しいじゃないか、ホントに逃げ切れるのかよ」

「まあ、今までもずっと逃げてこれたから大丈夫だよ。ところで

「「」」

「「?」」

「ここから出てくにしろ、出てかないにしろ、着替えたいから後ろを向いてほしいかも!」

「じゃあ、行くね」

「ああ、なんか困ったことが合ったら、また来ていいからな」

「俺の家もこの階にあるから、留守にしている時以外だったらいつ来てもいいから」

「うん。おなかへったら、また来る」

インデックスが着替え終わってから、神無月と上条はインデックスを引き留めたほうがいいのではないかという気持ちに襲われていたが、『じゃあ、私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる?』という彼女の言葉の意味を考えると引き留める言葉はいくら考えても出てこなかった。そして、今この瞬間も満面の笑顔を見せる彼女にかける言葉はこれしかなかった。そんな完璧な別れのシーンで、

「バツみゃーっ！っ！っ！」

上条が悲鳴を上げて蹲った。

「ふえっ、なんか変なのがいきなり登場してるっ！」

とはインデックスの声。

二人の言葉が指すところは、

「ああ、清掃ロボットか」

上条の後ろに立っていた神無月からは見えていなかったのだが、どうやら廊下を掃除していた清掃ロボットが割とスピードを出して走ってきて上条の股間に激突していたらしい。そして、いままで清掃ロボットを見たことがなかったインデックスは初めて見る物に驚きの声を上げたというのが今の状況らしい。普通ならば清掃ロボットが勢いよく人にぶつかるなんてことはないのだが、さすが普段から『不幸』と言っているだけあって上条当麻の運の無さは天下一品だった。

「いつものことながら、当麻はすごい訳の分からないところで不幸な事態に陥るんだな」

「感心してないで、心配をしてほしいのですが」

「ああ、悪い悪い、でも、当麻と一緒にいるといつてもこんな状況に陥ってるから、なんだか心配するっていう基準が下がっちゃった気がする」

「うう、不幸だ」

この事態を見たインデックスは、

「君がこういう・・・『残念なこと?』に合うのってそんなに多いの?」

「・・・聞かないください」

「俺が数えた中で最多の日は学校内だけで確か二二回あった。花瓶が落ちてきて、ペンキが落ちてきて、廊下の水入りバケツに足を突っ込んで、テニスボールが顔に向かって飛んできて、当麻が外に出た瞬間に雨が降ってきて、中に入ったら日本晴れになって、男子トイレの便器の罅^{ひび}から水が噴き出して、清掃ロボットに財布を吸われて、小萌先生の宿題が当麻だけ三倍になって、ほかには何だったかな・・・っていうか今考えるとホントにすごいな」

「うわぁー、上条さんにそんな不幸な現実を突きつけないでー！」

「ホ、ほんとにすごいんだね・・・でも、イマジネーション幻想殺しって言うのが本当なら仕方ないかもしれないね」

「・・・どういうことでせう?」

縋る様な目つきで見る上条にインデックスはクスクス笑って言う。

「うん、君の右手は神様の奇跡すら打ち消せるって言ってたよね。」

だったら、その右手は神様の加護とか運命の赤い糸とかもまとめて打ち消してるんだと思うよ」

「つ、つまりは・・・?」

「君の右手の話が本物ならね、その右手が空気に触れているだけでバンバン『不幸』になっっていくわけだね」

「ぎゃあああああああああ!」
「ふ、不幸だあああああああ
ああ!」

魔術だの神様だのといった非現実^{オカルト}を信じない、上条の中でも不幸だ

けは別格だった。これまでの人生で上条に降りかかった不幸の数は一〇〇〇や二〇〇〇で止まらない。万単位の不幸をその身に受けている上条は『不幸』、それだけは信じてしまう程度には思ったことが上手いかなかったのだった。

「何が不幸って、君。そんな力を持って生まれてきちゃった事がもう不幸だね」

「いや、常々^{つねづね}当麻の不幸っぷりは、常軌を逸^{いっ}してるなとは思ってたんだが、本当にそんな理由があつたんだな。まあ、なんて言ったらいいかわかんないけど、ドンマイ？」

「くそう、一人で不幸な現実^{じじつ}に戦いを挑むくらいなら、二人で不幸な現実と戦う！ というわけで有真の幸運要素抹消するから上条さんの右手を喰らえ！」

「ギヤー、止める。まあ、落ち着け当麻！ 犠牲は少ない方がいいってよく言うだろ。それになんだか俺も最近不幸に出会う確率が上がってる気がするんだから余計に不幸になってたまるか！」

「上条さんはこれから有真にへばり付いて過ごします！」

「いや、本当^{リアル}に勘弁してください」

ギヤー、ギヤー騒ぐ二人を笑って眺めていたインデックスに突如、上条に続く不幸が襲いかかった。さつき上条にクリティカルを入れた清掃ロボットは、いまだにこの場で三人による足止め（進路を塞がれていた）で先へと進めていなかった。その清掃ロボットは、目の前の三人を巨大なゴミかと勘違いしたのか、同じ型の清掃ロボットを二台呼ぶと三人めがけて集団突進をしてきたのだ。とつさに気が付いた神無月とさつき痛い思いをした上条は回避能力をフルに使って急いで上条家の玄関に飛び込んだ。しかし、清掃ロボットたちの襲撃に気が付かなかったインデックスは、

「ゴフツ！！！」

と言うボクサーがボディーブローを喰らったような声というか息を漏らし、ドラム缶状の清掃ロボットの上半身を倒れこませる形で気を失って、そのまま清掃ロボットの集団に運ばれて行ってしま

った。一瞬の出来事に呆気にとられる神無月と上条。ドナドナ。三体の清掃ロボットの通り過ぎた後にはインデックスが気絶した際に落ちたインデックスのフードだけが残された。神無月は落ちていたフードを拾い上げ、

「どうするよ、これ」

「まあ、多分気がついて取りに来るんじゃないか」
そして、二人は上条家の中に入る。

「はあ、朝からどつと疲れた。上条さんはもうひと眠りしたいです」

「ふう、ホントにそうだな。ん、なんか忘れてる気がする」

上条家のリビングで寛ぐ二人だが、神無月は何かが頭の中で引っ掛かってもやもやしていた。

「何かあって？」

「いや、なんだろ」

ふとあたりを見回した神無月の目にインデックスが投げつけた時計が目に入る。その瞬間、神無月の頭の中には、こんな疑問が浮かんでいた。『なんで、俺は今朝っぱらから当麻の家に来たんだけ・

・・・？』

「・・・・・・」

「？　どうかしたんでせう？」

プルプルと震える神無月に上条は声をかける。

「は、ははは、は・・・補習だー！！！！」

「！！！！！！」

神無月が上条を迎えに来た時点で既に時間的な余裕はあまりなかった。そのうえ、インデックス騒動があつたため時間は極限まで無いに等しい。既に走っても補習開始時には間に合わない。

「ヤバい、とりあえず荷物持って靴を履くんだ！　俺が能力でワイムホールを作る！」

「え、上条さんの右手が触れたら壊れるんでは？」

「とりあえず、当麻の右手以外がワイムホールを抜けたら俺が能力

を切るから問題ない」

「それって、俺の右手が切り落とされますよね!？」

「帰りに拾えばいいだろ」

「そんな、大した金も入ってない財布みたいに扱えるわけないですよっ!？」

「じゃあ、分かった。俺だけ先に行く。って、何で俺の服をがつしり掴んでるんだ!」

「一人だけ助かろうとしたってそうは問屋がよろさない。いわゆる所謂、

MI・CHI・ZU・RE」

「ふっざけんな、好意で呼びに来てやったんだから、俺だけでも先に行かせる」

「はい、嘘ー! 絶対、有真は昨日の落雷の件で来ましたー」

「ああ、だったら俺んちの家電代払うか？」

「神様は言いました隣人を愛せと」

「こんなときだけ、キリスト教ぶるなー! って、さらに時間がー! もういい、当麻急げ全力で走れば間に合うかもしれない」

「ちよっ、こんなときに限って靴の紐が絡まってるんだ!」

「こんな時まで不幸はやめてくれ、小萌先生の補習に初しよつぱな端からの遅刻はやバいんだから」

「ほ、ほどけた」

「よし、行こう、すぐ行こう、どんどん行こう」

「ちよっとまだ靴の紐を結んでな——ぐえ」

靴ひものほどけた上条の後ろの襟を持って神無月は焦りに焦った表情で歩きだす。

「行くったら行くんだ。もう、待てない」

「ゆ、有真! 入ってる、入ってる、頸動脈にワイシャツが食い込んで絞め技が極まってる! 上条さんの息がもちません」

「じゃあ、自分で歩いてくれ、限りなく速く」

そして、神無月と上条はようやく本格的に登校出来るのだった。

「神無月ちゃんも上条ちゃんも補習一日目からすっ飛ばすなんていい度胸なのです」

結局、神無月と上条は補習開始時間に間に合わなかった。小萌先生が笑顔でこう呟いた時には、二人は

まだ学校への道のりを全力疾走していたのだった。

第06話 超能力と魔術による序曲 〈overture〉（後書き）

次の章へ突入しました。

いや、今回はいつもよりは早めに書きあがってよかったです。

といつても、一か月くらい掛かっていますが・・・

これからは超電磁砲と禁書目録を並行して進む形になると思うのでよろしくです。

あ、100000アクセスです。

いやー、感慨深いなー。

それにしても、主人公が能力を使うことが少ない！

というかバトルが少ない！

1日24時間は少ない！

僕は友達が少ない！は原作の方がおもしろいかな。

なんか、グダグダしましたがこれで今回のあとがきは終わりにしよう。

あ、そうだ、第二章の章題がムムムといった感じなので、

いい感じの章題が思いついたら、コメントかなんかのところに書いて送ってください。

どうも、じっくりした章題が思いつかなくて困っているんですね。

もし、いいのがあったら使っちゃうかもしれません。

まあ、いつもより長い後書きですが、

なにはともあれ、これからよろしくお願いします。

「で、二人は教会の修道女さんと話していて遅れたということなんですか？」

結局補習に遅れた神無月と上条は小萌先生の前で怒られていた。

小萌先生とは、月詠小萌つぐよみこもえという名前の神無月と上条の担任である女先生で教える科目は化学だ。ばけがく

そこまでは普通なのだが、この先生、以上に背が低い、というより見た目が子供しかも小学生くらいにしか見えない。

身長は一三五センチで、そのまま小学校に行っても絶対にばれない。もちろん大学を卒業後学校の先生となったため、実年齢は二〇歳を確実に超えているはずだ。

ちなみに身長だけでなく、肌の張りも小学生レベルらしい、そのことで他の女先生にも羨まれているそうだ。

学園の七不思議にも登録されているくらいの幼女先生で一部では学園都市の老化防止技術の結晶などと言う噂も有るほどだった。

「こ、小萌先生、確かに話を要約するとそうですけど、そんな一言じゃ表せられないほど色々あったんですよ」

「そうですね。俺の右手の幻想殺しがシスターさんの服をぼもがぁ」
イマジンプレイカー

「はい、当麻は黙ってて、話が余計にややこしくなるから」
余計な事を口走りそうになった上条の口を神無月は手でとっさに塞ぐ。ふさ

「じゃあ、なにがあったのか先生にもきちんと説明してほしいのです」

「・・・まあ、一つ目は当麻と登校しようと思ったら、当麻の股間

（声を大きくして言った）に清掃ロボットがぶつかってビクンビクン（さらに声を大きくして言った）と悶絶していたのを介抱したりしていました」

「な・・・っ！」

小萌先生は顔を真っ赤にして俯うつむいてしまった。

小萌先生はそういう話題に耐性がない。

すぐに顔を真っ赤にして恥はずかしがる事が予想できていたため、神無月はあえてこの話題を最初に持ってきた。このお説教を出来るだけ早く終わらせるために。

「じゃあ、二つ目に――」

「も、もういいのですー！ 分かりました、色々あったんですね。それは大変だったのです」

二つ目の話題の内容を実は考えていなかった神無月としてはここで切り上げてもらえたのは計画通りと言える。

「じゃあ、か、上条ちゃんは席に戻ってもいいですよ」

・・・上条ちゃんは？

神無月はこれでお説教が終わると考えていたのだが、その当ては外れた。

「ごほん、今日の遅刻の事を抜いても、先生は神無月ちゃんには言いたい事があるのです」

「えっと、先生？ 特に怒られるような事は――」

「ずっと、超能力者レベル5の力を隠して手を抜いていましたねー？」

有無を言わさぬ声で言う小萌先生の言葉に返す言葉のない神無月。

小萌先生は笑顔なのに全く笑っていない。

確かに教師からすれば、手を抜いていたと言うとはサボっていたと言う事であるからして怒られて当然なわけである。

「神無月ちゃん。先生は神無月ちゃんが超能力者レベル5だって知っていても嬉しいのです。でも、今までの成績が悪かったのはわざとわざとサボっていたって事ですよね。そうですね神無月ちゃん

？」

神無月には、小さな小萌先生の体の後ろに東大寺南大門の金剛力士像が見える気がしていた。

「いや、あれですよ。俺にも事情が——」

という、神無月の言い訳を小萌先生は手で制した。

「いいですよ。事情があると言うのであれば、先生はそれをわざわざ聞こうとは思いません。でも、分かっていると思います。が補習はちゃんとあるのですよ？ スケスケ見る見るとコロンプスの卵とカラーテレパスは？」

「ちょ、ちよつと、待つてください。スケスケ見る見るとコロンプスの卵までだったら俺の能力の応用で何とかありますけど、カラーテレパスは完全に俺に出来る系統の力じゃないんですけど！？」

スケスケ見る見ると言うのは、目隠しポーカーで一〇回連続勝利するということです、普通は透視能力専攻のカリキュラムだ。
クレアボイアンス

まあ、神無月はカードに描かれた模様によって起こる微細な重力負荷の違いを読み取ってカードを当てる事が出来るため、問題がない。また、コロンプスの卵は逆さにした生卵を、なんの支えもなく机の上に立ててみるというものだ。

これも、念動力の専攻のカリキュラムでかなり難しい。
サイコキネシス

念動力を使う能力者であっても力加減を失敗すれば卵が割れてしまうというもののだが、これも神無月は重力制御でどうとでもなる。しかし、問題はカラーテレパスだ。

これは念話能力の専攻カリキュラムで、相手の思い浮かべている色を読み心によって当てると言うものだ。
テレパス

これはかなりレベルの高い念話能力にしかこなせない課題で少なくとも相手の心を読むことのできる力が必要とされている。

いくら神無月が超能力者^{レベル5}であつても、重力をどう制御したって相手の心が読める訳がない。

精神感応系の課題は出来るかどうか試してみるという次元にはなく、まず無理というのが神無月の言だった。

しかし、怒った小萌先生は無情にも笑いながら、

「神無月ちゃん」 出来る、出来ない、ではないのです。 やるんですー」

だった。

これ以上の説得は無理と感じた神無月は、溜息をつく、いつもの上条のようにこう締めくくった。

「不幸だ」

「じゃあ、授業始めますよー。 神無月ちゃんと上条ちゃんが遅れてきたせいで時間も押しているので、プリントを早く回してほしいのですー」

小萌先生にさりげなく責められた。

神無月としては、確かに遅れてきたのは悪いとは思うのだが、どうにもならない理由ではあったと思っている。

そんなちよつと納得いかない神無月に青髪ピアスの学級委員が後ろの席から肩を叩いた。

「なあ、ユウヤん？」

「ん？ なんだよ？」

「小萌センセに説教くらうとハアハアせーへん？」

「アホか！ 誰からも認知されていない学級委員と同じ趣味嗜好の持ち主はこのクラスには居ない！ これ以上精神感応系の特別課題を出されたら俺の夏休みはそれだけで終わっちゃうんだよ、分かれっ！」

「なっ！ 誰からも認知されてへんなんて事はあらへんよ！ そうやろ、カミヤん？」

「ん、ああ・・・」

「カミヤん？」

上条は心ここに有らずと言う感じで窓の外を眺めていたところをい

きなり青髪に呼ばれて適当な返事をした。

そして、再び窓の外を眺めるのに戻ってしまった。

そんな上条を見て、神無月は溜息をついた。

（明らかに、さっきのシスターさんのこと考えてるな・・・当麻の右手に反応したって事は何らかの異能の力で作られた服だったってことだし、そう考えてみると、やっぱりあそこで一人行かせたのはまずかったかもしれないかも。学校に連れて来る訳には行かないから俺たちがサボってでも一緒にいるべきだったか・・・

。当麻も同じようなこと考えてんだろうな。まあ、フードを当麻の家に忘れていったわけだし、取りに戻ってくるだろ）

そんな事を神無月が考えていると、不意に上条が窓の外をぼんやり見ながら、

「・・・何だっただろうな？」

と誰に問いかけるでもなしに呟いた。

（ホントにな・・・）

神無月も上条の問いかけに答える事は無く、心の中だけで同意した。そんな少ししんみりした空気が流れたその瞬間、

「センサー？ 上条くんが窓の外の女子テニス部のヒラヒラに夢中になってまーす」

もちろん、これは神無月のSっ気が発動して上条を貶めようとしたわけではない。

上条が窓の外を眺めているのを見て、女子テニス部のヒラヒラに夢中になっていると勘違いした青髪ピアスの学級委員が自分の位置からは女子テニス部のヒラヒラが見えにくいからという至極自分本位な理由で上条を生贄にしたのだった。

当然のことながら、上条は女子テニス部のヒラヒラを見ていたわけではない。

しかし、周りの人間からそんなことが分かるはずもなく、上条の意

識が教室に戻って来た時には、既に教室の中では上条が『女子テニス部のヒラヒラに夢中になって授業を聞いていなかった』という認識が確定してしまっていた。

世論は確定してしまえば、それがどんな偽情報だとしてもどうする事も出来ないというこの世の中の縮図を見た気がした神無月だった。
「・・・・・・・・、」

神無月は、上条から教室の前へと視線を変更すると教卓の前で小萌先生が泣きそうな顔で沈黙している。

小人（間違っても『こびと』と読んではいけない）の人権を守るべく、教室中から敵意ある視線が上条に突き刺さる。

上条はいきなりの事態に縮こまることしかできない。

朝から神無月に落雷の件を責められ、不幸に見舞われ、教室でもこれでは流石に可哀想だと感じた神無月は上条を助ける一手を投じるために立ちあがる。

「先生！ 大丈夫です。 当麻もちゃんと授業を聞いてくれる方法がありますよ！」

「ほ、本当ですか!？」

さすが、一部では教師の鑑とまで言われる小萌先生、うまく食いついてくれたと神無月は思う。

「はい。 絶対の自信があります」

「そ、それはどんな方法なんです?」

神無月は大きく息を吸い込み、一呼吸溜め、はつきりと大提案をする。

「先生も女子テニス部の衣装に着替えてくれればいいんですよ！」

教室が静止する。

次の瞬間、この後どうやって、神無月を仕留めるか女子全員が神無月を睨む。

そして、今後の行方を見守るために欲望と期待の籠った視線で男子

全員が小萌先生を凝視する。

そして、男子の視線を一身に受けている事に気がつかない小萌先生は、

「！！！！ 確かにそれはそうですね！（小萌先生）」

納得した。

「！！！！（クラスの皆）」

何事も自信満々に説明すると、それがあたかも真実であるかのように説得できると言う証明が今ここに成り立った。

そして、小萌先生は教室の扉に向かうと、

「じゃあ、先生ちよつと着替えてくるので皆はその間あいだ自習あひだしていてくださいー」

そう言うのと、ガラガラという扉の閉まる音を残して小萌先生は教室を出て行った。

先生の声と扉の閉まる音が無くなるとに静まり返る教室。
しかし、それも一瞬だった。

「ひゃっほー！！ さっすが神無月だぜ！！！」

「俺たちにできないことを平然とやってのける、そこに痺しびれる憧あこがれるー！」

「師匠すへって呼ばせてくれー、そしてその巧たくみな話術わげを、人心じんしんを操あやつ術すべを俺にー！」

「あの流れから小萌センセにテニス部のコスをさせるなんて、僕あ、僕あ、感激やー！！！」

と男子達（もちろん青髪ピアスも）が騒ぎ立て、

「神無月！ 貴様そこになおれっ！ 先生は純粹だから、貴様のいかがわしい要求をすんなり呑んでしまったじゃないっ！ 同じ女として許せないわ、正義のためにここであたしに討たれなさいっ！」

「そうよ、そうよ、討たれなさいよ！」

「討たれなさいよ！」

「今、貴様の首を取りに行くからそこから一步も動くんじゃないわよ！」

「動くんじゃないわよ！」
と女子がというより主に吹寄制理ふきよせいりが叫ぶ。

吹寄以外の女子には同調する以外の意見は無いのか！と思いつつも口には出さない神無月。

これ以上刺激して、攻撃が激しくなる事だけは避けたいのだ。

だが、そんな神無月の不安に反して、吹寄を先頭とした女子集団は神無月のところまでたどり着けない。

なぜなら、

「神無月を守れーっ！」

「俺たちに残された唯一ゆいいつの希望を守るんだ！」

「死守しろっ！ここを突破されたら、戦線は一気に瓦解がかいする！」

「俺、この戦いで生き残ったら小萌先生のテニス姿を見るんだ」

と、男子軍が女子の圧倒的な攻めから神無月を守っていたのだった。

「くっ、このっ、なんなのこの異様な男子の結束力しゅうりきは！神無月、

貴様、過ちを償あやまう気があるのならこちら側に出頭しゅつとうしなさい！」

「はっ、神無月はそっちに行かせない！神無月は俺たちに癒いやしと言おんけいう恩恵おんけいを与える云いわば神！女子たちに差し出し、犠牲ぎせいとさせる

通うりたりは無い！」

もう、すでに教室内は男子対女子と言う戦争に発展してしまっている。

こうなれば神無月にも止めようは無い。

しかし、神無月としては止めるつもりは全くなかった。

なぜなら、こんな混沌カオスなとした教室だが、これでこそその一年七組だと思おもうからだ。

そして、そんな騒がしくも楽しい教室の雰囲気ふんいきが神無月は大好きだった。

その頃の水穂機構病院では、木山春生と名乗った大脳生理学者によつて、学生たちが突然意識を失うという現象の原因究明が行われていた。

そして、美琴と白井もその事件の調査でこの病院に来ていたため木山春生の診断を長椅子に腰かけながら待っていた。

「ZZZ・・・」

「アツイ・・・」

美琴は昨日の『能力使用』と上条を追いかけての『朝までマラソン』の疲れから、ジリジリと体を蝕む砂漠のような暑さの中でも爆睡、白井は暑さのため美琴のように寝る事も出来ず、かといって帰るわけにもいかなので手で顔を団扇うちわのように煽あおいで気休め程度の風を起こしていた。

これでは病院内で熱中症にかかるという、病院の意義を疑われるような事態にもなりかねないのでは？と思いつつ白井が木山春生の診断を待っていると、廊下のドアが開き中からどつと医者や研究員が出てきた。

「お姉さま、終わったみたいですわよ」

「んん・・・」

白井は横で眠りこけている美琴を揺らして起こそうとするが、疲れのためなかなか起きない。

「起きて下さいな、お姉さま」

肩をゆすつて起こそうとするも首をカクンカクン揺らすだけで『くー』と眠ったまま美琴は一向に覚醒しない。

「おね・・・」

不意に白井が美琴の顔を見ると、美琴は目を瞑ったまま口を少し開けた状態で寝ている。

見ようによつては、この状況はキスを待っている少女の顔にも見える。

しかも、美琴は眠ったまま。

（チャンスツツツ！）

「では、ここは一つ目覚めのキスで・・・」

眠っている美琴の少しあいた唇目掛けて白井が顔を近づけていく。すると、自らの危機を悟ったのか今まで揺すっても全く起きようとしなかった美琴が突然目覚めた。

目覚めた美琴の目の前には、キスをしようとしてくる後輩の顔。

『ゴツ！』

次の瞬間には美琴は椅子から立ち上がり、自分の貞操を狙う後輩の頭頂部に拳骨を一発入れていた。

「普通に起こしなさいよ！」

「起きなかったではありませんの〜」

二人の周りでは診断を終えた医者や研究者の方々がいる訳で・・・

「女の子同士で・・・」

「そう言う関係？」

と小声で話し合っている。

もちろん本人達は聞こえないように言っているつもりかもしれないが美琴達にもその声は聞こえている。

美琴は顔を赤くしながら、

「変な誤解受けるでしょーが」

と怒るが白井は反省なしで呟く。

「既成事実^{きやまはるみ}は周りから築き上げていくものですよ」

『ゴツ！』

「顔洗ってくるわね」

と立ち去っていく美琴の後ろで白井はたんこぶの上にもう一つたんこぶを作って、痛みに頭を抱えた。

そんな白井に声^{ジャツジメント}が掛けられた。

「君が担当の風紀委員^{きやまはるみ}なのかな？」

その言葉とともに、木山春生と白井黒子の情報交換が行われた。

木山が伝えた内容は、

・昏睡状態の学生たちからデータは収集できた

・ 治療は医者ではないからできない

・ 木山の専攻はA I M拡散力場

で、白井は木山に、^{レベルアップバー}幻想御手の存在を伝えた。

しかし、^{レベルアップバー}幻想御手の形状も使用方法もまだなにも分かっていないため、白井が木山に伝えられることは^{レベルアップバー}幻想御手というものがあるらしいということだけだった。

そして、ここは暑いという理由で木山が脱ぎだしたりするので、空調の動かない病院から近場の喫茶店に移動して話を続けることが決まった。

ちなみに、この病院の冷房が動かないのは昨夜美琴の起こした落雷によって送電線が切れたものだというのを誰も気が付かなかったのだった。

「さて、先ほどの話の続きだが――」

喫茶店に移動した美琴と白井は木山のテーブルを挟んだ向かいに座っていた。

「同程度の露出でも、なぜ水着はよくて下着はダメなのか――」

「いや、そつちでなく」

いきなり、話が脱線しそうになった美琴と白井は木山に突っ込みを入れた。

しかも、本人にボケたつもりはないらしく「アレ？」などと言って頭の上にはなマークを浮かべている。

美琴は、天然つぷりを遺憾なく^{いかん}発揮する木山に不安を覚えつつも脱線した話をレールの上に戻す。

「・・・話をまとめますと、――」

・
・
・

「あ——つまり、ネット上で噂の『レベルアップ幻想御手』なるものがあり、君たちは昏睡した学生と何か関係があるのではないか——と考えているわけだ」

「はい、上のほうでは学生に注意を呼びかけるという案も出たのですが、まだ実在もつかめていないうえ、情報を開示すればさらに『レベルアップ幻想御手』の拡大に繋がる恐れもあるので現状では公表を見送り、実態の調査をすることになりましたの」

「・・・ふむ」

木山は注文したアイスコーヒーにミルクを入れ、ストローでかき混ぜながら、考えを話す。

「君たちの考えが正しいなら妥当な判断だといえる。能力の上昇する話だけが独り歩きしてしまったら、それこそ被害は拡大し、今以上の被害になるに相違ない。で、そんな話をなぜ私に？」

「能力を向上させるということは、脳に干渉するシステムである可能性が高いと思われます。ですから——」

「『レベルアップ幻想御手』が見つかったら私に調査してほしいと」

「はい」

白井と木山の間で交わされる話し合いに美琴は口をはさむ機会がありません。

しかし、白井が真剣にジャッジメント風紀委員の仕事をしている姿を見れて、美琴としては安心とうれしさが混ざったような気持ちでもあった。

「構わんよ。むしろこちらから協力をお願いしたいところだ」

「ありがとうございます」

「ところで、さっきから気になっていたんだがあの子たちは知り合いかね？」

木山の質問で美琴と白井がすぐ横にある窓に目を向けると、そこにはガラスにべったりと張り付く佐天とその後ろで美琴たちに向かつて『どうも』という感じでお辞儀している初春がいた。

そんな二人を、テーブルに呼ぶと、真剣で少し張りつめた感じの空気があつという間ににぎやかなお茶会になってしまった。

「へ——脳の学者さんなんですか——」
「宜しく」

初春はポケッとした表情で聞き、木山は相変わらず眠そうな顔で答える。その隣で佐天はでにやけながらパフェをうれしそうに食べている。

「なぜ、そのような方とお茶を？ 白井さんの脳になにか問題が？」

素で訊ねてくる初春に白井は、『頭に花を載せているあなたに言われたくありませんの』というように初春をジト目で見ながら、

「『幻想御手』^{レベルアップバー}の件で相談していましたの」

と、人前ということもあり初春への折檻は行われなかった。

そんな白井の言葉に佐天は、

「『幻想御手』^{レベルアップバー}ですか？ それなら私——」

と音楽プレイヤーを前に出したところで、

「『幻想御手』^{レベルアップバー}の所有者を探して保護することになると思われますの」

という白井の言葉で佐天は次の言葉が出せなくなった。

「なぜですか？」

今日のことを何も知らない初春は白井に尋ねる。

「まだ調査中ですのではっきりしたことは言えませんが、使用者に副作用が出る可能性がある事、そして急激に力を付けた学生が犯罪に走ったと思われる事件が数件確認されているからですの」

「は——そうだったんですか・・・？ どうかしましたか佐天さん？」

「えっ？」

白井の話を聞いた佐天は、^{レベルアップバー}幻想御手を持っているとは言えなくなり、
「や、別に・・・」

急いで前に取りだしていた音楽プレイヤーを後ろに隠した。

『コン』

佐天は急いで腕を後ろに引っ込めたので、その拍子に右腕が隣に置いてあったコップに当たり中身のアイスコーヒー（ミルク入り）が

木山のストッキングを染めた。

「ああ！ す、すみません！」

「いや、気にしなくていい。 かつたのはストッキングだけだから脱いでしまえば・・・」

言うが早いか木山は早速ストッキングを脱ぎ出した。

美琴や初春・佐天・対応しようとしていた男の店員も顔を真っ赤にして絶句する。

「だゝから、人前で脱いじゃダメと言ってますでしょうが！」

白井だけが周りを気にせず脱ぎ出す木山にいち早く注意をする。

「しかし、起伏に乏しい私の肢体を見て劣情を催す男性がいるとは思えな——」

「趣味嗜好は人それぞれですのっ！ それに殿方で無くても歪んだ情欲を抱く同棲もいますのよ！」

それを見ていた美琴・初春・佐天は、

（アンタがそれを言うか・・・）

（白井さんが言えることではないような・・・）

（ぬ、脱ぎ女・・・？）

などと言っ感想を持った。

・
・
・

その後、話もあらかた終わったところで完全下校時刻も近いと言う事で解散と言う事になった。

「お忙しい中ありがとうございました」

白井と初春が頭を下げると、木山はとんでもないと手を振った。

「いや、こちらこそ色々迷惑をかけてすまない。 教鞭を振っていたことを思い出して楽しかったよ」

「教師をなさっていたんですか？」

「昔・・・ね」

美琴の問いに答えると木山は夕焼けの方に向かって歩いて街並みの

喧騒に消えていった。

「んゝなんてゆうか、ちよつと変わった感じの人よね」

「常人とは違う感性が天才を生むんですわ」

「そーゆうものかしらね——」

そういつた瞬間、美琴センサーに反応があつた。

「それじゃあ、あたしはこれで」

「あれ、佐天さんもう帰るんですか？」

「うん・・・ちよつと用事があつたのを忘れてた。　またね」

「はあ・・・」

佐天は、初春の言葉を聞き終わるか、終わらないうちに立ち去ってしまった。

「行っちゃいましたわね・・・あれ、お姉さまはどこに？」

「え、さあ、わたしもないことに今気が付きました」

「おねーさーさまーさーさー？」

実は、佐天が『「うん・・・ちよつと用事が」というあたりで昨夜散々追い回したにも関わらず逃げられてしまった当麻を発見したため追いかけて行ってしまったのだった。

「ああ~~~~、つぷー、疲つかれた~~~~」

と神無月が伸びをしながら、空を仰ぐと、その隣で上条が、

「・・・不幸だ」

と呟いた。

夏休みの補習一日目が終わり下校中なのだが、すでに空は真っ赤な夕暮れになっていた。

補習なのに、完全下校時刻まできっちり拘束こっそうされたことに少し不満を抱えつつ二人は下校していた。

あの後、数で勝るが相手は女の子と言う事で手が出せない男子軍は、数では劣るが攻撃し放題の女子軍の前に少しずつ倒れていく人数を

増やしていった。

そして、ついに神無月に女子たちの攻撃が届こうかと言う時に、
「みなさ〜ん、先生着替えてきたので、授業を再開するのですよ〜」
と、女子テニス部の姿（ヒラヒラ付き）に着替えた小萌先生が帰ってきたのだった。

すると、地に倒れていた男子達は、

「フオ〜〜〜〜〜〜〜〜〜U！ テニスだと！ 青春じゃないか〜！」

「祈りは届く！ 俺たちの聖戦はこれからだっ！」

「奇跡は起きる、起きるんだ！」

「勝てる！ 神無月さえいれば、この世の不条理全てに！」

そう言つて、倒れていた男子全員が立ち上がり神無月への女子たちの攻撃は届かなかった。

「クッ、こういう事なの、一度倒したはずなのに、神無月、貴様、何をした！」

その頃になると、神無月もノリノリで悪役に徹して、

「ははははは、どうやら、最終兵器小萌先生が間に合ったようだな！ すで
に我が軍の兵士は死なない！ 小萌先生がいる限り、何度でも蘇よみがえりり
続けるのだ！」

そして、再び落ちる戦いの火蓋ひがた。

困ったのは、小萌先生だ。

帰ってきたら、教室で男子の大半が倒れていて、自分の姿を見つけないなり奇声きせいを上げて立ちあがり、教室内戦争がおつ始まったのだから。

「み、みなさ〜ん、席に戻ってくださいー！ 先生、戻ってきたので、授業始まるですよー」

能力こそ使われていないものの教室を真つ二つにした一大抗争だ。そうそう、止まるわけもない。

そのうえ、先生がオロオロと行ったり来たりするたびにテニスのヒラヒラ（今さらだが、テニスの短いスカートのこと）の下から見える見せパン、もといアンダースコートがチャリズムを形成し男子の

熱気がさらに加速する。

「ヒーハー！」

「グッパン！（Good Pants!）」

「Forooooooooooooooooオオオオオ雄雄御御皇！」

・

・

・

そんなこんなで男子対女子による抗争の終戦協定が結ばれた時にはお昼を過ぎていたのだった。

補習が始まったのは、朝早くだったにも拘らずだ。

その後、補習が行われ、補習の補習として、上条は『すけすけ見る見る地獄』、神無月は『カラーテレパス地獄』に落ちた。

そして、現在に至る。

「ま、なんだかんだで、楽しかったからいいんじゃないのか？」

「有真は、無傷だからいいかもしれないけど、上条さんはボロボロなんです！」

男子対女子の戦いにおいて、上条はほとんど参加していなかったにも関わらず、一番攻撃による被害を受けた。

なんとというか流石は当麻だ、と言ったところだ。

「改めて感心するな、当麻の不幸っぷりには。助け舟を出したのに、それが回りまわって当麻をボロボロにするって、凄いな、予想の範疇を逸脱しすぎて俺はびっくりだ」

「・・・上条さんは、この不幸な現実を受け止められません」

「まあまあ、今日の分の不幸はもうないだろうから安心してゆっくり過ごせばいいと思うぞ？」

「あつ、いたいた。この野郎！ ちょっと、待ちなさい！ 止まりなさいってば！」

・・・という事だろう。

常盤台中学の制服に茶色の髪をショートカットにした女の子が当麻に向かって暴言をもって話しかけようとしているように見える。

うん、美琴先生ですね」

確か、当麻は夜中にかけて美琴から逃げ帰って来たはずだ。

つまり、当麻が今見つかると言う事は、当麻はまた電撃と共に追ってくる美琴から逃げなきゃイケない訳で・・・ここまで上条の不幸が続くと神無月ももう笑うしかない。

しかも、ヒートアップしている美琴は完全に神無月の存在に気が付いていない。

「・・・あー、またかビリビリ中学生」

「ビリビリ言うな！ 私には美坂美琴ってちゃんとした名前があるのよ！ いい加減覚えなさいよ！」

・・・当麻の不幸っぷりも分かるが、これは単純に当麻の対応の仕方の問題があるって言うのも原因の一つからぬぐいされねえよ。

「あー、はいはいそうだね。で、何の用なんだビリビリ、上条さんは今日不幸続きでもうお前の相手まで出来そうにありませんが？」

「ア、アンタはーッッ！ 言ってるそばから覚える気が全くないのかーッッッ！」

叫んだ美琴の前髪から上条一直線に雷撃の槍が飛んだ。らいげきのやり

『ドバアアアン』という凄まじい音と空気の振動に周りの通行人が一斉にビクッと飛び上がる。

雷が間近で落ちたようなもので当然の反応だ。

しかし、そんな中でも周りとは明らかに違う反応を見せる人間が二人。

まあ、当然のごとく神無月と上条だった。

美琴が撃った雷撃の槍は、神無月の絶対重力を纏った右手に吸い込まれ、雷の発射された余波だけが空気を震わせたのだ。らいげきのやり

もちろん、上条には雷撃の槍は当たっていない。らいげきのやり

「はいはい、そこまでだ美琴。こんな街中で雷をパンチ感覚でポコポコ撃つな、危ねえだろ」

美琴を制する神無月の後ろで上条は叫ぶ。

「っていうか毎度のことながらいきなり、何すんですかー！」

「何すんですかじゃねえよ。今は明らかに当麻が悪いだろう。

対応がいいかげん過ぎる、ありや誰だつて怒るぞ。 美琴もだ、雷打つんなら場所を考えて使えよな」

「ゆ、有真・・・？ えっ、アンタいつからいたの？」

「やっぱり、気付いてなかったのかよ・・・。 始めっからだ、美琴が当麻に話しかける前からずっとここにいたぞ」

「そ、そうだったんだ・・・ちよつと熱くなっちゃって気がつかなかった。 そうだ、^{レベルアップ}幻想御手の続報なんだけど、こないだの爆弾魔が意識不明になったつてのは知ってる？」

「は？ いや、初めて聞いた。 つて、今のところあいつしか^{レベルアップ}幻想御手の手掛かりがないのに不味くないか？」

「うん、だから大脳生理学の専門チームに協力を要請して調べてくれる事になったから新しい情報が入り次第分かんと思う」

そんな真剣^{マジ}モードの二人に、

「つて、有真とビリビりはさっきから何の話をしてるんだ？」

「あつ・・・」

神無月は上条の隣で^{レベルアップ}幻想御手について話し始めてしまった事に今さら気が付いた。

やべ、すっかり当麻の事を忘れてた。

ここで説明すると、当麻の事だから確実に首を突っ込んで酷い目に逢うよな。

そんなことは未来予知の能力が無くたって分かるぞ。

当麻の力を借りなきゃならないほどにひつ迫しているわけでもないし、わざわざ巻き込む必要もないか。

「ん、いや、なんでもない。 ちよつとしたゲームの話だ。 な、美琴」

「はい？ 何言つてんのゲームなんかじゃ・・・。（昨日俺のいえに雷が落ちて電化製品が全滅したなあ、そういえば昨日誰かが雷を落としまくつてたなあ、誰だったかなあ？）・・・、ゲームだったわね。 いや、^{レベルアップ}幻想御手はこのダンジョンで手に入るア

アイテムだったかしらね？（汗）」

美琴が真実を告げそうになるも、神無月は美琴にしか聞こえない小声で美琴を脅し上条に真実を悟らせない。

「へえ、有真もゲームやってるんだな、知らなかった。金は全部甘い物に使ってるのかと上条さんは思ってた」

「俺だってゲームくらいやるさ、PSP（Personal Spectacle Portable）の新しいゲームでなかなか面白いてネットで騒いでたから買ってみたんだけど、これが結構面白くてさ、んで美琴もやってるって言うってたから色々情報交換してたんだ」

そう言つて、神無月は美琴に目配らせする。

「う、うん、そう、そうなの、あ、あははは・・・」

そう言いながら美琴は、心の中でよくこんな嘘八百を次々並べられるなあと感心半分呆れ半分のコメントを呟いていた。

ちなみに、神無月が口にしたゲームのハードは売っていない。

それどころか、そんなものは存在しない。

この場を乗り切るためだけのでっちあげだが、上条はそんなゲームあったかなあと首をひねるが、まあ俺の知らないゲームだろうという思考に至ったようだ。

そして、上条がこの話題にもう一度入る前に神無月は素早く話題を変える。

「思ってたんだけど、俺まだ美琴の携帯のアドレス知らないんだが、教えてくれないか？」

「！　そ、そう言えばそうね。　じゃあ、携帯出して、私が赤外線でアドレス送るから」

「はいよ・・・お、きたきた。　へえ、これが美琴のアドレスね。

・・・よし、登録完了。　じゃあ、今度は俺のを送るぞ」

「あ、ちよつと待って、受信モードに切り替えるから。　はい、いつでもどうぞ・・・うん、来た、登録つと」

「OKな。　・・・（美琴、詳しい事はあとでメールで送っ

てくれ、ここじゃあ・・・」

「・・・・・・（うん、分かってる。巻き込みたくないんでしょ？それに前回アイツのせいで聞き込み失敗しちゃったし、私としても巻き込まない方に賛成）」

小声で話し合った神無月と美琴は、

「なあ美琴、今日は用事があるとかって言ってなかったか？」

・・・

（って、今のはない、自分で言ってるんだけど今の棒読みはない・・・）

自分の台詞の棒読みさ加減に死にたくなっている神無月に続いて、

「そ、そう！これから、用事があるんだった。忘れてた。思い出させてくれてありがとう。じゃあまたね」

・・・

美琴も美琴で台詞が棒読みだった。

「おう、じゃあな」

「またな、ビリビリ」

棒読み過ぎる神無月と美琴、普通ならば違和感のないはずが無い会話だが上条は気にしなかったようだ。

ここだけは上条の鈍感スキルに感謝。

いざというときはかなり切れるのに何で普段はここまで鈍いのか不思議に感じる。

「ま、なにはともあれ帰るか」

「そうだな」

そう言つて、神無月と上条は歩き出す。

「なあ、帰ったら家の玄関の前であの子がフードを探しに来てるんじゃないか？」

「確かにそうかもしれないな、なんか玄関の扉の前で体育座してこちをムツとした半眼で睨んできそうな気もするな」

「・・・想像しても全く違和感がない」

「そういうシチュエーションは当麻的にどうなんだ」

「・・・コメントを控えさせてもらいます」

コメント随時受付中です。

いや、もつと更新速度を上げてくれって言われて書いていましたが、それでも3週間くらいかかってしまいました。

2週間で書いてくれって言われたのになあ。

もつと頑張れば早く上げられた気がするなあ・・・

キャラ崩壊がパナいかもかもしれませんが、

お付き合いいただけたら幸いです。

もう、ちょっと携帯アドレス交換時の美琴先生を

テンパらせたかった！

また、変更してあげるかもしれません。

でも、当面は物語を先に進めることに重きを置いていきたいと思えます。

それでは、また次回のあとがきでお会いしましょう。

コメントをお願いします。

ちなみに今回は学校のパソコンでの掲載・・・（授業中）

皆さんは授業はしっかり受けましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4837r/>

とある魔術の絶対重力 - ブラックホール-

2011年12月15日09時47分発行